
金の満月が昇る時

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の満月が昇る時

【Nコード】

N8121X

【作者名】

灯里

【あらすじ】

満月でなくていい、三日月でもいいから、せめて貴方の傍に居させて下さい。

……誰に否定されたとしても私は生きることが望んでいいですか？

テイルズオブヴェスペリア原作沿い二次創作小説。

自サイトより加筆、修正したものを掲載しています。

オリジナルキャラが登場します。設定は濃いです。傾向としてはシリアスで友情重視、ユーリ寄り。

オリキャラ設定（前書き）

ネタバレに注意してください。

オリキャラが使う術や技も本編にないものがあります。

オリキャラ設定

エリシア

『たとえ誰に否定されても、私は……生きていたい』

名前：エリシア・クレセント

年齢：18歳

身長：163cm

武器：クレケンスルーナ（魔銃）

サブ：スロウナイフ

クラス：魔銃士

愛称はエリィ。薄紅掛かった金色の髪と満月色の瞳を持つ少女。遠距離、中距離から銃によるサポートは勿論、攻撃魔術や治癒術も心得ている。

一人称は私。ギルド“獅子の咆哮”の首領、レオンの娘でレイヴンとは顔見知り。魔導器を使わずに治癒術や魔術を操ることが出来る。

性格はお人よしで、基本的に厄介事には首を突っ込む。が他人の気持ちを考える事を忘れず、場合によっては一歩引いた態度を取ることも。

ユーリいわく彼女もほっとけない病らしい。幼くして母を亡くしたためか料理が得意。

以下、術・技設定です。

特技・奥義

アクアレーザー

地を這う水流を直線に放つ特技。水流は敵を貫通する。

グランドクエイカー

地を揺らさんばかりの純粋なエネルギーの奔流を大地に叩き付け、地割れを起こす特技。

ヴォルトアロー

凝縮した雷を放つ特技。放たれた光は紫の軌跡を描き、敵を追尾する。

ノクターナルライト

打ち出した光で敵を貫く特技。光は敵を貫通する。変化↓（ライトバースト）

ツインバレット

二丁の銃を連射する特技。変化↓（フォースバレット）

グラビティダウン

放たれた闇を結晶化し、槍に変えて対象に突き刺した後、重力の檻を発生させる特技。

ストームワルツ

連続でスロウナイフを投擲した後、凝縮した風を解き放つ奥義。
変化↓（シルフィードローア）

フレアフォース

敵を貫通する極太の炎のレーザーを放つ奥義。

クリスタルレイ

氷のエネルギーを天に放ち、絶対零度の氷の矢を雨の如く降らす奥義。

変化↓（セルシウスクラウン）

プリズムバレット

鳥の形を取った光を打ち出す奥義。光は対象に触れた瞬間、爆発する。

バーストアーツ

アストラルライン

出力を最大限まで高めて凝縮したエネルギーを放つ。光は直線を描き、触れた敵にもダメージ判定あり。

ボルカニックライン

光が炎に変化。ヒット数が増加。エネルギーが通過した後に爆発する。

フリージングライン

青を帯びたエネルギーを放ち、触れた敵を凍結させる。

エアリアルライン

風属性がついた『アストラルライン』。衝撃波で敵を吹き飛ばす。

ジオニツクライン

光に触れた敵をクリスタルに封じ込めた後追撃を放ち、破壊する。
破片にもダメージ判定あり。

術

ファーストエイド

味方一人の傷を癒す下級魔術。 変化↓（メディテーション）
「聖なる活力、ここへ」

ヒール

味方一人の傷を癒す中級魔術。 変化↓（ヒールウィンド）
「燦然たる癒しの光を」

キュア

味方一人のあらゆる傷、怪我を治す上級魔術。 変化↓（フェアリースークル）

「其は命脈を繋ぐ明澄たる光華」

レイズデッド

味方一人を瀕死状態から回復させる上級魔術。
変化↓（リヴァイヴ）

「彼の者を死の淵より呼び戻せ」

リカバー

味方一人を状態異常から回復させる下級魔術。変化↓（レストレ
ーション）

「卑しき病みよ、退け」

ナース

御使いが齎す聖なる光によって味方全員を癒す中級魔術。変化↓
（ナイチンゲール）

「白き天の使い達よ、その微笑を我らに」

リザレクション

強大な癒しの法陣を具現化させ、範囲内の味方を癒す上級魔術。
「万物に宿りし生命の息吹をここに」

ホーリーソング

味方全員の攻撃力と防御力を上昇させ、体力も回復させる上級魔
術。

「響き渡るは玲瓏たる天使の歌声」

デルタレイ

光球を三つ作り出し、敵一体を攻撃する下級魔術。
「鮮やかなる光珠、敵を討て」

クリスタルアーク

光輝く水晶の枢に敵一体を封じ込め、炸裂した破片で攻撃する下
級魔術。

「深淵にて佇む煌姫、彼の者を永遠の眠りに誘え」

ウィンドカッター

風の刃で敵を切り裂く風属性下級魔術。変化↓（フランベルジュ）
「舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け」

レイ

幾筋もの光柱を発生させて攻撃する中級魔術。
「澄み渡る明光よ、罪深きものに壮麗たる裁きを降らせよ」

シャイニングスピア

輝ける光の槍を顕現させ敵を貫く中級魔術。変化↓（ブリリアン
トランス）

「仇為す者には光輝なる槍を」

トラクタービーム

範囲内の全ての敵を持ち上げ、地面に落としてダメージを与える
中級魔術。

「水天の境を見失いし業深き者よ。我が罰を示さん」

エアスラスト

圧縮した風の球体に敵を封じ込めて切り裂く風属性中級魔術。変
化↓（フラムルージュ、アクエリアス）

「悠久を旅する優風、今此処に楔を打ち下ろせ」

グランドクロス

光の十字架で邪悪を滅ぼす上級魔術。変化↓（インブレイズエン
ド）

「聖なる十字よ、悪しき魂を滅ぼさん」

ジャッジメント

神の名の元に汚れた魂に裁きの光を降らせる火属性上級魔術。変

化↓（クラストーレイド）

「煌翼を纏いし星辰の女神よ、不浄なる魔を滅せよ。降り注げ光の雨」

ゴッドブレス

天空に描いた魔法陣から強大なエネルギーの奔流を落とす風属性上級魔術。

「大いなる蒼穹^{そら}に抗うか小さき子よ、滅びの本懐を遂げるか、天界の審判此処に呼び覚まさん」

プリズムソード

光を纏った煌めく光剣を対象に突き立てる光属性上級魔術。変化↓（ディヴァインセイバー）

「七色の光秘めし聖剣よ、彼の者が背負いし咎と共に貫け」

シャイニングクルス

敵の頭上に十字の光槍を落とす上級魔術。変化↓（クリムゾンノヴァ）

「愚かなる咎人よ、光の洗礼を受けよ」

秘奥義

ビッグバン

創世の光を顕現させ、大爆発を起こす秘奥義。

「創世にして原初の光。女神が紡ぎし力の一欠片。凍て付きし永劫の指針よ、今始まりの時を再び刻め！」

テトラグラマトン

連結させた銃に四大精霊の力を乗せて撃ち出す秘奥義。

「お願い、ウンディーネ、イフリート、ノーム、シルフ——みんな力を貸して。行くよ、クレケンスルーナ、フルパワー！」

プロローグ

この世界、テルカ・リュミレースは決して人にとって暮らしやすい世界ではない。

自然溢れる大地には魔物が徘徊し、街は魔導器の恩恵なくしては存在出来ず、天災一つで容易く滅び去るであろう。

人々の殆どは魔物の恐ろしささえ知ることもなく、シルトプラスティア結界魔導器に守られた小さな世界の中で一生を終えて行く。

そんな世界の東——マイオキア平原の中心に位置する帝都ザーフ
イアス。

下に行くほど家々は粗末になって行き、上になるほど建物は豪華に、華美になっていく。

それは弱き者は虐げられ、一部の人間のみが恵まれた環境を手に入れるという、まるで世界そのものを表す真理だった。

そして一際目立つのが、中央に突き立った剣を囲むようにして広がる純白の光輪。シルトプラスティアこれこそ狂暴な魔物から人々を守る結界魔導器が放つ光である。

結界魔導器があるからこそ、人は魔物の脅威に曝されることなく平和に暮らし、安心して眠ることが出来るのだ。

雲一つない青空を見上げた少女はうん、と背伸びをした。年の頃は十七、八歳だろうか。愛らしい、整った顔立ちの少女だ。

長い睫毛に縁取られた瞳は、天に輝く満月の如き黄金色。そして肩を流れる長い髪は薄紅掛かった金色だ。

服装は白を基調とした服に短いスカート（動き易いように中にスパッツを履いてある）、ロングブーツ。右の耳には赤い宝石が嵌められた金色の耳飾りが太陽の光を受けてちかりと煌めいた。

しかしいつまでもものんびりともしていられない。街道とは言え、魔物が襲ってこないとも限らないのである。

まあ、そうなった時は倒せばいいのだが。少女はそつと腰にあるホルスターに触れ、自らが立つ丘の上から大きな街を見つめた。

この世界唯一の国。その帝都ザーフィアスまではもう直ぐだ。

少女は緩んだ気を引き締めると帝都に向かって歩き出した。

そこで待つ出会いが自らの運命、ひいては世界の命運すら左右することになると、彼女はまだ知るよしもない。

青年は物憂げな視線を外に向けていた。窓枠に持たれ掛かり、足を伸ばした格好は見れば何とも危なそうである。

年齢は推測するに二十歳前後か。背中まで届く艶やかな黒髪に紫掛かった黒い瞳。胸元が開いた黒い服に整った顔立ちの青年だったが、どこか不敵な面構えをしているとも言えるかもしれない。

帝都ザーフィアス。青年がいるのは、その中でも所謂下町と称される場所である。貴族たちが住む街の上段より綺麗な訳でも整っている訳でも当然ない。

だが彼はこの下町とここに住む人々が好きだった。それは生まれ育ったということもあるし、青年の性にも合っているからだ。

その時、青年の隣に横たわっていた白と青の毛並みの大きな犬の体が少しだけ動いた。と同時に階段を登る音がすると、凄い勢いで部屋の扉が開けられた。

「ユーリ！ 大変だよ！」

「でかい声出して、どうしたんだ。テッド？」

青年——もといユーリ・ローウェルは声の主に振り向くことすらしなかった。せずとも声と階段を上がる足音で分かるからである。ユーリはそこでやっと訪問者に目を向けると、予想通りの少年だった。

少年——テッドは息を切らしながら、ユーリが腰掛けている窓に近付くと、ある一点を指差した。

「あれ、ほら！ アクエフラスティア 水道魔導器がまた壊れちゃったよ！ さっき修理

してもらったばかりなのに」

つられるようにして視線を向ければ、下町の中心付近、恐らく広場の辺りから勢い良く水柱が上がっていた。

あれだけの水が吹き上がっていれば水浸しどころで済まないだろう。

「何だよ、厄介ごとなら騎士団に任せとけて。そのためにいんだから」

「下町のために動いちゃくれないよ。騎士団なんか！」

そんな少年の様子にも目も暮れず、ユーリはさも眠たげに欠伸を噛み殺した。

言った本人も騎士が下町のためになど動かないのは分かっていた。そう、ただ一人を除いては。

「世話好きのフレンがいんだろ？」

「もうフレンには頼みに行ったよ！でも会わせて貰えなかったの！」

フレンとはユーリの親友であり、この下町で共に育った幼なじみである。

彼は騎士団に所属する騎士であり、現在は隊長を務めているという。かく言うユーリも数年前までは騎士団に居た元騎士なのではあるが。

「はあ？　オレ、フレンの代わりか？」

ユーリは顎に手をついてため息をついた。わざわざ会いに行かなくとも真面目で心配性な友人は騒ぎを聞き付け、直ぐさま駆け付けてくるだろう。

それはそうとフレンに会わせて貰えなかったというのも変な話だ。

「いいから早く来て！ 人手が足りないんだ！」

思案しているユーリなど意に介さず、少年はユーリの服の袖を思い切り引っ張った。

引っ張られている本人もああ、これは伸びるなと思いつつも動くとはしない。

そうこうしていると、ユーリともテッドとも違う別の声がする。

「テッドお！ テッドお！ 降りてきなさい！ あんたも手伝うのよ！」

一階から聞こえた声の主は目の前の少年、テッドの母親である。いつまでも降りてこない息子に痺れを切らしたのだろう。それにしてもタイミングが悪い。

テッドはこの時ばかりは母を恨みたくなった。

「ちょ、ちょっと待ってよお……もう……ユーリの馬鹿！」

半ば消え入りそうな声で言い返すが、母が聞くはずもなく。

しかしユーリは未だ外を見つめたまま、一向に動こうとはしない。テッドはようやく諦めたのか、馬鹿、と言だけ悪態を付くと勢いよく扉を開けて飛び出して行った。

「騒ぎがあつたらすつ飛んで来るやつなのに……あの調子じゃ、魚しか住めない街になっちまうな」

視線の先には、広場の中央に立つ噴水に似た水道魔導器。水を汲み上げ供給する井戸の役割を果たすそれからは今や大量の水が吹き出し、勢いは未だ衰えることを知らない。

ユーリは視線を窓から外すと部屋の隅にあるベッドの上で寝ている存在に声を掛けた。

「起きてるか、ラピード？」

ぴん、と立った耳がぴくりと動き、閉じられていた水色の瞳が露になる。

齢五歳になろうかという犬は、準備万端だというような顔をしていた。

「なら行きますか」

ユーリは壁に立てかけてあった剣を手にとると、窓枠に足を掛け、二階から飛び降りた。

水道魔導器の前には騒ぎを聞き付け、下町の人々が集まっている。皆急拵えの土のうを周辺に積み上げているが、気休めでしかなく、未だ溢れ出る水の勢いは止まりそうもない。

「なんだ？ どでかい宝物でも沈んでんのか？」

笑いながら尋ねるユーリが茶化しているのは間違いない。

まあ、彼らしいといえばそうなのだが。

隣で作業していた男がどこか面白可笑しく答えた。この辺りは下町の特有の“ノリの良さ”だろう。

「ああ。でもユーリには分けてやんねえよ。来んの遅かったから」

「はっはっはっ。世知辛いねえ」

その間も手を休めることなく土のうを積み上げてるが、それでもユーリの足元も足首まで水に浸かっている。

勿論下町にも用水路が引かれてはいるが、濁った水がとめどなく流れており、いつあふれてもおかしくない。

「そう。世知辛い世の中なんだよ。魔導器修理を頼んだ貴族の魔導士様もいい加減な修理しかしてくんないしな」

「……ハンクスじいさん頑張ってるな」

貴族街に住むモルディオ、と名乗る魔導士に修理してもらったのはつい数十分前の出来事である。

しかし修理から数分と経たぬ内に水道魔導器から大量の水が噴き出して来たのだ。

ユーリの視線の先には率先して土のうを運ぶ老人の姿。いい年して水遊びという柄ではないだろうに。あれで腰でも痛めた日にはどうするのか。

「責任感じてんのさ。修理代、先頭立って集めてたのじいさんだから。じいさんもばあさんの形見まで手放して金を工面したつてのに」

「その結果がドカンとはね。けど魔導士が手抜き修理すんのは、じいさんの責任じゃねえよ」

男はまあな、と相槌をうつと、土のうを運んでは積み上げるといふ作業を繰り返す。

手伝わけてでもなくその様子を眺めていたユーリに老人——ハンのクスの鋭い声が飛んだ。

「これ、ユーリ！手伝わないなら近付くな。危ないぞ！」

「じいさん、魔核見なかったか？ 魔導器の真ん中で光るやつ」

この水道魔導器にはあるはずの物がなかった。

魔核コアと呼ばれるそれは魔導器の力の源ともいえるものである。

その魔核と魔核を収める筐体コンテナの二つが揃って初めて、魔導器は魔導器として機能するのだ。

「ん？ さあのう？ …… ないのか？」

「ああ。魔核がなけりゃあ、魔導器は動かないってのにな。最後に魔導器触ったの、修理に来た貴族様だよな？」

下町の人々が魔核がないことに気付かなかったのも、ある意味では仕方がない。

魔導器は貴重品でありながらも人々の生活に浸透しているが、エアルを制御する魔核やそれに刻まれた術式が専門的であることもあり、殆どの者は魔導器が何で動いているのかなど知らないのである。普段から武醒ボーディブラステイア魔導器を使っているユーリだからこそ気付いたといえるだろう。

「ああ、モルディオさんじゃよ」

「貴族街に住んでんのか？」

「そうじゃよ。ほれ、もういいからユーリもみんなを手伝わんか！」

しかしユーリはうんとは言わなかった。

魔核が戻らなければ根本的な解決にならないし、新たに水道魔導器を手に入れるなど不可能だ。

ならば自分がやるべき事は皆の手伝いではなく魔核を取り戻すこと。

居場所も分かっているなら話は早い。逃げられる前に捕まえなければ。

「……悪い、じいさん。用事思い出したんで行くわ」

言うなりユーリはハンクスの制止の声も聞かずラピードを連れて歩き出す。

ハンクスはその背中に無茶だけはするんじゃないぞと呟いた。

プロローグ（後書き）

連載開始しました！かなりの長編になる予定です。

牢屋の中からこんにちは

困っている人は助ける。それが彼女の信条だった。

お人よしだと言われることも多いが、それは彼女に取ってあたり前のことなのである。

ザーフィアスを訪れた理由、父のお使いともいえる頼み事を終えた少女――エリシアは街中を歩いていった。

後はダングレストに帰るだけなのだが、何しろ彼女にとっては初めての帝都。気にならないといったら嘘になる。

エリシアが直ぐにダングレストに帰っていれば、運命はまた違ったものになっていたかもしれない。

そんな彼女の耳に恐らくは子供の悲鳴が届いた。

振り向いた先には、十歳くらいの少年が数人の騎士に追い掛けられていたのである。

エリシアは父がギルドの首領であることも相俟って騎士にあまり良いイメージを抱いていない。

となればとる行動はただ一つ。

「ちょっと貴方たち！　こんな子供相手に何やってるの！　まったく……大人げない」

少年を庇うように騎士たちの前に立ち塞がったのである。

まさか邪魔が入るとは思っていなかった騎士たちがぼかんと間抜けな顔をしてエリシアを見つめていた。

「う、五月蠅い！　その子供は貴族街の家の窓を割ったあげく自分はやっていないと嘘をついたのだ！」

騎士の言葉に少年はふるふると頭を振って否定した。

エリシアはこれみよがしにはあ、とため息をつく。あらかた近くにいた少年を勘違いして追い回していたのだろう。

腐った騎士と子供。どちらを信じるかと問われれば自分は躊躇いなく子供と答えるだろう。

「止めて。今にも泣きそうじゃない。大丈夫、君は何も悪くないよ。さ、私と一緒に行こう」

完全に騎士たちを無視して男の子の手を取って歩き出す。

しかし彼等はエリシアと少年を取り囲み、武器を突き付けたのである。どう考えてもやり過ぎだ。

「なに？　それが騎士のすることなの？」

少女の顔には静かな怒りの色が刻まれている。

エリシアは少年を後ろに下がらせるとゆっくりと腰の二つあるホルスターの一つから陽光を弾く銀色の銃を取り出した。

何をするかと思えば、照準を石畳に合わせて……撃った。

「ノクターナルライト」

銃口に一瞬だけ浮かび上がった光の魔法陣。

次の瞬間、打ち出された光が騎士たちの足元で弾け、目も眩むような閃光が彼等の視界を灼いた。勿論当てるつもりのない威嚇射撃であり、目くらましである。

その隙にエリシアは再び男の子の手を取って駆け出した。

しかし彼等は諦めることなく追って来る。この辺りだけは感心したいものである。自

分一人なら騎士たちを撒くのは造作ないが、少年がいるためそれも難しい。大の男と少女、少年の足では遅かれ早かれ追い付かれてしまう。

最後の手段は、実行使だがそれをすれば確実に賞金首である。エリシアは仕方なく足を止めると堂々と騎士たちの前に姿を現した。

「やっと観念したか。これはれっきとした公務執行妨害だ。私たちと共に来て貰おう」

「この子の言うことを信じてくれるなら一緒に行く。でも駄目だった言うのなら……私には貴方たちを排除することなど簡単よ」

エリシアに気圧されたかのように後ろに下がる。

するりとホルスターから抜かれたバレルが銀色に煌めいた。

勿論本気ではない。賞金首などまっぴら御免だ。

「わ、分かった。分かったからその物騒な物を下ろせ！」

言葉通りに銃をホルスターに収めると、少年に逃げるように目配せする。

少年の姿が見えなくなったのを確認すると抵抗する気がないことを示すために両手を上げた。

鼻を突くかびの臭いと湿った空気、背中に当たる硬い感触にユーリは意識を取り戻した。

目に入るのは頑丈な鉄格子。あの後モルディオの屋敷に乗り込んでみればローブを目深に被ったやつが今にも屋敷を引き払おうとした直前だった。

そのモルディオをラピード追い詰めたまではよかったが、煙幕で逃げられる始末。ラピードが機転を利かせて奪った荷物の中に魔核はなかったのである。

しかもご丁寧に職務に忠実な（胸糞悪いキュモール隊のことである）警備の騎士が駆け付け、揚げ句の果てにはたこ殴りにされる始末である。

お陰で殴られたそこかしこが痛んだ。

「……で、その例の盗賊が、難攻不落の貴族の館から、すんごいお宝を盗んだわけよ」

「知ってるよ。盗賊も捕まった。盗品も戻ってきただろ」

思案に耽っていたユーリの耳に入ってきたのは、隣の独房の人物と恐らくは看守との会話。

囚人と仲良くお喋りとは看守も暇なものである。

「いやあ、そこは貴族の面子が邪魔をしてってやつでな。今、館にあんのは贋作よあ」

「馬鹿な……。ごほんつ。大人しくしている。もう直ぐ食事だ」

「そろそろじつとしてるのも疲れる頃でしょーよ、お隣りさん。目覚めてるんじゃないの？」

どこか名残惜しそうに話を切ると看守は隣の牢から離れ、ユーリがいる独房の前を通って姿を消した。

予想もしなかった隣からの声に、ユーリは寝転がっていたベッドから起き上がった。

自分が起きていることに気付いていたとは、ただのおっさんではない。

別に驚くほどのことではないのだが。

「そついう嘘、自分で考えんのか。おっさん、暇だな」

「おっさんは酷いな。おっさん、傷付くよ。それに嘘ってわけじゃないの。世界中に散らばる俺の部下たちが、必死に集めてきた情報でな……」

「はっはっ。ほんとに面白いおっさんだな」

相手も軽い調子なもので、つられてユーリも笑いながら答える。その時、かつんかつんと複数の足音が二人しかないはずの独房に反響した。音が聞こえた方は一つしかない入口兼出口から。

靴音からして一人はグリーブ。これは看守だ。もう一つはそれよりも軽い。恐らくは少し踵の高いブーツ、女か。

「大人しくここに入ってる」

がちやりと鉄格子が閉まる金属音。

鍵が落ちる音だけを残し、靴音と気配は遠ざかって行った。

新たなお隣りさんの登場に、牢の中は再び静寂に満たされる。それを唐突に破ったのは隣のおっさんの声だった。

「で、お隣さんのお隣りさん。だいじょーぶ？　ちなみに美女が可愛い女の子だとおっさん、嬉しいんだけどな」

そんな都合がいいわけがない。ユーリは半ば呆れて声も出ないが、この状況で何とも緊張感のないおっさんである。

しかし幾ら気を張ったところでここから出られる訳ではないのだが。

「この状況自体、大丈夫じゃないと思うけど」

返って来たのは牢獄によく響く若い女の声。

声だけでは何とも言えないが十代後半から二十代前後だろう。しばらく何かを噛み締めるような沈黙が続いたかと思うと、二人仲良く同時に声を上げた。

「ん？」「ん？」

「もしかしてレイヴン？」

「エリシアちゃん？」

二人の声音には僅かに驚きの色がある。

特に彼女、隣のユーリにも分かるくらい動揺が伝わって来た。酷く驚いているのかもしれない。

「何だ。つまりあんたら、知り合いつてことか？」

「まあ、そういうことになるわけよ」

「それよりも……おっさん情報通なんだろ？　ここから出る方法を教えてくれ」

ふと下町の様子が気になった。

（ハンクスじいさん頑張り過ぎていないといいのだが……。しかしじいさんの性格を考えると無茶しているだろうな）

「何だか知らないけど、十日も大人しくしてれば、出して貰えるでしょ」

十日も待つていれば、それこそ下町は水浸しでは済まない。

水道魔導器が壊れたままでも少しの間なら飲み水などの生活用水は何とかなるだろう。

だがそれにも限界がある。

脱出、青年の名は

「えっ！ 十日もこんなカビ臭い所に居なきゃいけないの私！？」

そんなの聞いてない。エリシアは思わず頭を抱えなくなった。湿気臭い独房に柔らかさのカケラもない硬いベッド。鉄格子の外に見えるのは何の愛想もない灰色一色。

十日の間、風呂どころか水さえ浴びられないなんて、年頃の少女に耐えられるはずがない。

それに十日もこんな所に入れられたらダングレストに戻るのも当然遅くなる。

「エリシアちゃんてば一体何やらかしたわけ？」

同じように捕まったレイヴンには言われたくない。

しかし聞かれたからには正直に話そうと帝都に來た理由（隣の牢の人物の前でもあるため父の素性は伏せたまま）と捕まった訳を話した。

「お人よしなこった」

「私にしては当たり前のことだけど？」

隣の牢の人物が呆れたような、だが僅かに感心したかのような声を投げかけた。声から判断するに若い男か。そうは言われてもエリシアにとっては当たり前のことである。

硬いベッドに腰掛けながら首を傾げた。エリシアとて後先考えず飛び出すわけではないのだが、追われていたのが子供だったから、なのかもしれない。

「そういう所からしてお人よし、だろ？ にしてもモルディオのやつ、どうすっかな……」

青年——ユーリの呟きに首を傾げる。

モルディオというと“あの”モルディオだろうか。変人で有名な天才魔導師リタ・モルディオ。弱冠一五歳にして魔導器、エアル研究の第一人者。そんな天才と独房の彼と何の関係があるのだろうか。

「モルディオってアスピオの？ 学術都市の天才魔導士とおたく、関係あつたの？」

「知ってるのか？」

つい口を滑らしたかのようなレイヴンの答えに、隣の彼は驚いた様子で尋ねる。半分独り言のつもりだったからだろう。

だがレイヴンは直ぐには答えず、エリシアも余計な口は挟まずに耳を澄ませておっさんの言葉を待った。

「お？ 知りたいか。知りたければそれ相応の報酬を貰わないと……」

いつものレイヴンと何ら変わらないおどけた口調である。

「学術都市アスピオの天才魔導士さまなんだろ？ ごちそうさま」

この辺りは彼の方が一枚上手だったようだ。

レイヴンが言わなくてもエリシアが答えていただろうが。エリシアはレイヴン、みつともないと思いつつ二人の会話を聞いていた。

「い、いや、違う。違うって。美食ギルドの長老の名だ。いや、待て、それはあれか……」

「レイヴン、しどろもどろになってる」

噴き出すのを堪えながら、だが耐え切れずに笑いが漏れる。

その時、独房に騎士が身につけるグリープ特有の金属音が反響した。一般の騎士のものとも少し音が違う。

エリシアが気付いた時、彼女の前を一人の男が通り過ぎた。

灰色の髪をした三十代であろう男だ。

端整な面差しに足元まで届く鮮やかな橙色の外套。ちらりと見えた腰の剣は華美な装飾はないものの、作りはしっかりしているし、シンプルだが随分と装飾も凝られている。

本来ならこんな独房に来るはずのない騎士。

エリシアは知らないが、ザーフィアスに住む者なら必ずと言っていいほど彼の名を知っている。騎士団長、アレクセイ・ディノイア。帝国騎士の頂点に立つ男である。

騎士は“彼”がいる独房を通り過ぎ、そして止まった。レイヴンがいる独房だろう。

というか今牢は三つしか使われてないため、隣の隣で止まったのならレイヴンの牢以外では有り得ない。

「出る」

「いいところだったんですがねえ」

次にエリシアとユーリの耳に聞こえたのは、鉄格子が開く独特の音。

（む、レイヴンだけ出してもらっちゃって。というか私が捕まった理由は話したのに、レイヴンが帝都の独房にいる訳を聞いて置けばよかった）

しかも明らかに高い位だと分かる騎士がお出迎えである。次に会ったら絶対に問いただしてやろうと、エリシアは心に決めた。

「早くしろ」

アレクセイに連れられ、歩いて来る隣のおっさん——もとい三代半ばほどの男がユーリの視界に入った。

浅黒い肌に無精髭を生やし、異国を思わせる変わった服を着崩している。

黙っていればそれなりに整った顔立ちなのだが、その飄々とした雰囲気と、服装も相まってどこか胡散臭さが拭えない。

「おっと」

男はユーリがいる独房の前で躓いたふりをしてしゃがみ込んだ。ユーリは近くまで駆け寄ると二人にしか聞こえないであろう小さな声で問い掛けた。

「騎士団長直々なんて、おっさん何者だよ？」

「……女神像の下」

だが男はそれに答えず、懐に入れたままだった手を出すと持っていた何かを床に滑らせた。

古びた金属の鍵。もしか独房の鍵か？

アレクセイ直々に迎えに来たことといい、全くもって得体の知れ

ないおっさんである。

「何をしている」

「はいはい。ただいま行きますって」

アレクセイの声に男はすっと立ち上がり、緩やかな足どりでユーリの前から姿を消した。

残されたユーリは、二人の気配が去ったのを確認して自分の手の中にある鍵を見て独りごちた。

「……そりゃ抜け出す方法、知りたいと言っただけだな」

彼も脱獄する気はさらさらないが、下町の様子は気になる。それに朝までに戻れば問題ないだろう。

とは言え直ぐに行動に移すわけにもいかない。抜け出すにしてもここは城の中。当然巡回の騎士も多い。

ユーリは騎士団時代を思い出し、巡回ルートや交代の時間を確認することにした。

レイヴンが居なくなったことで独房の中は一気に静かになった。

それはユーリが考え事をしているからであるが、エリシアはそんなこと知るよしもない。

つい迫り来る睡魔に身を任そうかとうつらうつらしていた時である。隣の鉄格子が開く音がしたのは。

慌てて眠気を覚まし、鉄格子に歩み寄った。

隣の独房から出て来た人物は足音を一切立てず、見事に気配を消している。

二十歳過ぎの青年だった。胸元が開いた黒い服に背中まで届く艶

やかな黒髪。顔立ちはかなり整ってはいるものの、どこか不敵さを含んでいる。

エリシアは数秒間、呆然と青年を見ていたが（見とれていた）、我に返ると思わず青年の服を掴んだ。

「ちょっと待つ……」

「静かにしろ」

口は塞がれているので当然喋れない。分かったというように何度も頷くと、やっと手を離してくれて息苦しさから解放された。

声を出しかけた自分も悪いが、少しは手加減して欲しい。危うく窒息するところである。

エリシアは何度も空気を吸い込むと今度は小声で聞いた。

「貴方、どこに行くつもりなの？ 戻って来る気はあるんだろうけど……」

「下町だよ。様子が気になるんでね。しかし何で戻って来るつもりだって分かったんだ？」

端から見ればかなり奇妙な光景であるのは間違いない。

幸い看守は眠けているらしく、二人のやり取りには気付いていなかった。何故分かったという彼にエリシアはにこりと微笑む。

「本当に逃げるつもりだったら夜まで待たないでしょう？ 例え見つけたとしても、貴方の腕なら騎士だって相手にならないもの」

この青年はかなり“使える”。

気配を完璧に絶ち、足音を完全に消すなど並の者に出来ることで

はない。本当に青年が逃げるつもりなら、彼は夜など待たずに堂々と脱獄するだろう。

短い会話の中からエリシアは彼ならそうするだろうと確信出来た。

「……参ったな。あんた、名前は？」

ユーリは困ったように、或は驚いたように頭をかいた。この少女、可愛い顔して洞察力はあるらしい、と。

エリシアは今だユーリの服から手を離さぬまま、満月色の瞳を煌めかせて答えた。

「エリシア。エリシア・クレセント。下町の様子、見に行くなら私も連れて行って」

理由が分からず首を傾げるユーリに、エリシアは全ての経緯を話した。

父から頼まれていたことを終えた後、偶然下町を訪れた時、水道魔導器から水が大量に噴き出している事態に遭遇したのだ。

下町の人々と一緒にずぶ濡れになって土のうを積み上げ、何とか水が収まったのを見届けてから下町を後にしたのもつかの間、エリシアは騎士に追われている少年を助け、ここに連れてこられたのだ。

「仕方ねえな。オレはユーリ。ユーリ・ローウェル。じゃ、行くか。エリシア……エリイで良いか？」

「え、いいけど……」

しかしどうやって出ればいいのか。ユーリがどんな方法を使っても独房の鍵を開けたか知らないが、全ての鍵は入口で寝ている看守が持っているのだろう。

すると彼は半信半疑で持っていた何か——鍵をエリシアがいる部屋の鍵穴に差し込んだ。

かちやり、と鍵が開いた音がした。

ユーリもまさか開くとは思っていなかったのだろう。まじまじと鍵を見つめ、呆れ半分に呟く。

「おいおい。どんな鍵だよこれ」

暗がりでは分からなかったが、ユーリと向かい合って彼が怪我をしていることに初めて気付いた。

唇の端は切れて血が滲んでいるし、腕には打撲の跡が紫色の痣になっている。平気そうにしているのが痛くないはずがない。

「怪我してるみたいだけど、大丈夫？」

「あ？ ああ。捕まった時にやられちゃってな」

「——聖なる活力、ここへ。ファーストエイド」

エリシアはユーリの痣が残る頬に触れると意味ある言葉——俗に魔術や治癒術を行使する時に要する詠唱——を呟いた。

触れた手を中心にして広がるほのかな光の粒子。金色の煌めきを放つ光が集束すると傷口が瞬く間に塞がり、紫に変色していた痣も生来の肌の色に戻る。

だがユーリの瞳は感謝よりも驚愕に彩られた。エリシアが治癒術を使えることには驚いたが、それ以上に彼を驚かせたのは彼女の耳に付けられた金の耳飾り。赤い宝石が嵌められたそれは間違いなく武醒魔導器だろう。

それは確かに作動していなかった。魔導器がなければ治癒術は使

えないはずなのに。

そもそも普通は魔導器が作動しているかなんて確認しない。よくよく見なければ分からないものである。ユーリは思わずエリシアの肩を掴んで引き寄せていた。

「えっ？」

エスコートは不得意？

頭が真っ白になって何も考えられない。目の前に端整なユーリの顔があった。睫毛は意外と長くて綺麗な紫掛かった黒瞳は生命力溢れる強い輝きに満ちている。

呆然とするエリシアに我に返ったのかユーリは直ぐに手を離れた。

「……悪かった。傷、サンキュな」

ユーリはばつが悪そうに頭をかくとそつぱを向いたまま礼を言う。その様子がおかしくて思わず笑ってしまった。

「うっん。ユーリって照れ屋なの？」

「はっ？ ばつ……ちげえよ！ そんな事より行くぞ」

眠りこけている看守の前を通り過ぎ、隣に位置する倉庫からユーリの剣とエリシアの銃を取り戻した。この銃も勿論、魔導器であるから本体である筐体と魔核がなければ作動しない。

だが幸い魔核は取り外されていなかった。

「それも魔導器なのか？」

「そつ。大気中のエアルを変換して光や炎とかを撃ち出せるの。武器も取り戻したことだし、行きましよ」

エリシアは銃に異常がないかもう一度調べると、腰のホルスターに収めた。二人は地下牢を抜け、巡回の騎士に見つかることなく城内を移動した。それも元騎士だというユーリのお陰だろう。

最低限の明かりのみが残された廊下は暗く、予想よりも警備は厳しかったが、ユーリやエリシアにしてみればざる警備でしかない。とは言っても堂々と城の正門から出ることは出来ないし、裏門も二人が居る場所より少し遠い上に見つかる可能性を考えると避けた方がいい。

「そーいや、エリィ、あのおっさんと知り合いだったんだよね？信用出来そうか？」

一応貰った鍵はちゃんとした（開いたという意味で）物だったが、看守に嘘八百を並び立てていたことを考えると微妙なところだ。ユーリはまだあのおっさんを信じていいのか測り兼ねていた。

「んー、多少胡散臭いかもしれないけど、嘘はつかないと思う」

ああ見えて天を射る矢の幹部である。理由は分からないが、様々な情報に通じているらしい。アルトスク

ユーリは騎士団にいた頃の記憶を探ってみると女神像は多分あっただろう。

だが詳しい場所を覚えていない。二人が階段を上がり、一階に出た時である。何者かが言い争う声が聞こえて来たのだった。

まさかこうも早く見つかるとは思いませんでした。体力には多少自信があつたが息が乱れる。やはり正式な訓練を受けた彼等を振り切るまでには至らない。少し開けた場所に出た瞬間、仕方なく少女は振り返った。

自分を追い掛けて来たのは二人。帝国騎士であることの証である鎧と兜。その手には鞘に収まったままであるが剣が握られている。一人の少女を前にするにはあまりに物騒ではないか。

二人なら自分だけでも何とかなるかもしれない。少女は向い来る騎士たちを油断なく見据えた。

「もう御戻りください」

それはまるで仕方のない子供を宥めるような口調だった。だがそう言われて素直に戻る気はない。自分がフレンに伝えなければ……。少女は頑なに首を振り続けた。

「今は戻れません！」

「これはあなたのためなのですよ」

何が自分のためだと言うのだ。外の世界すら知らぬまま箱庭の世界で生きて来た。何一つ自由にならないことがもどかしかった。あなたのため？ そんな言葉は聞き飽きた。

「例の件につきましては、我々が責任を持って小隊長に伝えておきますので」

「そう言っただけあなた方は何もして下さらなかったではありませんか！　お願いです。行かせてください。このことは直接フレンに伝えなくては……」

責任を持って伝えようと口先だけ。どうして誰も動いてくれないのか。フレンの命が危険に曝されているのに。

少女は後退しながらも懇願した。

少女からフレンという名が出た瞬間、静観していたユーリの表情が変わった。エリシアとユーリが出くわしたのは、明らかに貴族だと分かる少女を追う騎士という構図。

真っ先に飛び出そうとしたエリシアを止めたのはユーリだった。様子を見る、ということらしい。そうこうしている内に騎士たちはじりじりと少女に近付いて行く。

「怪我をしたくなければそ、それ以上、近付かないでください」

少女は服の中に隠し持っていたサーベルを引き抜いた。出来れば使いたくなかったが、この状況ではそんな事は言っていられない。

遂に騎士たちが少女を取り巻く空気が一変した。

「お止めになられた方が……お怪我をなさいますよ？」

だが少女は一步として退かなかった。サーベルを構え、騎士たちを睨みつける。

それでも剣の訓練は欠かしたことはない。騎士たちにも引けは取らないと自負している。

「剣の扱いは心得ています」

「致し方ありませんね。手荒な真似はしたくありませんでしたが……」

二人の騎士は遂に鞘から剣を抜き放った。それと同時に通路の方が騒がしくなる。

少女の目に駆けて来る騎士たちの姿が見えた。

「おい！ 居たぞ！ こっちだ」

これ以上は……もう。そう思った時だった。

衝撃波とまばゆい光が騎士たちを襲った。思わぬ方向からの攻撃に反応が遅れ、白塗りの壁に叩きつけられる。

まともに攻撃を受けた騎士はぴくりとも動かない。どうやら気絶したらようだ。

この衝撃波は武醒魔導器があって初めてなせる技である。フレンが扱う、騎士団の技。この状況で自分を助けてくれる人物がいるならば、それは一人しかない。

「フレン……！？ わたしを助けて……？」

だが振り向いた視線の先にいたのは、思い描いた金髪の騎士ではない。

胸元が開いた黒い服を纏った長い黒髪の青年と、薄紅掛かった淡い金色の髪に短いスカート姿の少女。どちらも見覚えのない人物である。

「だ、誰？」

「貴様！ 何者だ！」

それは後から来た騎士たちも同じようで、青年と少女に剣を突き付け、半ば叫ぶような形で問いただした。

しかし当の二人はまったく意に介していないようで、つまらなさそうな顔で騎士たちを見つめた。

「あえて言うなら通りすがり？」

「違いねえ」

そんな二人の会話に構わず、騎士の一人が青年に切り掛かる。

青年はごく自然にすう、と後ろに下がると、勢い余って体勢を崩した騎士の鳩尾に拳を叩き込んだ。

もう一人は同僚が瞬く間に倒されたことに動揺して後退するが、これまた少女が持つ銀色の銃から放たれた光が直撃し、のびている騎士と同じ末路を辿った。

「人の話しは」

「最後まで聞けつてな」

笑いながら言う少女と青年は息一つ乱れていない。

こつとも簡単に騎士を退けた二人に少女は驚きを隠しきれなかった。

「それにしても隣の誰かさんは、エスコートがなってない感じがしない？」

「そりゃ、手厳しいことで」

ユーリは剣を鞘に収めつつ、半ばふざけてため息まじりに言った。いつの時代の騎士団でもエスコートは教えてくれないと思ったのは内緒だ。

エリシアは傍にあった壺を手に取り、物騒にもユーリの頭上に振り上げようとしている彼女に気付き、ホルスターから銃を抜いた。

銃口から放たれた光はあやまたず壺を粉碎する。見事な装飾が施されていた高そうな壺も粉々になればごみと同じだ。

ばれれば脱獄と器物破損で最悪である。どうか請求が来ませんようにと思っ通り、エリシアらしいのかもしれない。

「はあ、間一髪ね」

「何すんだ！」

壺は文字通り粉々に砕けたのだから彼女にも怪我はない。……のだが仮にも助けて貰った相手にあれは如何なものか。

「……だって、あなた方、お城の人じゃないですよ？」

少女は小首を傾げて間の抜けたことを問うた。エリシアとユーリが城の人間に見えると言うならその人物の目はきっと硝子玉かもしれない。飾り物だろう。

ユーリはあの胸元が開いた身軽な服装だし、エリシアは白い服と動き易いようにかなり短いスカート、ロングブーツという格好である。

「そう見えないってんなら、それまた光栄だな」

「ユーリ・ローウェルとその他一名！ どこへ逃げたのであるかー！」

その時、近くから聞こえて来た間抜けな声。

ユーリを追っかけ回すのが仕事らしいアデコールとボツコスのも
のだろう。声はまだ近いとは言えないが、油断は出来ない。

「馬鹿もーん！ 声が小さい！」

「ちっ、またあいつらか。もう牢屋に戻る意味、なくなっちまった
よ」

エリシアはさあと血の気が引くような気がした。その他一名とい
うのは間違いなく自分のことだろう。

これが父にばれることがあれば、自分は叱り飛ばされるに違いな
い。いや、叱られるだけで済めば僥倖だ。想像しただけで脂汗がに
じみ出る。

「ね、ユーリ。もしかしくなくてもその他一名って私のこと……だよ
ね？」

「だろうな。これでエリイも晴れてオレの仲間入りってことだ。ま、
諦めな」

「諦めたくない！」

につ、と笑うユーリに不思議そうに小首を傾げている少女。先に
逃げたレイヴンを恨みたい。

エリシアの魂の叫びにユーリは苦笑するだけだった。

招かれざる客

「ユーリ・ローウェル？　もしかしてフレンのお友達なの？」

ユーリの名を聞いた少女は驚いたように彼を見た。

ユーリもそうだが、どうやら彼女も“フレン”とやらの知り合いらしい。見るからに貴族である彼女とユーリに共通の友人がいるのなら、それは騎士ではないのか。

先程の少女を追い掛けていた騎士たちも、責任を持って小隊長に――と言っていたので間違いはないだろう。

「ああ、そうだけど。それ、フレンに聞いたの？」

「はい」

どうやら事情を知らない自分が加わる話してもなさそうなので、エリシアはのびている騎士たちから剣を取りあげて、高そうな置物の後ろに隠しておいた。

ついでに彼等が持っていた捕縛用の縄を拝借し、身動き出来ないように二人一組、背中合わせで縛って置く。

「ふん、あいつにも城の中にそんな話する相手いたんだな」

「あの、ユーリさん！　フレンのことでお話が！」

ここで疑問が一つ。彼女は何故、騎士たちに追われていたのだろう。

彼等は本来なら少女を守る立場だろう。それとも彼女の言う話を“フレン”に伝えられては困るのか。

今までの状況だけで全てを察することは出来ないが、訳ありだということとはエリシアにも分かった。おまけに少女はかなり焦っているようだ。

「話しの腰を折るようで悪いけど、どうして騎士団に追われてるの？」

「それなんだよな。あんた一体何なんだ？」

一通りの作業を終えてエリシアは二人に歩み寄る。ユーリも不思議そうな顔をして少女を見つめていた。

だが時は二人に時間を与えてはくれない。近付いて来る複数の気配。こちらの、というよりも彼女の場所がばれている。

見つければ少女はまだしもエリシアとユーリは間違いなく牢獄に逆戻り。それだけは避けたいところだ。脱獄がばれた以上、今戻った所で最悪な事態になることは変わらない。ならば彼女についていくだけである。

「事情も聞きたいけど、のんびりしてらんないな。まずはフレンの所に案内すればいいか？」

ユーリは舌打ちすると同意を求めるように少女を見る。ここで長々話している訳にはいかない。間もなく騎士たちがやって来るだろう。

幾分か自分が置かれた状況に付いて行けていないが、彼女ははっきりと頷いた。

「あ、はい！」

「いくぞ」

走り出したユーリにエリシアと少女が続く。

先程感じた気配が段々と近くなって来る。早くこの場を離れなければならぬ。

「ユーリ、フレンって人の部屋、どこか知ってるんだよね？」

「知らなきゃわざわざそんなこと言わねえよ。ってエリイ、当然のように付いて来てるけど、いいのか？」

ユーリが話しながら隣のエリシアを見た。言わばこれはエリシアには全く関係のないことである。ならば彼女が付き合う道理もないはず。

困っている人を助けるのに理由は必要ない。自分でもお人よしだと思いつつ、エリシアはにっ、と笑ったのだった。

「今戻っても最悪な事態には変わらないし。それとも私、そんなに薄情に見える？」

どうやらフレンの部屋は二階にあるらしい。エリシアとユーリ、薄紅色の髪の少女を加えた一行は巡回の目を盗みながら階段を上り、二階を目指した。

エリシアにしてみれば城の部屋など全て同じに見えるが、元騎士のユーリと彼女は区別がつからしい。

「この辺り……だったような……」

少女は長い廊下の中央付近で立ち止まると、きよろきよると辺りを見回した。

それを見ていたユーリが呆れ口調で一言。

「……あんたの立ってるそこがフレンの部屋だろ……？」

これにはエリシアもあれ、と首を傾げそうになった。果たして大丈夫なのだろうか。

城に住む貴族であつても把握している訳ではないらしい。周囲を確認して扉をノックする。……が反応はない。

案の定、部屋はもぬけの殻だった。

フレンがどんな人物かは知らないが、部屋の状況を見る限り、ユーリとは正反対の几帳面で真面目な人物だと推測出来る。あくまで推測に過ぎないのだが。

「やけに片付いてるな……こりゃあ、フレンのやつどっかに遠出かもな」

「その可能性が高いと思う。ベッドも使われた形跡がないし、状況

を見ると数日は部屋を空けてる」

何か手がかりはないかと部屋を見回すが、目立つものはない。明かりが付いていた形跡もないし、ベッドや棚の中まできっちりと整えられている。

彼が出て行ったのは少なくとも数時間単位ではない。恐らく数日単位か。

「だろうな」

「そんな……間に合わなかった」

「んで、一体どんな悪さやらかしたんだ？」

ユーリが茶化すように笑うが、彼女が何かをしたとは考えづらい。勿論、彼も本気ではないだろう。

身なりからして貴族の少女がわざわざ一騎士に伝えなければならぬ事とは何なのか。

「そんな、ユーリじゃあるまいし」

「悪かったな」

笑いながらエリシアがユーリを横目で見る。ユーリは、あのな、お前、オレを何だと思ってるんだ。そう言い返したい衝動に駆られた。

エリシアはこほんと咳ばらいを一つ。このままだと埒があかない。追っ手やら何やらがここを嗅ぎ付ける前に事実関係をはっきりさせておかなければ。

「まあ冗談は置いておいて。つまりフレンと言う人に危険が迫っている。貴女はそれを伝えに行きたいと。そういうこと？」

「は、はい！」

どうやら詳しいことは話してくれないらしい。聞いた所で分かりはしないだろうが、彼女がそう判断したなら自分から言うべきことはない。

余計な詮索はすべきではないし、エリシアもそうだが、誰しも言いたくない事の一つや二つはある。

「お願いします。ユーリさん、エリイさん、わたしも連れて行ってください。今のわたしには、フレン以外に頼れる人がいないんです。せめて、お城の外まで……お願いします、助けください」

彼女は両手を正面で組み、祈るように二人をみつめた。そんな顔をされたら断るに断れない。もっともエリシアには最初から拒むという選択肢はないが。

助けを求める者の手を拒むな。それがエリシアのモットーであり、父の教えである。

「訳ありなのは分かったからせめて名前くらい聞かせてくんない？」

「そう言えば聞いてなかったか。あ、私はエリシア。エリシアでもエリイでも好きに呼んで」

ユーリはどつかりとフレンのベッドに腰掛け、少女に聞く。幾らなんでもリラックスし過ぎな気もするが、友人という話だから遠慮はないのだろう。

エリシアは少女の方を向き直り、自己紹介をした。名を尋ねる時

はまず自分から名乗れ。どこかのギルドの誰かの言葉だった気がする。貴族の方は知らないが、これが普通の礼儀というものだろう。少女の方はというと、妙に畏まってぺこりとお辞儀した。

「は、はい。わたしは……ひゃあっ」

“それ”は唐突に起こった。少女が言いかけたのと、扉が衝撃で吹き飛ばされたのはほぼ同時だった。

ユーリが前に出る。いつでも剣を抜けるように手は鞘に沿えたまままだ。

エリシアもホルスターから銃を抜き、油断なく扉の外を見据えた。

「オレの刃のエサになれ……」

一言で言い表すなら“異様”な男だった。体にフィットする奇抜な服装に黒に黄、赤と染め分けられた髪。

明らかに招かれざる客だと分かる男は両手に抜き身の剣を下げていた。

一見ただけで分かる。男が放つ痛いほどに冷たい殺気。隙だらけのように見えて寸分の隙のない構え。彼は間違いなく暗殺を生業とする者だ。

「オレはザギ……お前を殺す男の名。覚えておけ、死ね、フレン・シーフォ……！」

月の光に照らされ、うつすらと浮かび上がる男の顔と携えた刃。男は一番手前にいたユーリとの距離を一瞬で詰め、袈裟がに切り上げる。ユーリは首筋を狙った一撃をあわやの所で剣で弾いた。息を付く暇もなく、次々に繰り出される連撃を全て捌く。

厄介な事に一撃こそ軽いものの、スピードは早く、正確に急所を

狙って来る。打ち合うユーリと男。それはまるで美しき剣の舞이었다。

刹那の攻防を見せつけられているエリシアは手を出せずにいた。今ここで割って入ればユーリの邪魔になるからだ。加勢しようにも男とユーリの距離が近すぎて銃は使えない。術も同様である。せめて男がユーリから離れてくれれば……。

「いい感じだ」

「はあ？ 何がだよ。こっちはちつともよくねえよ。つーか相手、完璧に間違ってるぜ。仕事はもっと丁寧にやんな」

今まで表情すら浮かべていなかった男はにやり、と笑った。さながらお気に入りの玩具をみつけた子供のように。

ユーリは不敵な、余裕めいた表情で銀色の弧を描いて迫る刃を受け止める。月明かりだけが照らす室内に激しい音を立てて火花が散った。

どこをどう見れば自分とフレンを見間違えるのだろうか。

「そんな些細なことはどうでもいい！ あははっ！！ さあ、上がってキタ！ 上がってキタゼエエエエ！」

「急に変わりやがったな」

男の異変を察知したユーリは急所を狙う剣を弾き返し、後方に飛んだ。

それまで呆けていた少女が慌ててサーベルを構える。

「わたしもお手伝いします！」

「駄目！ 今貴女が行っても邪魔になるだけ。下がってて、私が…行く」

エリシアは咄嗟に飛び出そうとした少女を止めた。
彼女ではあの男の相手は荷が重い。二人の様子に気付いたユーリの声が飛んだ。

「よせ！」

その瞬間、ユーリにほんの少しだけ、隙ともいえない隙が出来た。そしてそれを見逃す男ではない。今までとは比べものにならない速さでユーリに肉薄する。

防御が…間に合わない。ユーリは負傷覚悟で迎え撃とうとする。

「くっ！」

『父さんより全然弱い！』

確かに男は強い。太刀筋も傭兵などに比べて圧倒的に早い。

だが、父に比べたら足元にも及ばないではないか。

エリシアは二人の間に割って入り、ユーリの前に立ち塞がる。

蛇のようにうねる刃を紙一重で避けるが、完全には避けきれずに髪が数本床に落ちた。

しかしエリシアはそれに構わず男に銃口を向ける。

淡く浮かび上がる白き光の魔法陣。銃口から放たれた白い光が闇を照らした。

「ノクターナルライト！」

対照的な友人

エリシアが銃から放った光は、万物の根源たるエアルを物理的な力に変えて撃ち出したもので、武醒ボーディプラスティク魔導器を介して操る、術や剣技と同じものだ。

純粋なエネルギーの奔流とも言えるそれは、出力を落としているとはいえ、直撃すれば怪我はまず免れない。先程の騎士たちと同様、受ければ壁に叩き付けられていただろう。

しかし男は両手を交差させて踏み止まる。

だがエリシアは男の姿を見る前に精神を集中させ、術を紡ぎ出していた。この程度では倒せないと踏んでいたからだ。

エリシアの周りに描かれる立体魔法陣。暗闇の中で鮮やかな緑の光を放つそれには、難解な紋様が浮き出ている。

男が体勢を立て直す隙を与えるほど彼女も甘くない。エリシアは銃を持った手を突き出した。

「——舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け！ ウィンドカッター！」

生み出された風の刃は弧を描き、男を切り裂くはずだった。

だと言うのに、真空の刃は腕を浅く切っただけで留まった。多少は出血してはいるが、それだけだ。常人なら視認してから避けられるものではない。

だが男はそれをかわした。

それでもエリシアは素早く銃を連結させると男に照準を定めた。銃口にエアルが集束し、淡い燐光を纏う。そう、全てはこの時のためのフェイク。

「雷よ、ヴォルトアロー！」

銃口から迸る雷霆。それは真っ直ぐに対象に向かう。男は避ける所か何と床を蹴り、前に出る。ちつ、と雷光が掠り、右頬を焼いた。男は勝利を確信したように勝ち誇った笑みを浮かべる。

分かつていたのは男だけではない。エリシアもまた笑っていた。同時に紫の光は今度こそ、背後から男を直撃した。

「残念。それ、追尾性だから」

「……えげつねえな」

ユーリが後ろから呟いたがエリシア無視。父との稽古に比べれば何てことない。

ただ、稽古は実戦とは違う。流石に殺しを生業とする者との命のやり取りには焦ったが。

「ひやははは！ もっともっとだあ！ さあ、続きをやるぞ！」

体から白煙を立ち上がらせながらも、男は立ち上がった。

服は焦げ、破れている所もあるが、瞳から闘志は失われていない。それどころか楽しげに笑っていた。

油断してはならない。手負いの獣は危険だ。

その時、男の背後に気配。現れたのは、暗闇の中で禍々しく光る赤い眼に、黒装束に身を包んだ男。突然の乱入にユーリとエリシアは身構えるが、二人の警戒とは裏腹に男が口を開いた。

「ザギ、引き上げだ。こっちのミスで騎士団に気付かれた」

ザギと呼ばれた男は反応すらない。

一度も後ろを見ることもなく、無造作に剣を振るった。

不意を突いた攻撃に黒衣の男は、身を反らすことでそれをかわす。

「き、貴様」

「オレの邪魔をするな！　まだ上り詰めちゃいない！」

ザギは未だ剣を構えたまま、ユーリとエリシアを見つめている。気付かれたと言うことは遠からず、城内は彼等と少女を捜す騎士たちで溢れ返るだろう。

ユーリは舌打ちしたいのを堪えて二人の会話を聞いた。

「騎士団が来る前に退くぞ。今日で楽しみを終わりにしたいのか？」

それまで微動だにしなかったザギの体がぴくりと動いた。狂気を思わせる不気味な笑みも消えている。

楽しみを終わりにしたいか、の一言が効いたらしい。

ザギはユーリとそしてエリシアを一瞥すると身を翻し、城の中に消える。黒衣の男も彼に続き、足音を起てずに駆け出した。

ザギが放つ底冷えする殺気が遠ざかっていく。それを確認するとユーリはゆっくりと息を吐き出した。見れば剣を握っていた左手はじつとりと汗をかいている。

終わったのだと意識した途端、体を脱力感が襲った。

いくらユーリが騎士団にいたとは言え、暗殺者とおぼしき人間と対峙したのは初めてである。緊張するのも当然だ。

「ここもゆつくりできねえのな。おい、エリイ、切り結んでる時に割って入るのは危ねえだろ。だけど……ありがとな」

あの時、エリシアが二人の間に割って入っていなければ怪我をし

ていたか、最悪死んでいたかもしれない。

ユーリは躊躇うことなく礼を言った。生憎そんな事で傷つく矜持など持ち合わせていない。

「ごめん。つい動いちゃって。見ていただけも何となく釈だったし」

「あの、ユーリさん、エリイさん」

恐らく、ユーリならザギという男にも遅れはとらないだろう。例えエリシアが手を出さなかったとしても。

いつの間にかサーベルを収めていた少女が、怖ず怖ずと口を開く。

「分かったよ。一先ず城の外までは一緒だ」

そうこうしている内に、早くも外が騒がしくなってきた。

裏を返せばこの期を逃すつもりはない。訓練を受けた騎士たちは想定出来ない事態に弱く（フレンは別だが）、混乱時なら出し抜くのもたやすい。

頷いた少女は自らをエステリーゼと名乗り、深々とお辞儀をした。

「はい、あの、わたし、エステリーゼっています」

「んじゃあ、エリイ、エステリーゼ、急ぐぞ」

「了解！」

「あの、申し訳ないのですが、着替えさせて頂いていいですか？
近くにわたしの部屋がありますから」

エステリーゼにつられて服装を見ると、高そうな青いドレスは邪

魔な上に目立つ。

わざわざ見つけてくださいと言っているようなものだ。それにヒールのある靴では動きづらだろう。

「いいんじゃない？ 流石にその格好で城から出れないしね」

「だな」

思わずその格好で街中に出た時を想像するが、目立つやら何やらの次元の問題ではない。明らかに浮くことは間違ない。急がなければいけないが、着替える時間はあるだろう。

二人はエステリーゼの後について行く形になる。先程の男たちのお陰で騎士たちの数は多いものの、簡単にやり過ごせた。

「それにしても呆れるくらいざる警備よね。一応、帝国の象徴たる“城”なのに」

こつも簡単に動き回れるならざる警備と言っても間違っていない。これが彼等の警戒体勢なのか。ユーリの方は慣れているのか呆れるよりも馬鹿にしているようである。

「ま、名ばかりと言っても過言じゃねえからな騎士は。内側は腐ってるんだよ。そんな奴らばっかだからフレンが苦労すんだよ」

誰よりも真面目な友人。かつて理想を抱いた青年たちは騎士団へと身を投じた。

しかし腐敗しきった騎士団に一人は去り、一人はそんな現状を変えるために上を目指した。

前者がユーリ。後者がフレンだ。

騎士を辞めたことに後悔はない。フレンは上に行って人々の未来

を守ればいい。

だが今苦しんでいる人々は誰が助けるのだ。

「ここがわたしの部屋です。では着替えて来ますね」

「ちゃんと見張ってるから安心して着替えて来て」

はい、と返事をして、エステリーゼは部屋の中に消えた。

周りに騎士たちの姿はない。油断は出来ないが、騎士たちは彼女が部屋には戻らないと判断したのだろうか。

エリシアは壁に背を預けたままユーリに尋ねる。ユーリやエステリーゼの会話から想像は出来たが、ユーリの口から直接聞きたかったのだ。

「……フレンってどんな人なの？」

「そうだな……誰よりも真面目で真っ直ぐな奴だよ。羨ましいくらいにな。オレはあいつに勝てたためしがねえんだよ。剣でも何でもいや、料理だけは別か。それでいてユーリ、大丈夫？　なんて言って手を差し出してくる」

悔しいくらいに余裕があつて真っ直ぐで。だからフレンには上に行つて、弱き者が虐げられる世界の仕組みを変えて欲しかった。ユーリはとても柄ではない。

苦い顔をするユーリを見てエリシアの口から思わず笑い声が漏れた。

「でもユーリはそのフレンって人、好きなんだね」

「まあな。でなきゃずっとつるんでねえよ」

「お待たせしました」

扉が開き、エステリーゼが現れる。

着替えたエステリーゼはドレス姿の時とは全く印象が違った。今も品は良さそうに見えるが、少なくともお嬢様が着る服ではない。後ろで纏めていた髪も下ろしているだけで随分イメージが違う。

白を基調としたジャケットは肩が膨らんだ作りになっており、アウセントに黄色のラインが引かれている。彼女の髪と同じ薄紅色のスカートは、見る者に花の蕾を思わせた。

「どう、ですか？」

「……似合わねえな」

「……ユーリ。大丈夫、ドレスよりずっと似合ってるから」

失礼なことを口走るユーリを半眼で睨み、エステリーゼに視線を向ける。

似合っている、は嘘ではない。エリシアの心からの言葉だ。まだ会って間もないが、こちらの方がずっと彼女らしいと思った。

エステリーゼにもそんなエリシアの心が届いたのか、ぱあっと顔を輝かせた。

「エステリーゼ、エステリーゼ……ちょっと呼びづらくない？」

「そうでしょうか？」

小首を傾げるのは栗鼠のようで非常にかわいらしいのだが、箱入り娘というのは、いや貴族の少女は皆、“こう”なのか。

それとも彼女が特別なのか、エリシアはいまいち『貴族の娘』と
いうのが掴みきれていなかった。

「じゃ、エステルってのはどうだ？」

「うん。良いと思う。エステル？」

「……エステル、エステル」

エステリーゼにすれば不思議な気持ちだった。彼女の周りの人々
は皆、例外なく自分をエステリーゼ様、と呼んでいた。

誰も呼びづらい等と言ったことはない。考えればそれは当たり前
であるが、エステリーゼ——エステルにしてみれば嬉しかった。

自分を愛称で呼んでくれる人なんていなかったから。あのフレン
でさえも自分をエステリーゼ様、と呼んだから。

「エステル？ 急ごう」

自分を気遣う声にエステルはふと我に返る。こうやって思案に耽
るのは悪い癖だ。

慌てて顔を上げると、自分を待っているエリシアとどこか斜めに
構えたユーリが目に入る。

「ぐずぐずしてるとおいてくぞ」

どこか呆れ混じりの声には僅かの優しさが含まれていた。エステ
ルの表情が徐々に笑みへと変わる。

生まれてからずっと箱庭の世界で生きて来た少女は、城では決し
て手に入らぬ何かを噛み締めるように頷き、駆け出した。

「はいっ！」

至宝抱く女神像

「女神像、ですか？」

その肝心の場所をエリシアは勿論、ユーリも知らない。彼の場合は忘れていたのだが、はい脱出出来ずに牢屋に逆戻りだけは避けたい。

城に住んでいるエステルならもしやと思い、聞いてみたのだが。エステルは少し考え込むような表情を見せ、やがて思い出したように顔を上げた。

「はい。確かにありますが、それが何か？」

「多分だけど、女神像まで行けば城から出られると思う。案内してくれる？」

そう言った直後、鏡のように磨かれた廊下に反響する複数の足音。誰か来る。

いざとなればエステルの部屋に隠れる手があるが、あまりよろしくない。第一、誰かが来た場合、二階、それも密室では逃げ場がないからだ。

そして二人とも、先ほどのザギとの戦闘で思った以上に疲れていた。

「エステル、取りあえず案内してくれ。時間はあまりねえみたいだからな」

「分かりました」

エステルに続いて、北側にある階段をあくまで静かに駆け降りる。周囲の警戒も忘れない。階段で見つかればそれこそ逃げ場はないし、隠れる場所もあるはずがない。

廊下の突き当たり、エステルが騎士に追い詰められていた所と同じような作りの開けた場所。ほのかな明かりが照らす中央に女神像はあった。

恐らくは名匠の手によるものだろう。背にはまるで本物であるかのように精緻な翼が広がり、織手と呼ぶに相応しい手には帝国の至宝、デインノモス宙の戒典が握られている。

こんな事態でなければゆっくり眺めていたのだが、そんな訳にもいかない。

「それにしても、どこに抜け出す手掛かりあるんだよ」

あのおっさん信じなければ良かっただろうか。ため息を付きかけたユーリを余所にエリシアは、女神像が置かれている床にしゃがみ込んだ。

直接手で触れてみるとやはり、僅かに引きずったような跡がある。

「おい、エリイ、何してんだ。見えるぞ」

何が、とは言えない。ちなみにエステルは全然分かってないようで、ただきょんとしている。エリシアはユーリに見えるように、平然とスカートの裾を掴んで持ち上げてみた。

「これ？ 下履いてるから別に見えてもいいけど？」

白のミニスカートの下には動き易いように黒のスパッツを履いてある。

するとユーリが何だか凄く微妙な顔をした。まるで期待外れだった、とても言いたいのだろうか。

「……色気ねえな」

「悪かったわね！ それよりもここ、動かすから手伝って」

一度ユーリには女心というものを説かなければならないと思いつつ、女神像を指差す。

二人で女神像を退かすと、下から現れたもの。それは階段だった。まずユーリ、エステル、エリシアの順で降りていく。

鼻を突くかび臭さと湿った空気。石造りの通路には鼠に似た魔物が徘徊していた。

正直な話、エリシアとユーリがいた独房と変わらない。

女神像の下に隠されていたのは整備されてはいるものの、かび臭さが拭えない地下通路。女神像の下に隠されていたことを考えると、皇族のための隠し通路なのかもしれない。

「本当に隠し通路なんてあったんですね」

エステルは目を輝かせて言うが、本当に貴族というのは分からない。

こんな水っぽくてかび臭い通路の何処が良いのだろう。それはユーリも同じようで、エステルを見た後、エリシアに向けて小さく首を竦めた。

「エステル、油断は禁物だから」

銃を構えたエリシアに、慌ててエステルは後ろを向く。すると鼠

より二回りは大きい鼠の魔物が倒れていた。しかもぷすぷすと白煙を上げて、である。

肉の焦げる（生焼き）臭いが辺りに漂う。

エリシアやユーリはともかく、エステルは少し気分が悪くなったが、我慢して引き攣った笑顔を浮かべた。

だが魔物は一匹だけではない。

「すみませんエリイ、ありがとうございます」

「にしても魔物、多いつつの！ 蒼破刃！」

ユーリの剣から放たれた青い衝撃破が、纏めて魔物を吹き飛ばす。エリシアも後ろから銃と魔術を巧に操って、ユーリを援護する。エステルも二人に負けじとサーベルを振り上げた。

「いきます！ スターストローク！」

「これであらかた片付いたか」

エステルがサーベルを振り上げると、ユーリの蒼破刃とよく似た、だが少し違う地を這う白い衝撃破が生まれた。それは真っ直ぐに魔物に直撃する。

ユーリは剣を鞘に戻して周囲を確認した。もう気配は感じない。その時、先を歩いていたエリシアが何か見つけたようであつ、と声を上げた。

「どうした？」

「出口よ」

エリシアが見上げる先には、地上へと続く一本の梯子が伸びていた。

視界を妬く光にユーリは思わず目を閉じる。

梯子を上った先は閑静な住宅街。皮肉にもユーリが突き止めたモルディオの屋敷前だった。

ユーリはエステルとしんがりのエリシアに手を貸して引き上げる。

「うわ、まぶしっ……」

「あゝあ、もう朝かよ。一晚無駄にしたな」

結局朝までに戻るつもりであっても、間に合わなかったというところか。そんな解釈の仕方は割と楽観的なものかもしれない。

エリシアは自分が酷く空腹であることに気付いた。昨日の夜、独房で出された夕食にも殆ど手を付けていないし、魔物やあのザギとか言う男との戦闘で体を動かしたせいもある。

そしてエステルと言えば、忙しく辺りを見回していた。別段、変わったものがあるわけでも無いのだが、彼女の瞳には好奇の色が見える。

「そんなにキョロキョロしてどうしたの？」

「窓から見るのと全然違って見えます」

それは当然だろう。

しかしエリシアが気になるのはエステルの物言い。これではまるで城から出たことがないみたいではないか。

「そりゃ大袈裟だな。城の外に来るのが初めてみたいに聞こえるぞ」

「……そ、それは……」

「ま、お城に住むお嬢様ともなれば好き勝手に出歩けないか」

ユーリの声に我に返ったエステルは言い訳しようとして、だが何も思い付かずに視線を宙に泳がせた。

確かにユーリの言う通りだが、エステルが思わず呟いた一言はそういう意味ではなかった気がする。ユーリもそれを分かっている、わざと助け船を出したのかもしれない。

「は、はい、そうなんです」

嘘であることがバレバレである。

どもっているし、何より視線が宙に浮いたままだ。城から一步も出たことがないとは、あながち間違っていないかもしれない。

「ま、とりあえず脱出成功ってことで」

「お疲れ様っ」

エリシアはユーリが出した手に、自分の右手を勢い良く合わせる。きちんと小気味良い音が響いた。所謂ハイタッチ、である。

二人を見たエステルはまたしてもきょとした表情で尋ねた。

「それ、何ですか？」

予想もしなかったエステルのあまりのお嬢様ぶりに、エリシアとユーリは苦笑いを隠しきれなかった。

フレンの行き先

「ハイツッチだけど？」

「ハイツッチ……ですか？」

「で、エステルはこれからどうすんの？」

首を傾げる彼女は、まるでハイツッチという言葉の意味を理解してないようである。エステルだけというより他の貴族も知らないのだろうか。

これからどうするのか、それはエリシアも気になっていた所だ。既にフレンは部屋にいなかったし、部屋が片付いていたことから、暫く城に戻るつもりはないのだろう。そうならば行き先は当然、境界の外である。

エリシアが窺うようにエステルを見ると、彼女は躊躇うこと無く口を開いた。

「フレンを追います」

部屋を抜け出して（しかもサーベルを持ってまで）行動を起こしたり、思い切りの良さが彼女のいいところなのかもしれない。

エリシアはエステルに付き合うのもいいかと考え始めていた。別段目的がある旅でもないし、純粋に彼女が気に入ったからだ。

それに、彼女一人でフレンを追うのは流石に無茶すぎる。

「フレンって人の行き先、知ってるの？」

「先日、騎士の巡礼に出ると話していましたから……」

「あゝ、あれか。帝国の街を回って、善行を積んでこいつてやつ」

エリシアはさっぱりだが、ユーリは知っているらしい。ユーリも訓練生時代に聞かされたことがある。結局その前に辞めたが、規則やら何やらに厳しい友人は律儀にも街を回るらしい。

最初に目指す街は決まっていたと思うが、何分真面目に聞いていなかったことと、数年も前の話だ。ユーリは一々覚えていない。

「はい。だから花の街ハルルを目指します。騎士の巡礼では最初にハルルに行くのが慣わしですから」

「となると、結界の外か」

ユーリは青く澄んだ空を見上げる。見えるのは人々の暮らしを守る輝く光輪。結界魔導器の恩恵を受けぬ外の世界には狂暴な魔物が徘徊している。

結界の中は安全だがそれ故に自由もなく、全てが管理されている。それは正に箱庭の世界と言えるだろう。

一步街から出れば結界魔導器の守護はなく、自分の身は自分で守るしかない。夜も安心して眠れず、気が休まることもない。正に弱肉強食の世界。魔物に襲われ、命を落とす者も少なくないのだ。箱庭の世界を出るにはそれ相応のリスクがつきまとう。

「二人は結界の外を旅したことがあります？」

「私はまあ、ザーフィアスの人間じゃないし。つい一日ほど前に来たところ」

エリシアも昨日の朝はまさか、一日の内に騎士に捕まり、揚げ句

の果てには脱獄するなど夢にも思わなかった。次にレイヴンを見つけたら、絶対に問い詰めてやると心に誓ったエリシアである。

もともと野暮用で訪れただけであり、用が済めばすぐにでも故郷の街、ダングレストに帰るところだった。

「少しの間だけならな。興味はあるけど、下町を留守にするわけにはいかないしね。オレも下町に戻るから、それまで一緒だな」

「ありがとうございます」

頭を掻くユーリに、律儀にお辞儀をするエステル。エリシアを含めた三人は連れだつて歩き出す。少し不謹慎だと思うがエステルのは、雲一つない青空のように晴れやかだった。

一行は貴族街を抜け、一番下層にある下町まで下りて来た。途中でルブランとアデコール、ボッコスが性懲りもなく追い掛けて来たが、あの二人はユーリが投げたつぶてを受けて仲良く気絶したという訳である。

そんな三人をハンクスが出迎えた。あれほど水が吹き出していた水道魔導器も今は出る水が無くなったのか、すっかり地面も渴いている。

「おお、ユーリ！ どこに行つとつたんじゃ！」

「ちよいとお城に招待受けて優雅なひと時を満喫してた」

とユーリは冗談めかして言うが、少なくともそんな訳ではないことはハンクスにも分かる。

今までユーリ以外を注視していなかった老人は、視線をエリシアとエステルに向けた。

「何を呑気な……おお、あんたは昨日手伝ってくれたお嬢さんじゃないか。ユーリ、お前さんの知り合いか？ そっちの娘さんは見たことないがのう」

「ま、そんなとこだ」

話を向けられたエステルはハンクスの前まで歩いて来るとぺこりとお辞儀した。エステルの身なりもあり、これではされた方が畏まってしまう。

案の定、ハンクスはしばらくの間、目を瞬かせていた。

「こんにちは、エステリーゼと申します」

「いや、こりゃご丁寧に……それよりも騎士団じゃよ。下町の惨状には目もくれずお前さんと誰かを探しておったぞ。やはり騎士団と揉めたんじゃない」

エリシアは申し訳なさ過ぎて愛想笑いを浮かべるしかない。揉めたというか、結局は脱獄するはめになったとは口が裂けてもいえない。

元はと言えばエステルが原因だが、今それを持ち出したってどうにかなる話でもない。

脱獄もそうだが、大方エステルが自分たちと共にいることを、気絶させた騎士たちが話したであろうせいもある。

ハンクスが言ったユーリと誰かの誰かは間違いなく自分だろう。エリシアは思わず頭を抱えなくなった。これは何が何でも捕まる訳には行かない。ここまで来ればもう半ばやけくそ、もしくは意地だ。

「ま、そんなとこだ。ラピードは戻ってるか？」

「ああ、何か袋をくわえておったようじゃが……」

ユーリは辺りを見回して、何かを探しているらしい。二人の会話から推測するにラピードとは名前らしいが、くわえていた、ということは人間ではないのだろうか。

エリシアは黙ってユーリとハンクスの会話に耳を傾けた。

「後で取りに行って振ってみな。いい音すんぜ。モルディオも楽しんだ。ま、逃げちまったけどな。家も空き家だったし、貴族って肩書きも怪しいな」

「……という事はやはりわしらは騙されて……」

妻の形見の品まで売り払ったハンクスには言いづらいが、それが事実だ。

水道魔導器も魔核がなければ動かない。ある程度の貯水はしているだろうが、それも長くは続かない。ならばユーリがすべきことは一つ。

「騎士団は何もしてくれねえし、やっぱ泥棒本人から魔核取り戻すしかねえな。心配すんなよ。ちよっくら行って直ぐに戻ってくつから」

頼みのフレンもいないのでは騎士団が下町のために動いてくれるはずがない。新しい魔核を手に入れる余裕がなければ、モルディオ本人から取り戻すしかない。アスピオに行けば何らかの手掛かりは見つかるはずだ。

エリシアとエステルは驚き、彼らの会話を聞いているしかない。

「はん。誰が心配なんぞするか。ちょうどいい機会じゃ。しばらく帰ってこんでいい」

ユーリとハンクスの会話を聞いてエリシアはユーリが下町の人々に愛されているのだと実感した。それはエステルも同じようで、微笑を浮かべて二人のやり取りを見守っていた。

と、その時である。

「ユーリ・ローウェル！ お縄だ、神妙にお縄につけ〜！」

シュヴァーン隊、小隊長ルブランの声が聞こえたのは。アデコールとボツコスの声が聞こえないのは、気絶した二人を置いて来たからに違いない。

ユーリが盛大にため息をつき、エリシアはどこかげっそりした様子でルブランの姿を見た。皮肉を言う辺り、まだ元気なのかもしれないが。

「仕事熱心ね。私にとっては迷惑なだけだけど……正に騎士の鑑よね」

「それ後の二人にも聞かせてやれよ。ま、こういう事情もあるから、しばらく留守にするわ」

本当に適当に諦めてくれればこちらも楽だというのに。馬鹿にされたままでは気が済まないと言うのか。

ユーリとエリシア自身は丁重にお断りしたい限りだ。

「やれやれ、いつもいつも騒がしいやつだな。これで金の件に関しては、貸し借りなしじゃぞ」

「年甲斐もなくはしゃいで、ぼっくりいくなよ？」

「はんっ、お前さんこそ、野垂れ死ぬんじゃないぞ」

二人のやり取りを聞いていると、思わず笑ってしまう。

ユーリはハンクスに片手を上げて答えると、外に向けて走り出した。

その間にも下町の人々が屈伸をしたり、腕を伸ばしたりと準備体操を始める。彼らの瞳は輝いており、まるで玩具を見つけた子供のようにだ。

「ユーリ、早いってば！ それじゃあハンクスさん、私たちも行きますね」

「あ、待って下さい！」

エリシアはハンクスの方に向き直ると小さくお辞儀する。エステルも同じように、彼女は深々と頭を下げた。

二人の少女に頭を下げられ恐縮しつつも、これからの彼女らの苦勞を考え、苦笑した。

「あやつの面倒を見るのは苦勞も多いじやろうが、お嬢さんらも氣をつけてな」

「ユーリならしっかりしてますから大丈夫ですよ。はい、ありがとうございます」

エリシアにしてみれば、どちらかと言うとエステルの方が心配なのだが。そんな所で、追い掛けて来たルブランの姿がはつきりと見

え、礼を言つと慌ててユーリを追う。

それを待っていましたと言わんばかりに、下町の人々がまるで砂糖に群がる蟻の如く、ルブランに集まって行く。

「これじゃあ実力行使出来ない分、下手に手に負えないわね」

「ばかも〜ん！ 通れんではないか！ 公務の妨害をするでなくいい！」

声を高々に叫んでいる、が下町の人々には通じない。

老人がルブランを見て拝み倒したり、子供がわーい、騎士様だあとはしゃいでいる辺り彼等もノリノリらしい。ようやく人垣を抜けたルブランはまだ近寄って来る人々を押し退け走って来る。

「げっ」

と思った刹那、どこからか現れた犬が華麗に足払いを掛ける。足元に注意していなかった中年騎士は派手に転んだ。

足払いを掛けた当人はユーリの前で誇らしげに胸を反らせた。ルブラン自身は何が起こったか分かっていないようで尻餅を付いたまま、ぽかんと間抜けな表情を浮かべている。

「な、なにことだ！」

「ラピード……狙ってたろ。おいしいやつだな」

彼がユーリの言っていたラピードで、相棒なのだろう。

狙ってたろ、と笑うユーリに応えるようにラピードも一鳴きした。

「どこまで一緒が分かんねえけどま、よろしくな、エリイ、エステル」

「あ、はい。こちらこそよろしく願います、ユーリ、エリイ！」

「こちらこそ。取りあえずの目的地は北のデイドン砦かな」

「しばらく留守にするぜ」

「行つてきます」

これまでは一人旅だったからエリシアは、エステルとはまた違う意味でこれからの旅に心躍らせていた。

ユーリとエステルは今一度名残惜しむように、ひと時の別れを告げるようにザーフィアスの町並みを見つめた。エリシアが初めてダングレストを旅立った時も二人のような心境だったのかもしれない。

「じゃ、行きましょ」

三人の前に行儀よく座っていた犬ことラピードが元気よくわん、と吠えた。

一人はまだ見ぬ世界に心躍らせながら、また一人は直ぐに戻るお使い感覚で、一人は一時の三人旅を楽しむようにザーフィアスを旅立った。

その先に待ち受ける運命を今の三人はまだ知らない。

デイドン砦

帝都を出た三人の前には、雲一つない鮮やかな青空が広がり、なだらかな平原は緩やかな曲線を描いている。

城の中では決して見ることの出来ない景色にエステルは緑の瞳を輝かせた。

城での日々は少しの自由もない窮屈な生活だった。エステルの立場を考えればそれは仕方のないことだろう。それでも読書の時間だけは別だった。本を読んでいる僅かな時だけ『』という立場から解放されたから。

「淒く空が青いですね。私、外の世界に憧れていたんです。いつも本の中でしか旅が出来なかったから」

「旅は今まで見えて無かったものが見えてくるから私は好き。……貴族も色々大変なのね」

エリシアは騎士と同じく、貴族には良い印象を抱いていなかったが、彼等には彼等の苦勞があるのだろう。こうしてエステルと出会わなければそんな事、思いもしなかった。

久しぶりの“外”にエリシアは猫のように目を細め、うんと背伸びをした。

「えっ、そ、そんなことないですよ？」

「何で最後疑問形なんだよ」

ユーリから鋭いツツコミが入る。このエステルという少女は会話していて微妙に変なところがある。それは今のような疑問形な話し

方であつたり、とんちんかな言動であつたりとだ。
とその時、今まで大人しくしていたラピードが牙を剥き、唸り声を上げた。

「じゃ、ちゃっちゃっとな片付けちゃいましょ」

エリシアは銃を抜き、ユーリが鞘から剣を抜く。エステルはやや緊張しながらサーベルを構えた。ラピードも背負っていた鞘から小振りの太刀を抜き、臨戦体勢に入る。

現れたのは栗鼠を大きくしたような魔物。目がくりくりして見て目は可愛いが、魔物は魔物。侮ってはならない。
結界魔導器の加護が及ばぬ外の世界にはこういった魔物が徘徊しているのだ。

「よつと」

ユーリは器用に剣をジャグリングさせて切り付ける。
左腕に付けている武醒魔導器が淡く輝いた。

「蒼破刃！」

剣から放たれた青い衝撃破が魔物の体を穿つ。
ラピードもユーリに負けてはいない。素早い動きで敵を翻弄し、鋭い体当たりをお見舞いした。

「ノクターナルライト！」

「これで終わりです！ スターストローク！」

エリシアの銃から生み出された白い光と、エステルが振り上げた

サーベルから放たれた衝撃破が一つとなり、残った魔物を薙ぎ払った。

エリシアがエステルに向けて手を上げると、彼女は人差し指でちよんとエリシアの手の平に触った。

「あははは……」

「前途多難、だな」

またもやエリシアとユーリが呆れを通り越して苦笑したのは言うまでもない。

ラピードですらこりや駄目だと前足で頭を掻く。当のエステルは何か間違いましたかと思議そうに二人を見つめていた。

「――舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け。ウィンド・カッター」

掲げた右手から生み出された一陣の風が立ち塞がる魔物を切り裂いた。

瞬間、エリシアは身を翻し、銃の引き金を引く。白銀の銃口から打ち出された光が、今正に牙剥かんとしていた魔物の体を焼いた。

「だあっー！ うざい！」

戦闘ももう何度目になるだろう。数えるのも面倒になって来た。エリシアは半ばやけくそ気味で銃を乱射しながら悪態を付く。

「そうばやくなって。これ終わったら休憩にしようぜ。三散華！」

振り上げたユーリの拳が魔物の顔面を強打する。襲い掛かってくる魔物を退けた三人と一匹は見渡しが利く所に座り、ようやく一息ついた。

ぐう、とエステルのお腹が控えに自己主張する。

ザーフィアスを出てから戦闘の連続ではそれも仕方ない。それが自分のお腹の音だと気付いたエステルは俯き、顔を真っ赤にして謝った。

「す、すみません」

「はい、ユーリ。私もお腹空いた」

エリシアも一人で世界を旅する以上、グミや携帯食料、保存が利く缶詰めに水は持参している。

だが全て一人分だし、何より携帯食料は美味しくない。

「あのなあ。オレに言っただって飯は出て来ないっての……おっ」

荷物を整理していたユーリが声を上げた。

帝都を出る時に皆から渡されたものだが、地図にグミなど旅に必要な物が一式揃っている。用意周到さにユーリは思わず舌を巻いた。それに加え、食べ物らしき物まで入っている。試しに容器を開けて見ると綺麗にサンドイッチが並べられていた。卵やハムにキュウリが挟んだものなどゆうに四人分はあるだろう。

「美味しそう」

「わんっ！」

「じゃ、頂くか」

元氣よく声を上げる辺り、ラピードもお腹が空いていたのかもしれない。幸い玉葱は入っていないようで、これなら彼も食べられるだろう。

腹が減っては戦は出来ぬとよく言ったものだ。慣れない旅では体力も気力も消耗する。

貴族のエステルも居ることであるし、適当に休憩しつつ進むのが一番だろう。

三人と一匹は、作ってくれたであろう人にお礼を言ってサンドイッチを頂いたのだった。

三人がデイドン砦に着いたのは、太陽が真上に近くなる昼前のことだった。石造りの重厚な砦は、外敵を阻むかのように鎮座している。

この砦は行商人たちが行き交う交易地でもあり、魔物の侵入を阻むための拠点でもある。

だがそれにしては帝国騎士たちの姿が多いのは、気のせいではない。

「ユーリとエリィを追って来た騎士でしょうか？」

「少なくとも先回りしてたつてことはないと思う。帝都から来る旅人を見てる訳でもなさそうだし」

騎士たちがエリシアたちの方を見る様子はない。

しかし比較的のどかな砦に似合わないこの物々しい雰囲気は一体何なのだろう。騎士は皆、武器を手に今にも戦いに赴けるのではないのかという格好である。

「ま、あんま目立たないようにな」

「はい。わたしも早くフレンに追いつきたいですから」

言いつつ物珍しさからかエステルの視線は騎士団の詰め所やら、砦の見張り台やらに向けられている。砦の周りを見回してから分かったのだが、騎士だけでなく、行商人や旅人の姿も多い。

「エステル、ちょっくら情報収集してくるわ。行くぞ、エリィ」

「え、ちよつ、ユーリ！」

行商人の集団に夢中になっているエステルを尻目にユーリはラピードだけを残し、ひよいと猫のようにエリシアの首根っこを掴んで引きずって行った。

一人残されたエステルがラピードと顔を見合わせぽつりと一言。

「ユーリ？ エリイ？ ラピード、二人はどこに行ったんでしょうか？」

「何かあったのかな？ 私が来た時はこんな事なかったんだけど…」

「いつちよ聞いてみるか？」

エリシアが砦を抜けた時は騎士の数も多くなかったし、物々しい雰囲気だったということもない。北門前で佇む旅人たちの顔はどこか不安そうだった。行商人の一人に尋ねてみれば、思いも寄らぬ答えが返って来る。

「何でも砦の向こうに魔物が出たらしい。お陰で足止めを食ってるんだ」

非常によろしくない状況である。エリシアたちとて、ここで足止めを食う訳には行かない。

追っ手は勿論、フレンがハルルに向かったのは数日前。下手をすれば居ないハルルに可能性もある。

刹那、見張り台に設置されている鐘がけたたましい音を響かせた。
「早く入りなさい！ 門が閉まるわ！」

頭上にある見張り台から女性の声が響く。
遠くに見えるのは、巻き上げられる砂塵。門を指して必死に旅人や行商人たちが走り込む。

「……よし、待避は完了した！ 門を閉めろお！」

同じく見張り台に立つ騎士が叫ぶが、明らかに外に残された人々がいる。今門を閉めれば逃げ遅れた人々は、確実に間に合わない。それに気づき、隣の見張り台から鋭い声が飛んだ。

「閉門を待ちなさい！ まだ残された人が……」

騒ぎを聞き付けてか、門の前には多くの人々が集まっていた。エステルとラピードの姿もある。

魔物大群により砂埃が舞い上がる光景を呆然と見つめ、エステルはぽつりと呟いた。

「あれ、全部、魔物なの……」

エリシアもまたエステルとは違う意味で驚いていた。本来ならこれほどまでに魔物が出没する季節ではない。

事実、エリシアがここを通り抜けた数日前は、別段魔物の数が多いという訳でもなかった。

一方のユーリはというと多少驚いてはいたようだが、それよりも

彼は自嘲めいた笑みを浮かべていた。

「帝都を出て早々にとんでもないもんにあつたな。オレ、なんか憑いてんのか？」

何だか本当にそんな気がしてきた。独房にぶち込まれかと思えば、エリシアと共に脱出することになり、何の因果か親友を知る貴族の少女を助けることになるわ目まぐるしい一日である。

逃げ遅れた人を残し、無情にも門が閉められようとしていた。ユーリが地面を蹴り、ラピードと共に走り出す。

ラピードの鞭のような尾が門を閉めようとしていた騎士の体を打った。

「な、なんだ、おまえ！ うわっ、うわっ！ 止める！」

「エリイとエステルはそこで待……って、おいっ！」

思わぬ乱入者に騎士は腰が抜け、思わず座り込む。ラピードの陰で門は半分が閉まった辺りで止まった。

ユーリが二人を振り返ったその時だ。エリシアとエステルがユーリを追い越した。

そもそもユーリは自分がそう言われて、はいそうですかと待っていると思っているのだろうか。魔物の大群を前にしても不思議と恐怖は感じない。

迷いはなかった。いや、迷うという選択肢自体、エリシアの中には初めから存在しなかった。

どちらも変わらず

「ユーリは女の子を、エステルはあの男の人をお願い！」

「はいはい……」

後ろからユーリの呆れたような声が返ってくる。それでもユーリだけを危険な目に合わせる訳にはいかない。自分だけ安全な所にいるなんて真っ平御免だ。

エリシアとエステルは急ぎ、男性と少女の母親らしき女性に近寄った。女性は怪我はないものの、腰が抜けたようで地面に座り込んでいる。

「立てますか？」

「ご、ごめんなさい。腰が抜けて……」

エリシアは女性に肩を貸して立ち上がり、早足で歩き出した。エステルは足を押さえてうずくまる前に膝をつき、怪我の状態を見る。出血はしているようだが、そこまで深刻な傷ではないことに一先ず息をつく。

「た、助けて……立てなくて……ひっ！ 魔物が、魔物が！」

「大丈夫ですよ」

取り乱す男性を落ち着かせるように声を掛け、術式を展開する。両手を前で組んだエステルの足元に現れる魔法陣。治癒魔術特有の金色の紋様が一際強く輝いたかと思うと傷は跡形もなく綺麗に房

がつていた。

ユーリもまた泣きじゃくる女の子を抱えて走る。

「……あ、た、立てる」

「早く避難してください」

エステルも走り出した男性に続いて、門の中に走り込んだ。見れば猪に似た魔物がシルエットが分かるくらい直ぐそこまで迫っている。

とその時、ユーリが助け出した少女が門の外を指差して叫んだ。

「お人形、ママのお人形！」

少女が指を差した先には確かに、人形が落ちている。本来なら取りに行くなんて自殺行為だ。それは分かっている。

エリシアは反射的にエステルが飛び出そうとするのを止め、地面を蹴って走り出そうとする。

だが誰かに強引に手を掴まれそれも叶わない。

「お願い、行かせて！」

「ここで待つてろ！」

ユーリは掴んでいたエリシアの手を離し、またも外へと疾走する。背後から聞こえる声を無視して。ユーリが行かなければエリシアが行っていただろう。

もう一刻の猶予もない。急ぎ、ぽつんと落ちている人形を拾い上げた。

「まったく、めちゃくちゃ目立ってんじゃないか！」

しかしぼやいている暇はない。既に門は閉まり掛けている。背には魔物の大群、前は閉門間近の大門。ユーリが助かる術はただ一つ。

「ユーリ！」

二人の声を受け、一人がどうにか入れるかという隙間にユーリは滑り込んだ。と同時に大きな地響きを立てて門が閉じられた。

砦の中にまで魔物が門に体当たりする音が響いて来る。頑丈に作られているため破壊される恐れはないが、それでも本能的な恐怖を呼び起こされる気がしてならない。

安心して一息ついた三人の元に助けた男性と母子が歩み寄った。

「娘共々助けて頂いて、なんとお礼を言えいいか」

「でも本当に無事で良かったです」

母親は娘と手を繋いだまま頭を下げる。エステルも慌てて同じように頭を下げた。

エリシアはしゃがみ込むと、優しい手つきで人形を大事そうに抱えている女の子の頭を撫でる。

女の子は気持ち良さそうに目を閉じると次の瞬間、花が咲くような笑みをエリシアに向けた。つられてエリシアも女の子に笑い掛ける。

笑顔が見たいから。ただそれだけでお節介だと思いつつも困っている人を助けてしまうのだと思う。

「怪我まで治してもらって、本当に助かりました」

男性もまた頭を下げる。魔物との戦闘で分かったことだが、エリシアと同じくエステルも治癒術を扱うことが出来るらしい。

エステルはただ守られているだけのお嬢様ではない。剣の腕も騎士に引けは取らないし、治癒術も扱える。実力は言うまでもなく十分だった。

三人が去った後、気が抜けたのか、エステルはぺたりと地面に座り込んだ。今になって恐怖を感じたのか握った手は小刻みに震えている。

「……みんなが無事で本当によかった。あ、あれ……」

「安心したとたんそれかよ」

ユーリとエリシアもエステルの隣に腰を下ろした。

無理もない。彼女は箱入り娘だった訳でこんな経験、初めてだろう。それにしても思い切りが良すぎる所もあるが、無謀ということでもない。

「エステルは何もかも初めてだから仕方ないよ。でもちゃんと自分も大事にしないと。見てて危なっかしいから」

「それはエリイもだろ。オレから見たらエリイもエステルも変わんねえよ」

エステルを見ていると冷や冷やするというか何というか。後先考えない辺りは昔のエリシアとそっくりであるとは口が裂けても言えない。

ユーリからすればエリシアも見てて十分危なっかしい。この少女は本当に自覚してないのか。

人形を取りに飛び出しそうになったり、危険を省みずガギとかいう男の間に割って入ってくるわけで下手すればエステルよりも危険な気がする。

「エステルよりはマシ……だと思っけど？」

「でも結界の外って、狂暴な魔物が沢山いて、こんなに危険だったんですね。ここに結界魔導器を設置出来ないんでしょうか？」

マシで一旦考えた辺りエリシアにも自覚があるのだろう。ならば尚更自覚のないエステルよりも始末が悪い。ユーリも人に言えたことではないが、彼女も相当なお節介らしい。

そこへ一仕事終えたラピードが帰って来てちょこんとユーリの横に行儀よく座った。

魔導器、取り分け結界魔導器は数ある魔導器の中でも特に値がはるものである。人々が生活している街でもない限り、帝国は一瞥にわざわざ取り付けようとは思わないだろう。

「そりゃ、無理だろ。結界は貴重品だ」

「例えあったとしても帝国は、設置はしてくれないでしょう？ いっただって一部の人間だけが恩恵にあやかり、弱き者は虐げられる。それが今の世界の“仕組み”だから」

その仕組みを作ったのはこの世界唯一の国、紛れもない帝国。腐敗しきった騎士団や評議会などあてにならない。

帝国には自由も平等もない。だから父は帝国を捨て、騎士を辞め、ギルドを作ったのだと。

エリシアだって帝国の全てを否定している訳ではない。ただ彼等の中にはどうしようもなく救いようのない人間がいるのも事実だ。

語るエリシアはユーリが見てもどこか冷めたというか達観したような顔をしていた。

「魔導器を生み出した古代グライオス文明の技術が甦ればいいのに……」

エステルがぼつりと呟く。

古代グライオス文明。千年以上も前、エアルの存在を発見したクリティア族は魔導器を発明した。現在使われている魔導器の殆どがこの時代のものであると言われている。

それに加え、現在の技術と知識では筐体は別だが、魔核の生産は困難であり、発掘に頼るしかない現状だ。刹那、立ち上がった三人の前に槍を手にした騎士が近付いて来た。

「その三人、少し話を聞かせてもらいたい」

何やら騒がしい。どうやら騎士と男二人が言い争っているらしく、その内顔に傷のあるフードを被った男が声を荒げた。

二人とも身のこなしだけを見ても手だれであると分かる。

「だから、何故ここを通さんなのだ！ 魔物など俺様がこの拳でノックアウトしてやるものを！」

見覚えのある二人を見つけたエリシアは思わずユーリの背中に隠れた。

あまり出会いたくない相手である。個人的にもそうだし、立場的にもだ。この際、ユーリやエステルに不審に思われても構わない。それよりも今は隠れる方が重要である。

「エリイ？」

「ちよつとこのままでいさせて」

気付かはしないだろうが、エリシアはユーリの肩に手を置いて顔を半分だけ出して様子を伺う。

端から見れば奇妙な光景だが、エリシアにしてみれば他人の目よりも、あの二人に見付かることの方が色々と面倒なのだ。

「簡単に倒せる魔物じゃない！ 何度言えば分かるんだ！」

「貴様是我々の実力を侮るというのだな？」

騎士がどうか説得しようとするが、フードの男の隣に佇んでいた鳶色の髪の男が口を開いた。地の底まで響くかと思う声は、騎士を気圧すには十分だろう。

男は言うなり、背中の剣というには大き過ぎるそれを抜き、正面で掲げる。そして騎士の制止を振り切って渾身の力で地面に叩きつけた。

衝撃で砂埃が舞い、辺りを砂色に染める。余程力で叩き付けられたのだろう。地面は剣の形に陥没していた。

「邪魔するな！ 先の仕事で騎士に出し抜かれた鬱憤をここで晴らす！」

「おい！」

一触即発の状態に三人に声を掛けた騎士も、他の作業をしていた者もそれを中断して駆け寄った。騎士らは果敢にも槍や剣を突き付けているが、仮にもギルドの首領である男にしてみれば烏合の衆同然だろう。

「これだからギルドの連中は！」

一人の騎士が呆れたように言うが、そこは聞き捨てならない。別にギルドに所属している者全員が彼等のように血の氣が多い訳ではないのだ。本当に思わずばやいてしまう。

「ギルドって言うより魔狩りの剣なただけど……」

「何か言ったか？ にしてもあの様子じゃ、門を抜けるのは無理だな。騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探そう」

心の中で思っていたつもりだが、口に出してしまったらしい。ごまかすためにも、とりあえず愛想笑いをしておくことにした。

エリシアはユーリの背に隠れたまま、その場を後にする。二人の姿が見えない所まで来るとほっと胸を撫で下ろした。

カウフマンの提案

「ねえ、あなた。私の下で働かない？ 報酬は弾むわよ」

情報を求めて砦内を歩き回っていた一行に（というかユーリに）話掛けて来たのは、護衛らしき人物を引き連れた赤毛に眼鏡の女性。だが当のユーリは女性を軽く一瞥しただけで問いには答えず視線を逸らす。エリシアはと言えば、またしても内心焦っていた。

彼女はギルド、幸福ギルド・ド・マルシェの市場の首領カウフマンである。魔狩りの剣を率いるクリントと違い、直接の面識はないものの、獅子レオンハルトの咆哮の関係者だと知られれば色々と話がややこしくなる。

そんなユーリの態度に後ろに控えていた護衛が眉を寄せた。

「社長に対して失礼だぞ。返事はどうした」

「名乗りもせずに金で吊るのは失礼って言わないんだな。いや、勉強になったわ」

「名乗る時はまず自分からが礼儀よね。というか私たちを無視しての時点で失礼だと思わない？」

おどけて言うユーリにエリシアもエステルとラピードに目を向けて言っただけだ。

一旦はまた隠れようとも思ったが、こそこそしている方が怪しいし、もしばれた時はその時だ。どうせなら堂々としていよう。

「お前ら！」

いきり立つ寸前だった護衛を女性——カウフマンは差し出した片

手で制した。

怒っている訳ではない。静かに笑っているだけだ。

「予想通り面白い子ね。それと貴女も。確かに先に名乗って置くべきだったわね。私はギルド『幸福の市場』のカウフマンよ。商売から流通までを仕切らせてもらってるわ」

一口に商売から流通と言っても侮るなかれ、様々な情報に通じてなければならぬ。

それは商品の相場であつたり貴重な情報であつたりと色々だが、下手をすれば魔狩りの剣などよりずっと敵に回せば厄介だ。

「ふーん、ギルドね……」

ユーリが生返事をするが、ザーフィアスに住んでいる者がギルドの人間にあまり良い印象を持っていないことが分かる。それはある意味エリシアが騎士を良く思っていないことと同じだ。

その時、一行の耳に魔物が門に体当たりするけたたましい音と地響きが届いた。

カウフマンは苦笑しつつ肩を竦めて見せる。

「私、今、困ってるのよ。この地響きの元凶のせいだ」

「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか？」

その間にも地響きは未だ鳴り止むことなく、大地を揺らしている。もしそれが魔物の仕業だというのなら、正に人の手に負えるものではないだろう。

「ええ、平原の主のね」

「どこか別の道から、平原を越えられませんか？ 先を急いでるんです」

今まで黙っていたエステルが遂に痺れをきらせて口を挟んだ。

彼女にしてみれば一刻も早くフレンの後を追いたいということだろうが、それが出来ればカウフマンとて既に砦にはいないだろう。

「さあ？ 平原の主が去るのを待つしかないんじゃない？」

エステルだけは気付いていないが、そう言う彼女には何か含みがある。フレンがハルルにいる場合、ここで足止めを食うのはあまりよろしくない。

だが焦ってもどうにかなる事態ではないことも確かだ。そこでエリシアは諭すようにエステルに言う。

「エステル、焦っても仕方ない。まずは落ち着いて」

「待つてなんていられません。わたし、他の人にも聞いてきます！」

しかしエステルは言うないなや走り去って行った。

おすわりの体勢だったラピードがユーリに目配せした後、長い尻尾をたなびかせてエステルを追う。

エリシアも彼女のことは気になったが、ユーリを放って行くことも出来ず、結局留まることにした。ラピードもついているなら心配ないだろうと踏んだからである。

「流通まで取り仕切ってるのに別の道、ほんとに知らないの？」

ユーリの問いは暗に何か知っているだろうとの確認でもある。エ

リシアもまたカウフマンは絶対に何かを知っていると確信していた。世界の流通を一手に引き受ける“幸福の市場”の情報網は伊達ではない。でなければ世界の流通を取り仕切ることなど出来はしないのだ。

「主さえ去れば、あなたを雇って強行突破って作戦があるけど、協力する気は……なさそうね」

「おい、エリイ、何て顔してんだよ」

「何でもない。でも護衛なら他のギルドに頼めばいいんじゃない？ 蒼き獣とか。後は……暁の雲に獅子の咆哮とか」

他のギルドの護衛を引き受けるギルドは、エリシアの父が率いる獅子の咆哮を始めとして、蒼き獣や暁の雲などがある。

特に獅子の咆哮は護衛を専門としており、五大ギルドではないが、それに匹敵する知名度を誇るのだ。

「そーそ。そんなに護衛が欲しいなら、騎士にでも頼んでくれ」

「冗談は止めてよね。私は帝国の市民権を捨てたギルドの人間よ？ 自分で生きるって決めて帝国から飛び出したのに今さら助けてくれないでしょ。当然、騎士団だってギルドの護衛なんてしないわ。他のギルドに頼みたくても通れないんだから意味ないわ」

そもそもギルドとは帝国のやり方に反発する自治組織である。騎士団や評議会の腐敗、人々を省みない政治に不満を持つ者は多く、そんな彼等は帝国の市民権を捨て、帝国の関与を受けないダングレストを始めとした街を作り上げた。

彼等の街は帝国の中にありながらも治外法権であり、帝国の法は

一切通じない。彼等は帝国からの自由を得た代わりに与えられるべき全てを捨てたのだ。

「へえ、自分で決めたことにはちゃんと筋を通すんだな」

言うユーリの顔は微かに驚きの入り混じった笑みを見せた。

ギルドの連中もそれほど悪い者たちではないらしい。少なくともちゃんと筋を通す人物はユーリは嫌いではない。

「そのくらいの根性がなきゃギルドなんてやってらんないわ」

確かにそうかもしれない。ギルドの首領をやっていくとなれば中途半端では無理だ。相応の覚悟と責任、根性がある。

父も笑いながらよく言っていたから。エリシアはそこで始めてカウフマンに好印象を持った。

「なら、その根性で平原の主も何とかしてくれ」

「ここから西、クオイの森に行きなさい。その森を抜ければ平原の向こうに出られるわ」

クオイの森。ザーフィアスとハルルを結ぶ深い森。確かにそこなら砦を通ることなく、北に抜けられる。

エリシアが旅の途中、小耳に挟んだ話では霊が出るとか、呪われているやの普通なら係わり合いになりたくない噂ばかり。

正直な所、エリシアは魔物よりも幽霊の方がよっぽど怖い。出来れば通りたくないのだが、見上げたユーリの顔は不敵な笑みに彩られていた。

「けど、あんたらはそこを通らない。ってことは、何かお楽しみが

あるわけだ」

暗にそういう訳である。でなければ何の見返りもなしに情報をくれたりはしないだろう。ユーリにも大体の察しはつく。

ユーリにしてみれば何があるうとも構わないのだが、隣のエリシアは諦めたような哀愁漂う顔をしている。

「察しのいい子は好きよ。先行投資を無駄にしない子はもっと好きだけど」

「礼は言っとくよ。ありがとな、お姉さん。仕事の話はまた縁があれば」

手を振ってユーリが歩き出したため、エリシアもまた礼を言っ
てユーリの隣に並ぶ。カウフマンが思い出したようにエリシアを呼び止めた。

嫌な予感がして顔だけを動かして振り向く。呼び止めた本人は満面の笑みでこう言った。

「お父様によろしくね」

流石は幸福の市場の首領だと言っべきだろう。

一瞬言葉に詰まったがそこはエリシアも仮にもギルドの首領の娘である。いつも父がしているように胸に手を当て優雅に礼をした。顔には余裕の笑みを浮かべて。

「ええ、伝えておきます」

「……血は争えないってこういうことなのかしらね」

「知り合いか？」

「ううん。直接の面識はないけどあっちが知ってたみたい。それは置いてクオイの森って呪いの森とも呼ばれているみたいで……出るらしいよ」

知り合いか、と問うユーリに首を振る。エリシア自身はカウフマンと話したことはない。向こうが一方的に知っていたのだろう。獅子^{オンハルト}の咆哮の娘、というのは自分が思うよりずっと知られているのかもしれない。

ユーリはまだ何か気になっているようだが、エリシアにしてみれば遠慮したい。愛想笑いを浮かべ、どうにか話を逸らす。

魔物はまだいいが、“あれ”は勘弁願いたかった。そもそも得体の知れない、よく分からないものが嫌なのだ。ユーリはと言えばふーんと生返事を寄越すだけ。

「……もしかして怖いのか？」

「わ、私が？ そんな事ない。幽霊でも何でもばこにしてやるから」

精一杯笑おうとしているが、顔が引き攣っていることにエリシア自身は気付いていないらしい。

それがユーリの笑いを誘い、少し意地悪だと思いつつ後ろを指差した。

「エリイ、後ろに何かいるぞ」

その一言で面白いように笑顔が引き攣った。

途端、弾かれたように走り出したかと思うとエリシアはユーリの胸に飛び込んで来た。ちよつと遊び過ぎたかと後悔しつつ、子供にするように彼女の頭を撫でてやる。

「冗談だ。悪かった。まさかそんなに怖がるなんて」

思わずしがみついてしまったエリシアは恥ずかしくて顔を上げられない。

ぼこぼこにすると言い切ったのに情けないとも思う。というかユーリにはバレバレだったようだが。ユーリはまるで子供にするように頭を撫でてくれる。

子供扱いされているみたいで嫌なのだが、ユーリの手で撫でられると何故か安心した。

落ち着いた所で顔を上げると、彼にしては珍しく何の皮肉もない笑顔のユーリと目が合う。笑われているのに不思議と腹は立たない。

「落ち着いたか？」

「うん、大丈夫」

頷いた直後、まだユーリに抱き着いたままな事に気付き、慌てて体と手を離す。恥ずかしく顔から火が出そうなくらいエリシアは動

揺っていた。

この年になつても思うが怖いものは怖いのだ。分かり易く百面相をするエリシアをユーリは笑いを堪えつつ見つめている。

戦闘の時は頼もしいのに時に見せる一面は年頃の少女そのものだ。

「おし、エステル探しに行くか」

「きつと疲れて座り込んでると思うよ」

だから今は気付かない振りでもしておこう。

ユーリはエリシアが付いて行きやすいよう、ゆっくりと歩き出した。

案の定エステルは地面に座り込んで一息ついていた。隣にはお目付け役のラピードが行儀よく座っている。俯いた彼女は元気がないように見えた。

聞かなくとも分かるが、砦を通らずにハルルに行く方法は見つからなかったのだろう。

「エステル」

「……ちよつと休憩です。魔物が去るまでこんな場所で待ったりしませんから」

ユーリが声を掛けても、エステルは目を合わせようともしない。

焦るなと言われたことにまだ怒っているのだろうか。

「あつそ。じゃあ、二人で抜け道に行くことにするわ」

「エステル、行こう。……私はあんまり気乗りしないけど、ね」

ユーリは言うだけ言うと、背を向け入口へと歩き出す。

エリシアはエステルを気にしつつ、後ろを振り向きながらユーリに続く。正に寝耳に水であったエステルは立ち上がって慌てて二人の後を追った。

「え？ 分かったんですか？ 待って下さい！」

呪いの森

鬱蒼と生い茂る木々は踏み入る者を拒むように佇んでいる。天を
目指すように伸びた枝と葉のお陰で空は見えず、所々隙間から漏れ
る日の光が森を照らしていた。

時折聞こえる鳥とも獣ともつかない遠吠えは立ち入る者に恐怖を
与えるには十分だ。その例に漏れず、エリシアの顔もまた引き攣つ
ている。

だがエステルは全く彼女のそんな変化には気付いていない。

「……この場所にある森って、まさか、クオイの森……？」

辺りを見回しながらエステルは呟く。城にあった本で読んだ覚え
がある。

何分それも古いもので真偽さえ怪しいものだが。

「へえ、エステルよく知ってるね」

「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりかかる、と本で読んだ
ことが……」

城育ちのお嬢様ということで世間知らずなのだろうが、エステル
は意外に博識である。

物騒な噂のお陰で、クオイの森には近隣の人間も滅多に近寄らな
いという。

森の奥へと続く道も街道のように舗装されている訳でもなく、正
に獣道というのに相応しい。

「なるほど、それがお楽しみってわけか」

言いつつ、ユーリの足は既に森の中に向いている。

エリシアも精一杯の強がりで彼の後に続くが、右手と右足が同時に出ていることに本人は気付いていないのだろ。一方のエステルは何やら躊躇っているようで、微妙な表情をしていた。

「行かないのか？ ま、オレはいいけど、フレンはどうすんの？」

「……分かりました。行きましょう！」

砦が通行出来るまで、待っていてはとても間に合わない。覚悟を決めたエステルは力強く頷いた。生命力溢れる雑草を掻き分け一行は進む。先頭をラピード、これは彼が犬である故の聴覚と嗅覚を持つため、にエリシア、エステルと続き、しんがりをユーリがつとめる。

エステルが真ん中なのは、彼女が一番実戦経験や諸々で皆より劣るためと魔物に襲われたとしても対応しやすいようにだ。

ただエリシアは周囲を油断なく警戒しているものの、今度は左手と左足が同時に動いている。

森の奥に進むにつれ、木々の間から光が射す場所も少なくなり、得体の知れない鳴き声がこだましていた。

『私、絶対父さんみたいに強くなるから！』

それが幼い頃の私の口癖だった。皆を率いて戦う父の姿は本当にかっこよくて、自分もいつかは強くなって父の役に立ちたかった。わざわざ銃や術を選んだのも非力な自分の弱点を補うため。旅に出るまでは、空いた時間を見つけては毎日のように稽古をつけて貰っていた。

思えば父とはもう一年近くも会っていない。ザーフィアスへの用事も父のギルドのメンバーから聞いただけであるし。

自分はある頃から強くなれたのだろうか。父と並ぶまでとは到底行かない。けどそう、背中を追うぐらい出来ているとエリシアは思う。

何だか騒がしい。

半ば覚醒しつつある意識の中でエリシアの耳は言い争う男女の声を捉えた。

「ユーリ！ 女の子の顔をそんなにまじまじと覗き込んだじゃいけませんよ」

「はいはい、分かってるって。にしてもまだ目、覚めないのな」

このまま眠りたい衝動に駆られたが、意を決して重い瞼を上げる。誰かが自分の顔を覗き込んでいた。ただ逆光に遮られて表情までは分からない。

半分寝ぼけた意識では正常な判別すら出来なかった。

「お、起きたか？」

その声でやっと頭が覚醒し、目が慣れたようで自分を覗き込んでいた人物が誰だか分かった。ユーリである。

それと同時に自分の頭が何か柔らかいものの上に乗っていることに気付く。

起き上がろうとすると、後ろから出て来たエステルの手止められた。

「駄目です。まだ横になっていないと。エリイ、倒れたんですよ」

どうやら柔らかいものはエステルの膝だったらしい。

倒れた、との言葉でエリシアは初めて、自分は倒れたのだと理解した。そう言われれば、気分が悪くなって……。その先は思い出せない。

「ん、ありがとう、エステル。でも私は大丈夫」

「駄目です！ もう少し休みましょう！ ねえ、ユーリ」

こんな所は結構強引なエステルらしいと思う。実を言えばまだ少し気分が悪かった。

エステルに話を振られたユーリもまた同意する。

「だな。もう少し休んでいいと思うぞ」

「……じゃあ五分だけ」

そこまで言われるなら、お言葉に甘えて休ませて貰うことにする。眠ってしまわないようにエリシアは軽く目を閉じた。

自分が倒れたのはエステルによるとエアルが原因らしい。何でも濃すぎるエアルは人体に影響を与えとか。その証拠にエステルも気分が悪くなったと言っていた。

ユーリやラピードはぴんぴんしていたが、エステルいわく体質が関係あるらしい。五分ほど休ませて貰ったエリシアは立ち上がって歩き出す。

「じゃあ、ユーリって鈍いんだ」

「繊細じゃなくて悪かったな」

と軽く頭をこずかれる。すると今まで黙って歩いていたラピードが立ち止まり、低い唸り声を上げた。つられてラピードの視線の先を見ると、草むらが僅かに動く。

かと思うと何かが飛び出して来る。

「エツグベアめ、か、覚悟！」

飛び出して来たのは少年だった。ぴんと跳ねた鳶色の髪と同色の瞳。その小さな体には不似合いな大きな鞆を下げている。

まだ十代前半かと思われる彼は、身の丈ほどもあるハンマーを振りかぶった。

しかし悲しいかな少年の力では振り回されるのがおち。

「うわっ、とつとつ！」

予想通り少年の体はくると回転する。突然の出来事に呆然とするエリシアとエステルに代わって、見兼ねたユーリは剣を抜き、切っ先を無造作に差し出した。

金属同士が触れ合う特有の甲高い音を立ててハンマーが地面に落ちる。

「うあああつ！ あうっ！」

ハンマーが手から離れたことで少年は体重を支えきれず、盛大に尻餅を付いた。

だがそれでも勢いを殺せず、そのまま地面に大の字に倒れる。

「う、いたたた……」

倒れた少年の視界に、自分を覗き込む犬の姿が見えた。口にはキセルをくわえ、片方の目には大きな傷が走っている。

青い瞳で自分を見下げる犬を魔物と勘違いしたのか、少年は叫び声を上げて固く目をつむった。エリシアたちの姿など目に入ってもいないのだろう。

「ひいっ！　ボ、ボクなんて食べても、美味しくないし、お腹壊すんだから。ほ、ほんとに、たたすけて。ぎゃああー！！」

「忙しいガキだな」

呆れ口調だがラピードを止めない辺り、実にユーリらしい。エリシアは仕方なく少年の側に屈んでみる。エステルもエリシアの隣に並んだ。

「ラピードは魔物じゃないから平気よ」

「はい、大丈夫ですよ」

「あ、あれ？　魔物が女の人に」

「ったく。なにやってんだか」

視線をラピードから二人に移した少年は、戸惑っているらしく、目を白黒させている。

エリシアとエステル、そして呆れたようなユーリの声に、少年はやっとラピードが魔物ではないと気付いたらしい。

ズボンに付いた土を払うと立ち上がり、一人前に胸をはって自己紹介をする。

「ボクはカロル・カペル！　魔物を狩って世界を渡り歩く、ギルド『魔狩りの剣』の一員さ！」

その瞬間、エリシアの瞳が僅かに陰った。その事に気付いたのはユーリのみ。

エリシアは何も魔狩りの剣、全てが気に入らない訳ではない。

ただ彼等のやり方に疑問を感じるのだ。魔物だからという理由だけで人に害を出さない魔物までも狩るという彼等のやり方が。

この少年は違つかもしれない。それでも魔狩りの剣というだけで、自分が先入観を持ってしまふのもまた事実だ。

「オレはユーリ。それにエリイとエステル、ラピードだ。んじゃ、そういうことで」

だがユーリは適当に名乗り、ラピードを連れてそそくさと森の出口に向かって歩き出す。

エリシアもまた、出来れば魔狩りの剣の一員には係わりたくないのが本音である。

「魔物結構出るみたいだから気をつけてね」

エリシアはユーリとラピードの後に続いた。

エステルは迷ってまだおろおろしていたが、置いて行かれては堪らない。とりあえず謝って二人の後を追う。

「あ、え？ ちょっとユーリ、エリイ！ えと、ごめんなさい」

「へ？ ……つて、わゝ、待って待って待って！」

少年——カロルは何故か、慌てて三人の前に回り込んだ。
何かまずいこともあるのだろうか。

「三人は森に入りたくてここに来たんでしょ？ ならボクが……」

「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今から花の街ハルルに行きます」

一時はどうなるかと思ったが、本当に道中、何もなくて幸いだ。出来ればこの森には二度と入りたくないというエリシアは切実に思う。森を抜ければハルルの街は直ぐそこである。

「へ？ うそ！？ 呪いの森を？ あ、なら、エッグベア見なかった？」

「見てないと思う。ねえ、ユーリ」

「ああ、見てねえな」

しかしエッグベアと言うと、この少年が相手にするには少々物騒な魔物である。

体格も当然彼より大きいし、狼などとは比べものにならない鋭い牙と爪の攻撃を受ければ一たまりもない。

何か理由があるのだろうか、それを聞けば厄介ごとに首を突っ込むのと同義だ。

「そっか……なら、ボクも街に戻ろうかな……あんまり待たせると絶対に怒るし……うん、よし！ 三人だけじゃ心配だから、魔狩りの剣のエースであるボクが街まで一緒に行つてあげるよ」

カロルと名乗った少年は、何やらぶつぶつ呟いた後、一人で納得してうん、と声を上げる。

次に三人の方に向き直ると大きな鞆に付いている武醒魔導器ボーディプラスティアを見た。

「ほらほら、なんとたつてボクは、魔導器だつて持つてるんだよ」

そう言われてもユーリとエステルもデザインが違うものの、左手に腕輪型の武醒魔導器を付けているし、エリシアも耳飾りとして付けている。

それにラピードだって持っているのだ。三人と一匹の魔導器を見たカロルが仰天した。

「あ、あれ、皆なんで魔導器持つてるの！」

普通、魔導器というのは帝国が管理している。そのため、貴族ではない一般の人間が魔導器を手にする機会は無いに等しい。

例外はエリシアやカロルのように帝国の法の及ばないギルドの間である。

ちなみにユーリはと言うと、騎士団を辞める際に無断に拝借して来たらしいとか。

「話しに夢中になるのは良いけど、後ろには気をつけた方がいいわね」

エリシアの右手にはいつの間にか抜いたのか魔導器――銀色の銃がある。

カロルが武器を手に慌てて背後を振り向けば、白煙を上げて倒れる魔物の姿。カロルが気配に気付かなかったのは話しに夢中になっていたことと、魔物が植物に擬態していたせいもある。

「エースの腕前も剣が折れちゃ披露出来ねえな」

ユーリが言うようにカロルのハンマー（形だけを言えば剣に似ている）は先程、ユーリが剣で止めたお陰で刃先が無残に折れている。

「いやだな。こんなのただのハンデだよ。あれ？　なんかいい感じ

？」

カロルが試しに素振りをしてみると、なかなか良い感じた。しかし三人と一匹は少年を待つてはくれない。既にカロルを一人残して、森の出口へと向かっている。

カロルは置いて行かれない一心で三人の姿を追って走り出した。

「ちょ、あ、方向分かってんの？ ハルルは森出て北の方だよ。まあ、置いてかないでよ」

閉ざされた森の中、ほんの十分ほど前にエリシアたちが休憩していた開けた場所に一人の男の姿があった。

緩やかに波打つ銀色の髪に、紅玉のように鮮やかな瞳。纏った長衣は瞳同様血の色を思わせる赤。手には精緻な細工が施された抜き身の剣を下げている。

どうやらただの剣ではないらしく、刀身は赤と白のグラデーシオンをしており、見る者が見れば何故彼がと驚愕したに違いない。

こんな所で何をするのかと思えば、男は朽ち果てた魔導器に向かって剣を掲げた。

花の街ハルル

カロルを加えた一行は、クオイの森を出て、街道沿いに北上した。ハルルに到着したのは空が赤みを帯び始める夕刻に近い時刻である。街に入った瞬間、本来あるはずのものが無いことにエリシアやユーリは気付く。空にはザーフィアスを初めとする街には必須と言っているはずの結界魔導器シルトブラスティアの輝きがない。

エリシアの記憶では、街の中央にある大樹が結界魔導器の役割を果たしているはずだが……。

入口からでもよく見える大樹は、色褪せて今にも枯れそうな程に元気がない。異変はそれだけではなく、街の周囲には魔物を警戒するように武器を携えた者たちの姿が見受けられる。

「この街、結界ないのか？」

「そんなはずは……」

ないと言いかけたエステルは空を見上げるが、どこにも結界魔導器シルトブラスティアの存在を示す光輪はない。

茜色に染まりつつある空が広がっているだけだ。

「ユーリとエステルはハルルは初めて？」

「この街はね、ここからでも見えるでしょ？ あの大樹が結界魔導器の役割を果たしているの」

カロルが二人を振り返って尋ねる。そもそも彼はハルルから来たのだから、結界が消えている理由も知っているのだらう。

その理由をエリシアがカロルに代わって解説する。
数ある結界魔導器の中でもハルルの魔導器は特殊で大樹と融合しているらしい。

だがそれ故に、花が咲く時期は結界が弱まったりと普通の魔導器では考えられないイレギュラーな事態も多いという。

「樹の結界？」

「魔導器の中には植物と融合し、有機的特性を身に付けることで進化するものがある、です。その代表が、花の街ハルルの結界魔導器だと本で読みました」

ユーリの問いにエステルは、目を閉じ、まるで本を朗読するようにすらすると語った。

流石は帝都と言うことが。城には魔導器に関して詳しく綴った文献もあるらしい。

「……博識だな。で、その自慢の結界はどうしちまったんだ？ 役に立ってねえみたいだけど」

辺りを見回せば、人通りは少なく、ちらほら見かける住民も皆一様に疲れた様子で地面に座り込んでいる。

普段結界に守られているからだろうが、いざ結界がなくなれば、ハルルの街は狂暴な魔物から身を守る方法は限られて来る。その一つが住民による見張りなのだろうが、魔物はこちらの都合など構いなしだ。

いつ来るか分からない魔物に対して常に気をはって置くというのは想像以上に辛いことである。

「毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるんだよ。ち

ようど今の季節なんだけど、そこを魔物に襲われて……」

「結界魔導器がやられたのか？」

ハルル自体は他の街と比べて決して広い訳ではない。それでも全てを守るには無理がある。巡礼に訪れた騎士たちが魔物を退けたのだが、寧ろ人を守ることを優先させた結果が結界の消失だった。

普通の結界魔導器なら、こうはなっていなかったかもしれないが、ハルルの結界魔導器は先も言ったように特別なのだ。

結界の消失など前例がない。全て手探りの状態なのである。

「うん、魔物はやつつけたんだけど、倒した魔物の血を樹が吸っちゃって、徐々に枯れ始めてるんだ」

倒した魔物の血が土に染み込み、ハルルの樹を弱らせてしまった。植物や木は地面から養分や水分を吸収する。ではそこに毒となる魔物の血が染み込んでいたら？ 強力な毒素を備えたそれを浄化することは簡単ではない。カロールが呪いの森と言われるクオイの森にいたのもこれが一重の原因である。

やや落ち込んだ様子で話していたカロールの前を一人の少女が通り過ぎた。

「あ！」

「どうかした？」

エリシアが聞いても、カロールは何やら少女が去った方を見つめている。動き易そうな戦闘向きの服装だったことから恐らくは、同じ魔狩りの剣のメンバーなのだろうか。

カロールは数秒思索した後、慌ただしくあの少女を追って駆け出し

た。

「ごめん！ 用事があつたんだ！ じゃあね！」

「勝手に忙しいやつだな。エステルはフレンを探すんだよね……」

振り向けば、後ろにいたはずのエステルの姿がない。どこに行つたかと思えば怪我人の手当てだ。かいがいしく世話を焼いている。勿論、それは彼女の美点でもあるのだが、少しは自重してもらいたいものだ。

「大人しくしとけてまだ分かってないらしいな。それにフレンはいいのかよ」

「んー、多分だけでもうこの街には居ないわね。そのフレンって人」

呆れたようなユーリに、エリシアはそう断言した。ざっと見回した所、警備に当たっているのも武器を携えた住民であるし、怪我人の治療もままならない状況のようでもある。

他の騎士ならともせず、ユーリやエステルの言う“フレン”なら率先して人々を助けるのではないか。

「かしんねえな。ま、駄目もとで探してみるか」

「でもまずは怪我した人の手当が先かな。エステルだけじゃ手が回らないみたいだし」

女性たちで手分けして怪我人の治療に当たっているようだが、治療術を扱えるのは当然エステルだけ。無理をするのは目に見えている。

無理をするという点ではエリシアと同じ、しかし彼女の場合は下手に自覚がある故に厄介だ。

「ユーリも早く！」

エリシアは怪我人の近くに膝をついて既に治療を始めている。ホントに城で厄介なもん拾っちゃったな、しかも二匹だぞ、とラピードにぼやきながらユーリは半ば投げやりに返事をした。

「あー、はいはい」

エリシアが手を組んだ先から生み出される煌めく金色の粒子。目にも鮮やかな光は、傷口に集束すると瞬く間に出血を止め、傷を負う前の綺麗な肌に戻した。

隣には彼女と同じように傷ついた人々を癒すエステル姿もある。ユーリも包帯を巻いたりと自分に出来ることを手伝った。

「はい。これで大丈夫です」

手当てを終えたエリシアはさながら天使のようににこりと微笑んだ。子供も大人もその場にいた人々は、二人の少女によって齎された魔法の光を驚きの表情で見つめている。

エリシアやエステルのようにここまで治療術を扱える者は非常に稀だ。例え騎士団の者でも同じようにはいかないだろう。

「なんとお礼をいえばいいのか」

全ての怪我人の手当てを終えた後、街の代表らしき老人が皆に代わって頭を下げた。

申し訳なさそうに礼を言う老人に二人は慌てて頭を横に振る。

「いえ、本当にいいですから」

「私たちがしたくてやったんです。そこまでお礼言われることでは……」

「ま、そうだな」

二人に同意するようにユーリも頷く。自分たちが何かしたくて勝手にやったこと。そこまで申し訳なさそうに言われれば逆にこちらが恐縮してしまう。

人を助けるのに理由はいらない。エリシアはそう思っているし、これからもその考えを変えるつもりもない。

「謙虚な方々だ。騎士団の方々にも見習ってほしいものです」

「まったくですよ！ 騎士に護衛をお願いしても何もしてくれないんですから」

老人がため息をつく。他の人々からも怒りの声上がる。本当に騎士のやることなのか、と街の中でも随分と話題になった。

住民では魔物から身を守ることさえ難しいのに、騎士たちは素知らぬふりを通したのだ。

「まあ、帝国の方々には私らがどうなろうと関係ないんでしょうな」

「うそ……そんなはずは……」

ないとはエステルも言い切れなかった。フレン以外の騎士はそうなのだと心の中で理解もしていたのだ。

フレンの命が危険だと訴えた時も彼らは貴族の『の戯言だとたかを括って、聞こうともしなかったのだから。』

「あ、でも、あの騎士様だけは違っていましたよね？」

と人々の輪の中にいた若い女性が思い出したように言う。

数日前から街に滞在していた巡礼の騎士一行。他の騎士たちとは違い、彼らは住民たちを魔物から守ってくれた。

「おお、あの青年か。彼がいなければ、今頃私らは全滅でしたわ。今年は結界が弱まる時期が早く、護衛を以来したギルドが来る前に襲われてしまいましたな。偶然、街に滞在していた巡礼の騎士様御一行が、魔物を退けて下さったのです」

礼儀正しく、正に騎士の鑑と言っても過言ではない青年だった。彼らの活躍により魔物の殆どは退けられ、住民たちだけでも何とかやっていけるだろう。

それも結界が直るまでの時間稼ぎにしかないが。

「ん、巡礼の騎士つてもしかして……」

確かフレンもそうだったのではないか。エリシアの記憶が正しければの話だが。

フレンがユーリやエステルから聞いたような人間なら間違いなくその巡礼の騎士がフレンなのだろう。

流石ユーリの親友、エステルの知り合い。やはり彼も二人のようなお人好しなのだろう。ユーリに言えば、エリシアが言えたことではないと言われそうだが。

「その騎士様って、フレンって名前じゃなかった？」

言いながら、ユーリがよっこらせと腰を上げて立つ。

老人は旅の人間であるユーリがその騎士の名を知っていたことにやや驚いた様子で頷いた。

「ええ、フレン・シーフォと」

「まだ街に居るんですか!？」

「いえ、結界を直す魔導士を探すと言って旅立たれました」

結界魔導器を直そうと思えば、魔導器に精通した魔導士を探すしかない。

しかしハルルの結界は特殊であるため、普通の魔導士に直せるかどうかも分からない状況だ。

だが少しでも確率があるのなら、と騎士の青年は部下たちを連れて街を出た。ほんの数日前の出来事である。

「行き先までは分からないか」

「東の方へ向かったようですが、それ以上のことは……」

東、東と言えば魔導士たちが集まる学術都市アスピオの方角だ。

恐らくフレンはそのアスピオに向かったのだろう。あそこならハルルの結界魔導器を直せる魔導士もいるかもしれない。

「そうですか。でも、ここで待っていれば、フレンは戻ってくるんですね」

フレンがハルルに戻って来ると分かったことは、一先ずは良かった

たと言える。そうならばエステル随分短い冒険もここで終わりと
いうことが。

「よかったな。追いついて」

「以外と早く手掛かり掴めたね。んー、エステルの用事が終わらな
らこれからどうするかな？ ユーリさえ良かったら一緒に行ってい
い？」

魔核泥棒を追うのなら人数は多い方がいいし、何よりエリシア自
身がユーリと一緒にいたかった。ダングレストにいたせいか、今ま
で年の近い知り合いなんてそういなかったから。

もつとユーリや勿論エステルのことを知りたい。きつとこの旅も
直ぐに終わる夢のようなもの。だけど、あと少しだけ一緒に居ても
いいのだろうか。

自分の中に生まれつつある思いに戸惑いつつも、エリシアはそう
切り出した。

「オレは構わないってか大歓迎だけどいいのか？」

正直、彼女の銃の腕や魔術を考えると、同行してくれるのはユー
リにすれば有り難い。

だがそもそもエリシアはユーリと何の関係もないのだ。

いくら彼女が好意で言ってくれたとしても、これ以上こちらの事
情に巻き込むのはどうかとユーリは思ったのだ。するとエリシアは
軽く手を振って答えた。

「いいのいいの。どうせ行く宛てのない旅だしね。それとも迷惑？」

父からの頼みはもう済んだし、次の目的地も特に予定はない。

けれどユーリが迷惑だと言うのなら、大人しく引き下がろう。エリシアはユーリを困らせたい訳ではない。

そしてユーリも迷惑だなんてある訳がない。つくづくお人よしだと思いつつ、ユーリは右手を差し出した。

「いや、そいじゃ改めてよろしくな、エリイ」

「うん！」

エリシアは嬉しそうに頷いて、差し出された手を握る。ユーリの手は父を彷彿させる、しなやかで力強い手だった。

かなり今更だが、何となくやっぱり男の人なのだと実感する。別に忘れていた訳でもないのだが、別段性別を意識していなかったからなのかもしれない。

「おし、ハルルの樹でも見に行こうぜ。エステルも見たいだろ？」

「私も見たいな。近くで見たことないし」

「あ、はい！ でもいいんです？ 魔核泥棒を追わなくても」

エステルとしては是非とも、貴重な結界魔導器を見ておきたい。

近くで見れるとなると滅多にない機会であるし、城に戻れば恐らくもう二度と自由に歩き回るのは許されないだろう。

それまでにしっかりと外の世界を目に焼き付けたかった。

「樹見てる時間くらいはあるって」

エステルの言うことはもっともだ。しかし魔核泥棒——モルディオと名乗っていたそうだが、もし本当にモルディオならば間違いな

くアスピオにいる。

つまり目的地がはっきりしているなら急ぐ必要はないということだ。

「そうと決まれば早速、ね。はい、エステル」

ずっとエステルの目の前にエリシアの右手が出される。彼女の笑顔は、見ているだけで思わず笑い返したくなる、太陽を思い出させる笑みだ。

一瞬、意味が分からずぼうけていたエステルだが、エリシアの意図を理解したようで、ふわりと微笑んで彼女の手を取った。

天高く聳える大樹

三人が街中を歩いていると、走っていたはずのカロルが橋の上で何やらぶつぶつと呟いている。

自信満々に言い切っていた少年と同一人物とは思えないほどの落ち込みようだ。全身から落ち込んでますオーラを漂わせる彼の周りだけ心なしか暗い気がした。

「はあ、人違いか……ギルドのみんなも居ない……随分待たせたかなかなあ。怒って行っちゃったんだ……満開に咲くハルルの花……。見せてあげたかったのに。そうすれば、きっと……」

「カロル、どうしたんです？」

人違いと言うのはカロルの前を横切った少女のことだろう。ギルドの皆、つまりハルルの住民が頼んで置いたギルドの護衛とは魔狩りの剣ということか。

あまりの落ち込み様にエステルが心配して声を掛けるが、全く気付いていない。エステルの声が耳に入っていないようである。頭を抱えて、地面ばかりを見つめて尚も呟いていた。

試しに今度はエリシアがもう一度、名を呼んでみるがやはり反応がない。もうおしまい、ホントにおしまいだ、と呟き、近付きがたく、暗い雰囲気を漂わせている。

「一人にしといてやろうぜ」

「うん。何だか深刻そうだし」

カロルが魔狩りの剣のエースではない事は分かっているが、彼に

は彼なりの苦勞があるに違いない。ならば部外者が立ち入るべき問題ではないし、ユーリが言うように一人にしておくのが最良だ。

一行が視線をカロールから外した時、前から子供たちが走って来る。手には木剣を持った少年たちの瞳は好奇心に満ち溢れていた。

「これで魔物と戦えるぞお！」

「フレン様みたいに、魔物もやっつけよう！」

「お〜！」

まさか本気で街の外に出ていくつもりなのか。あながちないとも言切れない。

エリシアは思わず子供たちの前に立ち塞がった。所謂仁王立ちである。その姿は意外なほど板についていて、ユーリから見ても妙に貫禄があつた。

「こーら！ 子どもが危ないことしちゃ駄目」

鮮やかな手並みでエリシアが少年たちから木剣を取り上げる。その隙に、ユーリが逃げ出そうとしていた一人の首根っこを掴んで持ち上げた。

持ち上げられた少年は暴れるが、子供の力ではびくともしない。

「はいはい。エリイの話をちゃんと聞こうな」

「あのね、君たちの気持ちは分かるけど危ないことしちゃ駄目だよ。もし君たちが怪我しちゃったら、きつとお父さんもお母さんも悲しいと思うけどな」

エリシアにも経験があるからこそ分かる。幼い頃、少しでも父の役に立ちたくて無茶をしたことがあった。

魔物を倒そうとして大怪我をしたのだ。凄く怒られてその後、父はよく無事だったと涙を流して抱きしめてくれた。

痛いのは勿論、痛かったが、怪我より何より父を悲しませてしまったことが一番辛かったのである。

だからエリシアは、この子たちを同じ目に合わせたくないのだ。しゃがんで視線を合わせ、悲しそうに笑うエリシアに子供たちも何かを感じたのか、しゅんと肩を落とす。

「街の皆を守るのはもっと、そのフレン様みたいに強くなってからね。分かったら、危なくない所で遊んで来ること！」

「うん、ありがと。お姉ちゃん！」

「おい！ 早く来いよ！」

エリシアは太陽を思わせる笑みを浮かべ、木剣をそれぞれに返す。少年たちの顔がぱあっと輝いた。口々に礼を言い、街中に消えて行く。生き生きとした少年たちはまるで小さな嵐のようだった。ふうと一息ついたエリシアだが、二人の視線に気づく。ユーリは感心して、エステルは尊敬の眼差しで見つめている。

振り向いた先の二人の視線に居心地が悪いというか、いたたまれなくなり視線を逸らした。

「……私も同じだったから。無茶して、怪我して初めて分かった。自分を心配してくれる人たちのこと」

暫くの沈黙の後、エリシアは視線を逸らしたまま、ぼつりぼつりと自分の経験を語った。自分のことを話すのは少し照れ臭いけど、

何故か悪い気はしない。

「……ま、無くして初めて気付くものもあるだろうな」

ユーリもまた随分と無茶をしたことがある。騎士団に入る前も、騎士を辞めた後も、そして今でも。無くしたものは数えきれない。気付かされた事も何度もあった。

大切なものは無くしてから気づくのだ。その時にはもう遅い。

「無くしてから初めて気付くもの、ですか……」

エステルにはいまいち分らない。想像出来なかったといえば正しいだろう。もし自分が地位を捨て、このまま城に戻らなければ、いつか自分はその選択を後悔するのだろうか？

だがいくら考えても、答えを見つげ出すことは出来なかった。

「でも、あんな子供まで……。早く、結界が戻ればいいのに」

エステルはそう願わずにはいらなかった。あんな子供たちまで戦おうとしていた。

この結界が早く直ればいい。でなければ今のハルルの状態は長く続かないだろう。限界は住民たちが思う以上に近い。

「そうだな」

「本当に……こんな状態、きつと長くは続かない。もうみんな、限界だもん」

エステルに同意しながら、エリシアは自分に出来ることがないか考えた。街の人のためにも何とかしたい。その思いはある。

けれど専門の魔導士ではないエリシアには結界魔導器のことなど分かるはずもなく。

エリシアとて理解している。自分一人に出来ることなどたかが知れてると。

だが分かっているにも無力感に苛まれてしまうのだ。

『そう、お前一人じゃ何も出来ない、誰も救えないんだと言われて
いる気がする。結局、私は父さんみたいになれないのかな……？』

「エリイ？」

つい自嘲めいた笑みが零れた。何を今更、そう思う自分もいた。
名前を呼ぶ声にふと我に返り、慌てて顔を上げると、ユーリの紫掛
かった黒い瞳と目があつた。ユーリはそれ以外、何も言わない。

彼の瞳を見ていると、全てを見透かされるような、そんな感覚に
襲われる。＞居心地が悪いというか、いたたまれなくなって、エリ
シアは視線を逸らした。

見れば何かに気付いたらしいエステルも不思議そうに自分を見つ
めている。

ごめんごめん、と言って一人歩き出す彼女の後ろ姿を見つめなが
ら、エステルは複雑な表情で口を開いた。

「どう思います？ ユーリ」

「エリイにも色々思う所があるんだろ」

思えばユーリはエリシアのことは全くと言っていいほど知らなか
った。せいぜい知っているのは名だけ。城の牢獄で出会い、半ば成
り行きでここまで来た。

ユーリには少し眩しく、太陽のように明るい少女。胡散臭いおっ

さんと知り合いだったり、地理にも詳しいかと思えば銃や魔術の扱いに長けている。

では自分は、彼女の何を知っているつもりだったのだろう。その考えに至ったユーリもまた、自嘲気味に唇を歪めた。

「近くで見るほんと、でっけー」

ハルルの街の中央にそびえ立つ大樹は、ユーリが感嘆の声を上げるほどに強大だった。幹は人何人が囲めば取り囲めるだろう。それすらも想像出来ないほどに大きい。

見上げなければとてもではないが木全体は見えなかった。

「もうすぐ花が咲く季節なんですよね」

本来なら生命力満ち溢れ、薄紅色の花を咲かせるはずの木にはやはり、元気がない。近くで見ればそれがよく分かった。

木の下、根の埋まった地面は普通の色ではない。茶であるはずの

土は赤黒く変色している。それがカロルが言っていた魔物の血なのだろう。

「どうせなら、花が咲いているところ見てみたかったな」

「結界が直つたら皆でお花見してみたいね。きっと凄く綺麗だよ」

ユーリの言葉に頷き、エリシアも樹を見上げる。ハルルの樹が元氣を取り戻した時には、ユーリやエステル、ラピードとお花見出来たらいいなと思う。

お昼も勿論いいけれど、夜はもっと綺麗なのだろう。薄紅色の花が闇に浮かび上がって美しく、風流ではないのかと。

「そうですね。満開の花が咲いて街を守ってるなんて素敵です。お花見もぜひやりましょう！あの、ユーリ、エリイ、わたし、フレンが戻るまで怪我人の治療を続けます」

エステルならそう言うかとエリシアも分かっていた。きっと怪我人を見れば、いても立ってもいられないのだろう。

フレンが結界魔導器に詳しい魔導士を連れて来るまでは住民たちによる見張りが必要だ。

ならば当然怪我人も出る。住民たちも治療術を扱えるエステルの存在は有り難いはず。

「なあ、どうせ治すんなら、結界の方にしないか？」

「ユーリ、今、なんて言った？私の聞き間違いじゃなければ、結界を治すっておっしゃりませんでした？」

樹を見上げていたユーリがぼつりと呟く。エステルとエリシアは

思わず我が耳を疑った。

今、どうせ治すんなら結界の方にしないか、と聞こえたのは幻聴か。

最後の方が敬語になっているが、エリシアは自分では気がついていない。目を点にしてユーリを見ると案の定、彼は笑っていた。悪戯を思い付いた子供のよう。

「言っただって。魔物が来れば、また怪我人が出るんだ。今度はさっきのガキたちが大怪我するかもしれねえ」

「それはそうですけど、どうやって結界を？」

フレンたちですら治せなかったというのに。魔物の血を浄化出来れば恐らく、ハルルの樹は治る。しかし樹を枯れさせた原因である毒素を浄化しようにも、樹を侵す毒素が分からなければ治せない。だがそんな時間などなかった。治癒術では無理なのだ。決して万能の奇跡の力ではないのだから。ではどうすればいい。

「それなんだよなあ」

「ユーリも考えてなかったのね。治癒術じゃあ治せないし、かと言って他に方法はない……か」

いくら考えても良い案が浮かぶはずもなく。こうしている間にも樹は死に始めているのだ。

その時、三人の目の前を俯き、不幸オーラを漂わせたカロルが通り過ぎた。いち早く彼の姿に気付いたエステルが慌ててカロルを呼び止める。

「あ、カロル！ カロルも手伝ってください！」

「……なにやってんの？」

「結界を治す方法、考えてるの。カロール、さっき言ってた魔物の血を浄化する方法ってない？」

振り向いたカロールの顔は酷かった。この世の不幸を一身に背負ったかのように引き攣っている。

カロールはこう見えて歳の割に博識なのだ。何でもハルルの樹が枯れかけている原因を突き止めたのも彼らしい。

カロールならもしかしたら、と思ったのだが……。

「あるよ、そのためにボクはエッグベアを……でも、誰も信じてくれないよ……」

魔狩りの剣の皆もそうだった。誰一人としてカロールの話に耳を傾けてくれなかった。僕は皆のように強くない。

だけど、知識だけはあるつもりだった。

（分かってるよ。僕が臆病でどうしようもないってことくらい）
顔を上げようとしないうちにカロールにユーリは、しゃがみ込み、目線を合わせた。

「なんだよ、言ってみなつて」

「パナシアボトルがあれば、治せると思うんだ」

パナシアボトルというのは万能の解毒剤と呼ばれる貴重なものだ。確かにあらゆる毒を浄化すると言われるパナシアボトルがあれば何とかなるかもしれない。

その前に問題が一つある。あらゆる毒を浄化するとなれば当然、

それなりの値段がするといふものだし、この街の雑貨屋に在庫があるかどうかも怪しい。

揺れる心

「パナシールボトルか。よろず屋にあればいいけど」

「品切れだったよ。ボクが確認しない訳ないじゃん」

雑貨屋に足を向けかけた三人と一匹をカロルが投げやり気味に止める。言われてみればそうかもしれない。

もし在庫があるならわざわざ危険を侵す必要はないし、カロルもそこまで考えなしではないだろう。そこでエリシアにある考えが浮かんだ。

「さつきエッグベアを探してたって言ったけど、何か関係があるの？」

「あるよ。パナシールボトルの材料にエッグベアの爪が必要なんだ……結局、見つからなかったけど」

それで納得が行く。だからカロルは一人で森にいたのか。先程カロルは皆は信じてくれなかったと言っていた。つまりは魔狩りの剣のメンバーはカロルの話を信じず、彼は一人で呪いの森に足を踏み入れたということなのだろう。

しかしエッグベアなどそうそう見つかる魔物ではないし、仮に見つかったとしてもカロル一人では倒せない。少なくとも今のカロルでは、という意味だが。

「オレたちが手伝えは何かなるだろ」

「えっ？」

思わぬユーリの言葉に、俯いていたカロルが顔を上げる。するとユーリもエリシアもエステルも笑っていた。

自分を馬鹿にするような笑みではない。純粹な好意だろうか。

「そうですね！ 名案だと思います」

「でも出発は明日ね。もうすぐ日が暮れるから。夜の森は危険だし」

ユーリだけでなく、エステルもエリシアも行く気満々らしい。ラビードでさえ何度も尻尾を振っている。

カロルは不思議でなかった。何故、どうしてこの人たちは自分の話を信じてくれるのだろう。仲間たちでさえ信じてくれなかったのに。

「どうしてボクの話信じてくれるの？」

「他に手がないんでしょう？ それともカロル、嘘付いてるの？」

「違うよ……違うけど」

エリシアが言うように他に方法はない。でも分からない。

カロルだってやれば出来るんだと、ギルドの皆に分かってもらいたかったのだ。満開になったハルルの樹を、彼女に見せたかっただけなのに。

俯く少年の頭にユーリの手が乗った。

「なら問題ねえだろ」

顔を上げると、ユーリがにやりと笑っており、エリシアとエステ

ルも同じように笑う。その笑顔に脱力したカロルもまた同じように笑った。いや、苦笑した。

その後、カロルを含めた一行は、宿屋に向かうと二人一部屋、四人分の部屋を取り、少し早めの夕食を取った。

ユーリは剣を磨き、エステルは一階にあった本を借りて熱心に読み耽り、カロルは一心不乱に何かを書いている。エリシアは皆の邪魔をしないよう静かに、気付かれないように宿屋を出た。

既に日は暮れ、空には金色の月が輝いている。

その時、何かの気配に気付いて背後を振り返れば、何とラピードが立っていた。

「ラピードも散歩、一緒に来る？」

元氣よく、わんと返ってくる。どうやら自分だけでなくラピードも暇だったらしい。何をする訳でもなく、エリシアはラピードと街中をゆっくりとした足取りで回る。

街の中心部は勿論のこと、街外れにも見張りのために火が焚かれ、住民たちが武器を携えて見回りに当たっていた。

一人と一匹はそのままぐるりと街を一周すると、ハルルの樹へ向かった。月明かりに照らされた大きな葉はエリシアが立つ地面に大きな影を落としている。ここにも勿論、見張りの住民がいたのだが、エリシアが見張りを代わると申し出たのだった。

一時間仮眠を取って戻ると言っていたから、そう長い時間でもない。ラピードと一緒に幹に背を預けてハルルの街並みを眺める。

「星が綺麗。これなら明かりなんていらさないか」

真上に差し掛かろうとする月は、明々と全てを照らしている。淡い、包み込むような優しい光だ。ラピードが気を利かせてわんと相槌を打つ。

ふと何かを思いついたエリシアは立ち上がり、そつと幹に手を当てた。

「絶対に治してあげるから、お願い、もう少しだけ頑張って」

「何してんだ？」

返事はあるはずがないのだが、それとは別にもう既に耳慣れた声が樹の後ろから聞こえてきた。無造作に剣を引っつかんだユーリである。

もしかユーリも散歩だろうか。それともエリシアとラピードが居ない事に気付いて、ここまで来たのか。多分、前者だろう。

「えー、決意表明みたいな感じ？ ユーリこそ、夜の散歩？」

「まあ、な。それと誰かさんが一人で宿を出たから様子を見に。つってもラピードが一緒なら心配なかったけどな」

エリシアの顔が強張る。エステルとカロルは大丈夫だと思っていたが、やはりユーリにはばれてたらしい。別に悪いことをした訳でもないのだが、何故か申し訳ないような気分になるから不思議だ。変な顔になっていくエリシアを横目に、ユーリはよっこらせと少女の隣に腰を降ろした。

二人の頭上に広がるのは満天の星空。月と星の光が街全体を照らしているため、明かりがなくてもはつきりと見える。それでも火を焚いているのは魔物除けのためだろう。

「ここは星がよく見えるな」

エリシアもハルルの樹から手を離し、ユーリの隣に座って空を見上げた。雲一つない綺麗な闇と銀の天蓋。これなら明日の天気は心配ないかな、と取り留めのない事を考える。

思い返せば怒涛の一日だった。牢に入れられたかと思えば予定外の脱出劇。貴族の少女、エステルとの出会いに謎の男の襲撃まで。

半ば成り行きで旅に同行した。本当に目まぐるしい一日だった。僅かな疲労感はあるけれど、疲れを上回る楽しさがあった。

落ち着いてみれば何となくなのだが、ユーリと二人で話をするのは緊張する。

「ユーリ」

「エリイ」

意を決して口を開けば、見事にユーリの声と重なった。何となく恥ずかしくなつてユーリから視線を逸らせる。

「な、何？」

完全に声が裏返っていた。ここは緊張する所じゃないのに。エリシアは更に顔が上げられなくなつて俯く。見えるのは暗い地面と寝そべつたラピードの尻尾だけ。

「……いや、エリイのこと、何も知らなかったなつて思つて。……エリイはギルドの人間なのか？」

ユーリの口から出た声は自分でも信じられないくらい、僅かに震えていた。全く情けない限りだ。武醒魔導器を持ち、戦闘慣れもしている。幸福の市場の首領の知り合いとなればギルドの人間以外の答えは考えつかなかった。

では何故、答えを聞くことを躊躇うのだろう。真つ先に尋ねなかつた理由は、答えを聞けば彼女が去つてしまうのではないかと、そう思つたからだ。

「私は違う。父さんがギルドの人間つてだけだよ。魔術も銃の使い方も全部、父さんから教えてもらったの。……元騎士だった父さんから」

ユーリが確信しているのならもう、隠す必要はない。だけど私の口から出た声は私のものとは思えないほど冷たかつた。質問も何も許さない、突き放したような拒絶だつた。

そんなエリシアにユーリは言葉を失う。いや、失つた訳ではない。

だが、今の彼はエリシアに掛けるべき言葉など見つからなかった。

別に嘘をついていた訳ではない。ただ何故か罪悪感に襲われた。あの後、直ぐに交代の人が戻って来てエリシアは、適当な理由をつけて逃げるようにユーリの前から立ち去った。

逃げる必要なんてないのに一人で慌てて馬鹿みたいだと思う。直ぐ宿屋に戻る気は起きなくて、街中を歩いて時間を潰した後、宿屋に戻ってシャワーを浴び、直ぐさまベッドに潜り込んだ。

エステルは隣のベッドで健やかな寝息を立てている。エリシアは固く目を閉じ、何度も眠ろうと試みた。

だが三十分経とうと一時間経とうと、羊を数えてみても眠れない。むしろ目は冴え渡って来たくらいだ。

「駄目……外の空気吸ってこよう」

仕方なく立ち上がってエステルを起こさないように部屋を出る。微かな明かりが灯るロビーには誰もいない。……いや、誰かいる。長い黒髪に黒い服。闇に溶け込みそうで白い肌が浮き上がっているように見えた。

ユーリ・ローウェル。今、一番会いたくない人だ。

『戻ろう……』

だって何を話せばいいかなんて分からない。黙っててごめん？
それとも迷惑だった？
けれど意思とは裏腹に身体は動かない。まるで見入られてしまったかのように。

「エリイ……」

少女の存在に気付いたユーリの声で、エリシアは我に返る。弾かれたようにユーリに背を向け、走り出した。

それは考えも何もあつたものではない。反射的な行動だった。

「エリイ！ 待てって！」

途端、右腕を掴まれたかと思えば、エリシアはユーリに抱き寄せられていた。この一日で随分と馴染んだ青年の香りが鼻腔をくすぐる。

体が熱い。自分を抱きしめる腕から逃れようと身をよじるが、力で敵うはずもなかった。

「離して！」

「駄目だ。離したら逃げるだろ。そもそも逃げる必要があるか？」

ユーリの言う通り、確かに逃げる必要なんてない。ただ怖かっただけ。

ユーリの口から叱責の言葉が出ることを見てエリシアは口をつぐんだ。すると伸びて来た長い手がエリシア頭を優しく撫でた。

「ごめんな」

「……ユーリが謝ることなんてない。怖かったの。ギルドの人間だって知られたら二人の態度が変わるかもしれないって。……私のこと嫌いになった？」

分かつてる。ユーリもエステルもそんな人間ではないと。

でも本当にそう言い切れるのか。世の中に絶対なんてない。だから怖かった。拒絶されるなんて耐えられない。

このまま何も言わずにただのエリシアでいたいと願った。隠し通せるはずがない。エステルはともかく、ユーリは鋭いんだから。

エリシアは笑おうとして失敗した。いつの間にか瞳から流れ落ちた涙が頬を伝う。視界が涙で滲んで見えない。

怖くてユーリの顔なんて見れたものじゃない。

「あれ、おかしいな。何で泣いてるんだろ」

拭っても拭っても、絶え間無くこぼれ落ちる涙。どうして泣いているんだろ。

ユーリと魔核を取り返せばそこで別れておしまい。なのにどうしてもこんなに悲しいのか。こんな気持ち、初めてだった。

ユーリの長い指がエリシアの涙を掬う。その仕種があまりにも優しく、また泣きそうになった。

「オレもエステルもそんな事でエリイを嫌いに何かならねえよ。だから泣くな」

「本当に……？」

「オレが嘘ついた事、あったか？」

見上げたユーリは悪戯っぽく笑っている。ない、一度もない。

こんなに簡単なことだったのか。自分一人で勝手に沈んだり泣いたり、仕方ない奴だと思われてないだろうか。

一人百面相をするエリシアにユーリは声を上げて笑った。

「ほら、早く泣き止まねえと明日、腫れるぞ」

「う、うん」

エリシアが頷くと、ユーリはまた、ぽんと頭を撫でてくれた。父と同じように、いや、父よりも細かい手で。

安心したら急に眠気が襲って来る。自分でも現金なものだと思いが、こればかりはどうにも出来ない。自分が今、どんな状況にいるのかも忘れてエリシアの意識は闇に沈んで行った。

もう大丈夫

瞼を刺すまばゆい光にエリシアは目を開ける。真っ先に視界に入るのは宿屋の天井と自分が置かれた状況。自分はちゃんとベッドに横になっているし、丁寧にシーツまで掛けられている。

しかしよく考えれば自分で部屋に戻って来た記憶がない。

半ば覚醒した頭で考えれば昨日の夜中、ユーリと話をし、一人突っ走っていたことに気付いた。そして、どうしたのだろう。安心したら眠くなって……。

「あーっ!!」

そのまま寝てしまったに違いない。きっとそうだ。まさか勝手に歩いて部屋に戻ったなんてことは有り得ない。

すると今の絶叫で目が覚めたらしいエステルが瞼を擦って上体を起こした。

「エリイ、どうかしましたか……?」

起こしてしまって申し訳ないのだが、今のエリシアには他人を氣遣う余裕はない。自分のことで精一杯だ。

間違いなく、ユーリが部屋まで運んでくれたのだろう。そう思えば急に羞恥心が込み上げて来た。寝顔を見られたとか、変な顔してなかったとか、そんな考えばかりが浮かんでくる。

どんな顔をしてユーリに会えばいいか分からない。

「顔赤いですよ? 熱でもあるんじゃないですか?」

顔を赤く染めるエリシアにエステルは見当違いな心配をして、お

でこに手をあててみる。が風邪を引いた訳でも熱がある訳でもない
ので熱いはずがない。

慌てて彼女の手を離そうとするが、

「えっ、あ、エステル、大丈夫だってば！」

「でも風邪は万病の元と言いますから、引きはじめが肝心なんです
！」

普通の人間ならそこで終わっていただろうが、しかしそこはエステル、中々引き下がってくれない。エリシアにしてみればそれ以上
触れて欲しくない訳で、でも彼女を邪険にも出来ない。

けれど、このままでは針のむしろだ。エリシアは尚も心配するエステルを半ば強引に部屋の外に出した。

「本当に何でもないから。ねっ！ 先に顔洗って食堂行って。私も直ぐに行くから」

「えっ、でも……」

それでも言い渋るエステルにエリシアは満面の笑みを浮かべたま
ま、有無を言わず扉を閉める。

心配性のエステルを追い出すと、部屋に備え付けられている鏡に
向かって笑ってみた。

『うん、大丈夫。私はちゃんと笑える。ありがとう、ユーリ』

カロルの話によるとパナシーアボトルを作るには材料が三つ必要らしい。

まずはカロルも探していたエッグベアの爪に、ハルルの樹の花びららしいルリエの花びらとニアの実。花びらは長老に話を付けているということに残りはニアの実とエッグベアの実だ。

ニアの実はクオイの森で採れるらしく、一行は朝食を取った後、ハルルの街を出た。

「ねえ、どうして皆、ボーディプラスティア武醒魔導器持つてるの？」

カロルが言い出したのは、森の入口付近に差し掛かった時だ。そういえば初めて会った時もそんなことを言っていた気がした。確かにカロルの疑問はもつともなことではある。

魔導器はその殆どを帝国が管理しているため、武醒魔導器とて滅多に手に入らない。素人でも強力な魔術を使えるから、と言うのが一応の建前らしいが、行き過ぎて独占になっているだろう。

「んなもんカロルだって持つてるだろ」

「ボクはギルドに所属しているからいいの！」

カロルが言うようにギルドに属している者は、例外的に武醒魔導器を所有している。つまりはギルドの人間でもないエリシアたちが何故武醒魔導器を持っているのか疑問なのだろう。

こちらもちちらで、武醒魔導器を所持しているのはそれぞれ理由があるのだが。

「ラピードは前の主人の形見でオレのは、騎士団を辞める時に餞別として貰ったんだよ。んでエステルは貴族のお嬢様だから、エリイはお前と同じくギルド関係者ってことだ」

「へえー、そうなんだ。えっ！？ エリイってギルド関係者だったんだ！」

（うん、そうそう。レオンハルト 獅子の咆哮の首領の娘なのって言えるわけあるかー！ そうでなくとも魔狩りの剣と獅子の咆哮は仲よくないんだから、口が裂けても言えない。うん、絶対に言えない）

と心の中で叫んでみる。もともとエリシアの父が首領をつとめる獅子の咆哮と魔狩りの剣は折り合いが悪い。ここでわざわざそれを教える必要はないし、エリシアも出来れば言いたくなかった。

「あはははは……。まあ、私はカロールみたいにギルドに属してる訳じゃないけどね」

「ふーん、そうなんだ。でもボク、どこかでエリイを見たことあるような……」

カロールはというと、未だ答えに納得していないようで、顎に手を当てて何やら考えている。

エリシアにしてみればまったくもって思い出さなくていい。まだ本名が知られてないことがせめてもの幸いか。流石に“クレセント”の名は知られては一発だろう。

「ダングレストに住んでるならどこかで見たことあるって」

あはは、と笑ってカロールを見る。苦し紛れな言い訳のような気がしないでもないが、これ以外の名案なんてある訳もない。笑いながら冷や汗をたらだらかいていいると、見兼ねたユーリが助け船を出してくれる。

「おい、そろそろ行くぞ」

「え、うん。そうかなあ……」

エリシアは真っ先に返事をして、ユーリとエステルの後に行く。カロールはまだうんうん唸っていたが、どうやら思い出せないらしい。やがて諦めてエリシアたちの後に付いて歩き出した。そんな彼に気付かれぬよう、ほっと胸を撫で下ろす。カロールが嫌いという訳ではないのだが、出来れば知られたくない。

「あつた！　これがニアの実だよ」

「一つでいいんじゃない？」

「そうだけど、こっちはこうするんだ」

カロールが手にしたのは橙色をした鮮やかな果実。一つあればこと足りるはずだが、彼は二つ地面から広い上げた。エリシアの問いに頷いたカロールは、ニアの実を鞆にしまうと持っていたもう一つを地面に置いてすり潰した。瞬間、辺りに立ち込める酷い香り。いや、香りというにもおこがましい臭気である。

「くさっ、お前くさっ！」

「ちょっ、何それ！　まるでボクが臭いみたいに」

ユーリやエリシア、エステルでさえ、慌てて鼻を摘んで後ろに下がるが、それでもこの臭いはつらすぎる。

この臭いを上手く言葉で表現出来ない。取りあえず臭い。それしか言いようがないのだ。

自分たちですらこの有様なのだ。人間より遥かに嗅覚が鋭いラピードは、それこそ鼻が曲がるくらいに臭いに違いない。

「エッグベアは独特な嗅覚をしてるから、この臭いにつられて来るはずだよ」

「それなら先に言ってください……」

涙目になったエステルが言う。ごもつともである。

せめて心の準備くらいさせて欲しいものだ。こっちは臭くて堪らないが、本人は結構平気らしい。

エリシアはカロルの服を掴んでひよい、と三人の背後に移動させた。

「臭いからカロルは私たちの後ろを歩いてね。前だと風で臭いが流れてくるから」

「えー！　酷いよ、エリイ」

「エリイの言う通りだな。この臭い、ラピードにはキツすぎるだろ」

魔物に詳しいカロルが言うのだから、この臭いがエッグベアをひきつけるのはまず間違いないだろう。

ラピードもユーリに同意するように、もしくは切実にわん、と鳴

いた。

皆に押し切られたカロールは仕方なく、しょんぼりと一行の後ろを歩いていた。すると悠々と前を歩くラピードを見て何か思う所があったらしい。

「そう言えばラピードって爪とか牙があるのに何で武器使ってるの？」

「そりゃ、爪や牙は犬の武器だからな」

「ラピードって犬じゃないの!？」

爪や牙は犬の武器だと事もなげに言うユーリに、ラピードを除く三人が驚きの声を上げたのは言うまでもない。ラピードは犬にしては少々大きい気もするが、どこからどう見ても彼は犬だ。犬に違いない。犬しか考えられない。

「ラピードは自分の事を犬だと思ってない。ラピードはラピードって生き物だ。だから必要とあらば、道具だって使う」

まるでその通りだと言わんばかりにラピードは胸を反らせて、わんと鳴いた。確かに普通の犬よりずっと賢いし、戦い方だって随分と様になっている。

もしかやユーリはラピードの言いたい事が分かるのだろうか。

「確かにラピードからは気位のようなものが感じられます」

エステルは妙に納得してラピードを尊敬の眼差しで見つめる。しかしキラキラした目で見つめるエステルにラピードは、全く興味を示さない。どうやらエステルには興味がないらしい。

「そつ、だから敬えよ？」

「そ、そうなんだ……」

取り留めのない話をしながら森の中を行くが、一向にエッグベアは姿を現さない。カロルの、と言うより臭いのお陰で他の魔物は寄って来ないようである。

「何だか嗅覚が麻痺して臭くない気がするかも」

もう鼻を摘まなくてもあまり臭くない。慣れとは恐ろしいものだが、それはそれで困るのだ。服に臭いが付いても分からないだろうし。

試しに袖を近付けて臭いを嗅いでみたが、臭くはない……と思う。どうやらエステルも同じ考えに行き着いたらしい。エリシアと同じように服を気にしている。

「そうですね。でもそれはそれでちよつと……」

「でしょ。カロールもそう思わ——」

エリシアが振り向いた瞬間だった。カロールの背後に彼の倍はある強大な影。ユーリもエステルも、カロールでさえも気付いていない。後から考えれば、銃を使うとかいくらかでもやり用はあったと思う。だけどこの時は咄嗟にカロールの体を突き飛ばしていた。

「えっ？」

突き飛ばされたカロールは訳が分からず尻餅をつくと、エリシアと

強大な影——エッグベアを見比べる。

そんなカロルの目の前で、彼の代わりにエッグベアの一撃を受けたエリシアの体が宙に浮いた。

「エリイ！！」

不甲斐ない自分

カロルの悲痛な叫びにユーリとエステルは振り向いた。二人の視界に入ったのは、熊を思わせる魔物——エッグベアと尻餅を付いたカロルに、宙を舞うエリシア。一瞬で状況を理解し、走り出したユーリは反射的に彼女の体を受け止める。

既に意識はない。大きな外傷は見当たらないが、軽い脳震盪でも起こしたのか。抱え上げたエリシアの体は信じられないくらい軽かった。

「エステル、ラピード！ エリイを頼む」

ユーリはエリシアをエステルに預け、カロルに迫るエッグベアの爪を受け止める。

そして返す刃で斬り付けた後、闘気を纏わせた拳を突き上げ、エッグベアの巨体を吹き飛ばした。

「牙狼撃！ 何してんだカロル！ 立て！ 立って戦え！！」

エリシアが自分を庇って倒れたことで半ば放心状態だったカロルは、ユーリの叱咤で我に返り、武器を構える。

立ち上がるうとするエッグベアに向けてハンマーを力の限り振り上げた。

エッグベアの巨体が激しい音を立てて、木の幹に叩き付けられる。ほぼ同時に、とどめとばかりにユーリの剣から放たれた青い衝撃波がエッグベアの喉笛を深くえぐった。断末魔の悲鳴を残して巨体が倒れる。二人はエッグベアが絶命したのを確認するとエリシアの元に走った。

「エリイは？」

「怪我は治しました。たいしたことはないと思います。もう少しすれば目が覚めるかと」

それを聞いて一先ず安心する。枕代わりにラピードの体に彼女の頭が乗せられているが、ラピードは嫌がる様子はない。それどころか心配そうにエリシアの顔を覗き込んでいた。

エステルが大したことはない、と言うのならその通りだろう。少々世間知らずとは言え、彼女は優秀な治療術の使い手だ。

「分かった。エステルとラピードはエリイと周囲を警戒してくれ。カロール、エッグベアから爪取るぞ」

言うなりカロールを連れ、もはや動かなくなったエッグベアから爪を切り取った。作業を終えたユーリは、カロールが浮かない顔をしている事に気付く。

「どうした？」

「ボクのせいなんだ。エリイはボクを庇ってエッグベアに……」

カロールは今にも泣きそうな顔で、眠るエリシアの顔を見つめている。不注意では済まされない。もしあの時、彼女が突き飛ばしてくれなければ、カロールが危なかった。大怪我をしていたかもしれない。だが代わりにエリシアが怪我をしたのだ。自分の代わりに。

己を責めるカロールにユーリは少年の頭に手を置き、乱暴に髪を掻き回した。

「気持ち分かるが、あんま気にすんな。エリイだってきつとそう

言うだろ」

頭がぼうとして何も考えられない。エリシアは自分が今、誰かに背負われているらしいとは理解出来たが、それ以外、何も考えられなかった。考える気さえ起きない。

背中から感じる体温はあつたくて、覚醒したばかりだと言つのに、心地よいまどろみに誘われる。まるで父のようだ。

いや、そんなはずがない。違う。父がここにいるはずがない。導かれるように目を開ければ、目の前は黒一色で染まっていた。これは誰だろう。

慌てて顔を上げれば、ユーリの頭が見える。覚醒したばかりで頭はまだ付いて来ていないが、ここがまだクオイの森の中だと言つことはエリシアにも分かる。

「あ、れ……」

「エリイ、目が覚めたんですね。気分はどうですか？」

前を歩いていたエステルが心配そうに尋ねる。カロールを庇ってエツグベアの前に立ちふさがったところまでは覚えているが、その先は思い出せない。大方気絶したのだろう。

意識を失った人間を運ぶには、エステルもカロールにも無理だ。背負っているのは消去法でユーリになるのは分かる。分かるが、意識

を失った人間が想像以上に重いこともエリシアは理解していた。つまり、凄く重かったのではないだろうか。

「あ、うん。大丈夫。……ユーリ、ごめんね。重かったでしょ」

「いや、全然。むしろ軽いぞ。ちゃんと飯、食ってんのか？」

「食べてます！……カロール？」

思わず敬語で叫んだエリシアは、カロールが浮かない顔で自分を見ていることに気付いた。

その顔は幼い頃、無茶して父に助けられた自分とuriふたつだったから。カロールはきっと自分を責めているのだろう。

「エリイ、ボク……」

「カロールは悪くないよ。私が力不足だったから。それにたいした怪我もなかったから、結果オーライってことでどうかな？」

「あん時はマジ焦ったぞ。あんまり冷や冷やさせんなよ」

カロールの言葉を遮ってエリシアは言う。彼は悪くない。注意力が散漫になっていたのは自分たちも同じなのだ。

カロールを庇って意識を失ったのも自分が未熟だったから。

冷や冷やさせんなよ、と言われ謝ることしか出来ない。ユーリの言う通りで、本当に申し訳なかった。頭が上がらない。

カロールも納得してくれたようでうん、と頷く。それにいつまでもユーリの背中を借りている訳にもいかない。現にユーリの両手は塞がっているから、魔物が出て来ても戦えないのだ。体の方ももう何ともないし、これ以上甘えることは出来なかった。

「ユーリ、もう大丈夫だから降ろして」

「ユーリ・ローウェル！ エリシア・フランベル！ お前たちがこの森にいることは分かっている！ 大人しくお縄につけー！！」

するとその時、森の奥から不吉な声が聞こえて来た。ユーリやエリシアにしてみれば、出来ることなら係わり合いになりたくない彼等である。そうだ、そうだー、と聞きたくない同意の声までおまけに付いている有様だ。

声の主たちは間違はなくルブラン、アデコール、ボツコスの三人組。ここまで職務に忠実な騎士も珍しいが、ほとほと迷惑な話である。

恐らく、仕事と言うより執念なのではとエリシアは思う。

本当に偽名で名乗っておいて正解だった。流石に騎士団に本名を教えるほど、エリシアとて馬鹿ではない。

「あいつら……結界の外まで追いかけてきやがったな」

「なに！？ どうしたの！？ ユーリたち何に追われているの」

「騎士にちよっと、ね……話せば長くなるけど、罪状は脱獄に誘拐、かな？」

呆れたような顔をするユーリを見て、カロルの顔がひきつる。エリシアは彼に説明しようとして、うまい言葉が見つからず、ありのままを話した。

きつとエステルを連れ出したことは誘拐になるのだろう。それが彼女の意思だろうが何だろうが、彼等にはお構いなした。器物破損よりずっと恐ろしい。

「えっー!!」

さらっと口にしたエリシアにカロルは無理もないが、驚愕のあまり口を開いて鯉のようにぱくぱくさせている。騎士に追われるなんて滅多にない経験だろうから。

「って事でカロル、エステル走るぞ」

「え、私は？ ユーリ、ユーリってば！」

ユーリはエリシアをおぶったまま、森の中を駆け抜けて行く。その後をカロル、エステルが続き、ラピードがしんがりをつとめる。エリシアの切実な叫びが最後まで聞き入れられなかったのは言うまでもない。

そのままハルルに戻ってきたまでは良かったが、結局、パナシーアボトルが完成したのは空に金の月が輝く夜になってからだ。

街の中央部にあるハルルの樹の前には多くの者が集まっている。長老を始めとして街の人々、ユーリとエリシア、エステルにカロルもその輪の中心にいた。

「い、いくよ」

大きめの瓶を慎重に抱えたカロルが皆の前に出る。ゆっくりと詮を外すと、中身を汚染された土にまいて行く。液体が地面に落ちた瞬間、土の黒ずみは薄れ、確かに元の土の色に戻っていた。カロルは同じように他の毒に侵された土の浄化を進める。

「結界よ、ハルルの樹よ、どうか蘇ってください……」

長老が懇願するように呟いたその時、カロルは全ての液をまき終わった所だった。それとほぼ同時にハルルの樹がまばゆい光を放った。

だがそれも一瞬のことで光は直ぐに消え、樹からは命あるものが放つ気配が感じられない

人々の中から落胆の声が上がる。カロルが慌てて足元を見た。確かに毒素は消えている。これで結界は治るはずなのに。それとも手遅れだったのか……。

「ど、どうして……薬の量が足りなかったの？ それともこの方法じゃあ……もう一度パナシーアボトルを！」

カロルの言葉に長老は静かに首を振った。材料であるルルリエの花びらがもう残っていないのだ。

皆、長老の言葉に希望を失い、重苦しい沈黙がその場を支配する。誰も動かない中、一人だけハルルの樹の前に歩み出る者がいた。

「そんな……そんなのって……」

「エステル？」

ユーリが訝しげにエステルを見るが、気にもせず樹に近付いて行く。そしてもう一人、樹に近づく影があった。エリシアである。

「昨日、治してあげるって約束したのに」

「お願い……」

前に出たエリシアはエステルの傍らに寄り添うように立つ。エス

テルは目を閉じ、胸の前で両手を組んだ。彼女がいつも治癒術を使う時と同じように。

刹那、エステルとエリシア。二人を中心として風が巻き起こった。同時に二人の体が光に包まれる。更に足元には金色の輝きを放つ複雑な魔法陣まで描かれているではないか。

「咲いて……」

「大丈夫。任せて」

「エステル！ エリイ！」

二つの声が重なった時だった。二人から生まれた美しい光が樹を照らす。

次の瞬間、長きにわたり街を見守り続けていたハルルの樹が人々の前にあった。蘇ったのだ。ハルルの樹が。

確信なんてなかった。でも何故かエステルと一緒になら何とかなると思ったのだ。

エリシアは自分に起こった異変を他人事のように感じていた。ふと隣を見れば腕を組んだエステルも同じように光っている。

エステルと自分の声が重なった時、樹は生氣を取り戻した。しおれていた葉が生き生きと伸び、くすんでいた幹も本来の色を取り戻す。

だがハルルの樹の変化はそれだけではない。今にも綻びそうな蕾が生まれたのだ。そして蕾は鮮やかな薄紅色の花を咲かせた。

明かりが照らす中、吹いた優しい風が花びらを街全体に運んで行く。薄紅色の花びらが舞う様は幻想的でまるで雨のようだった。瞬間に街全体が薄紅色に染まる。

二人の少女によって引き起こされた光景に人々は呆然と見入って

いることしか出来なかった。

「今のは治癒術なのか……」

「これは夢だろ……」

目を開けたエステルが体が傾き、尻餅をつくように座り込んだ。同じようにエリシアも立っていれらず堪らず隣に腰を降ろした。

誰よりも先に我に返ったユーリは真っ先に二人の元へ駆け寄る。

「二人とも大丈夫か」

「あ……ユーリ？」

「大丈夫……じゃないかも」

頭は痛いし、ふらふらするし気分もいいとは言えない。そして様子を見る限り、エステルも同じらしい。白状すれば喋るのさえ億劫だ。術を使いすぎた時や疲れた時に似ていた。

エリシアもエステルもユーリの手を借りて何とか立ち上がる。その間にも街の子供たちや長老にまで深々と頭を下げられた。

お礼を言われるのは苦手な訳ではないが、何分自分が何をしたのかも分からないのだ。カロールが嬉しそうに手を挙げ、ユーリも同じように手を合わせてハイタッチした。

「ユーリ」

「フレンのやつ、戻って来たら花が咲いててびっくりだろうな。ざまあねえな」

一行がハルルの樹から離れ、宿を取ろうと街の入り口近くまで来ていた時に“それは”ハルルの樹がそびえる街の中心部にいた。揃いの装束に身を包んだ奴ら。赤いゴーグルが闇の中で嫌に目立つ。彼等は城でザギと共にいた男と全く同じ不気味な服装をしている。すると男たちがこちらに気付いた。狙いはフレンではなかったのか。

「あ、あれ……城で見た」

「ちつ……フレンだけじゃなくてオレたちも狙われてるのかよ。オレとエリイはアスピオに行く。エステル、お前は どうする？ 自分で決める」

狙われているのはフレンだけではなく、自分たちもらしい。城であのザギという男を退けたからだろうか。難易せよ、長居は出来ない。ここで戦えば街の人々に迷惑が掛かるだろうし、恐らく彼らを退けたとしても意味はない。新手が送られるだけだ。

ユーリに問われ、俯いていたエステルは顔を上げる。そこには今までの彼女にはない決意が、輝きがあつた。

「……行きます」

「カロルはこれからどうするの？」

「ボクはカプワ・ノールに……」

カプワ・ノールはハルルから少し行ったエフミドの丘を越えた先にある。アスピオとは少し方向が違う。

ならば名残惜しいがここでお別れと言うことか。色々あつたが、エリシアはカロルが嫌いではない。むしろ面白い子だと思う。

魔狩りの剣だとか関係ないのに自分は初め、変な先入観に捕われてカロール自身を見ようとしていなかった。

「ここでお別れだね」

「え、あの、その……急ぎの用事でもないし、もう少し皆に付いて行ってもいいかなあって」

「決まりだな。あいつらに追い付かれる前に行くぞ」

これ以上、ハルルに滞在すれば街の人にも迷惑が掛かる。今はまだ気づかれていないが、それももう限界だろう。ハルルは決して広くはない。

月が天高く昇る中、一行は闇に紛れてハルルの街を後にした。

学術都市アスピオ

「太陽見れねえと心までねじくれるのかね。魔核盗むとか」

いくら何でもそれは身も蓋も無い気がする。とは言っても、魔導士というものは割とユーリの言う通りなので、口には出さなかったが。

結局、エリシアたちがアスピオに辿り着いたのは夜が明け、陽が高くなってからのことだった。学術都市の名で呼ばれるアスピオは、洞窟の中に作られた珍しい街である。

ただエリシアも知識として知っているだけで、来たことはなかった。何故ならアスピオは帝国直属の都市な訳で、許可証がなければ入れてさえくれないのである。

その事実をすっかり忘れていたエリシアは騎士たちとの会話でその事を思い出した。

「中に知り合いいるんだけど駄目か？」

「正規の訪問手続きをしていたのなら許可証が渡っているはずだ。その知り合いとやらからな」

機転を利かしたユーリに、エリシアは拍手を送りたい気分である。これならばもしや、と思ったが、門番の騎士から返って言葉は実にそっけないものだった。

その辺りは流石に徹底しているらしい。簡単には入らせてもらえない。

「いや、何も聞いてないんだけど。入れないってんなら呼んで来てくれ」

三人は黙って状況を見守ることしか出来ない。

許可証がない？　じゃあ入れません、さようならで終われる訳がなかった。モルディオの事は勿論だし、フレンがいる可能性だってある。それにここで諦めれば他に手がかりはない。八方塞がりだ。

「知り合いの名前は？」

「モルディオ」

ユーリがモルディオの名を口にした瞬間、騎士たちが固まった。恐ろしいものを見るような目つきでエリシアたちを見ている。リタ・モルディオはよほどの変人なのだろうか。もし彼らが兜を被っていないければその顔は青ざめていたことだろう。

「や、やはり駄目だ。書面にしてやり取りし、正式に許可証を交付してもらえ」

「ケチくさ……」

エリシアが思わず呟けば聞こえていたらしく、凄い目で睨まれた。流石に口には出せないで、この地獄耳、耳年増！　と心の中で叫んでやる。気が立っているのはきつとここまで気を張りっぱなしだったからに違いない。

いつあの黒装束が追ってくるか分からない。夜の闇の中、ずっと張り詰めた状態で疲れないほうがおかしいだろう。まともな休息を取っていないのだ。

「あの、フレンと言う騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「施設に関わる一切は機密事項です。些細な事でも答えられません」
それでも引き下がれないエステルは、せめてフレンが来たかどうかを確かめたくて尋ねる。

しかし正に取り付く島もない。モルディオと聞いた時のさっきの動揺は、どこに行つたのだろう。思わずそう言いたくなるほどの落ち着きようだ。

些細なことでも答えられない。騎士のいうことも分かるが、ここで引き下がってなるものか。

「フレンが来た目的も？」

「勿論です」

騎士は自信満々に答えるが、それはフレンが来たことを認めるということだ。完全に墓穴を掘っている。しかも彼はそのことに気づいていない。随分おめでたいものだ。

そこでエリシアはすかさず、何か言われる前に早口でまくし立てる。

「ふーん……なら、フレンはここに来たって考えていいのね」

「あ、そっか」

エリシアの言葉にカロールも合点がいったように頷いた。顔は兜で隠れているために分からないが、騎士たちは相当焦っているようである。フレンが来た目的も、と尋ねて勿論です、と答えればフレンがアスピオに来たことを肯定してということだ。

言っでは悪いがかなり間抜けである。油断し過ぎとも言えるだろう。

「し、知らん！ フレンなんて騎士は……」

騎士は慌てて首を振るが今更遅い。どんなに取り繕っても無駄だ。しかしフレンがここに来たと言うことは分かったが、中に入れてくれる訳もなく。邪魔そうにしつしつと追い払われる。犬じゃあるまいし。まあ、確かにラピードは犬ではあるが。

「じゃあせめて伝言だけでもお願い出来ませんか？」

「やめとけ、こいつらに何言っても時間の無駄だって」

墓穴を掘ったのが余程聞いたのか、騎士たちは頑として口を割らない。エステルは伝言だけでもと言うが、ユーリが言うように時間の無駄だろう。どうせ伝えてくれないだろうし、フレンがまだアスピオにいるかどうか分からない。

エリシアたちは仕方なく彼等の前から去り、別の入り口を探すことにした。

無理なら最終手段である。ちなみにユーリもエステルも、エリシアにも諦めるという選択肢はない。

「都合よく開いちゃいないか」

ドアノブに手をかけたユーリは落胆の声を上げた。

三人がいるのは騎士たちから少し離れた扉の前。恐らく魔導士たちが出入りするための裏口だろうが、そう都合よく鍵が開いている訳などなく。もし開いていたのなら、あまりに間抜けな話である。

「最終手段の強行突破してみる？」

正面が無理な以上、最初にユーリが言ったように壁を越えるしかない。が、エステルが納得してくれるかどうか。実際やるとなれば、絶対に駄目です、と言われるに決まっている。

エリシアが振り向くと、エステルは案の定、こう言った。

「フレンが出てくるのを待ちましょう。お願いして中から開けてもらえば……」

「フレンが出て来たとしても、モルディオは出てこないだろ。それにあいつ、この手の規則にはとことんうるさいから頼んでも無駄だって」

エステルが言いたことは分かる。ユーリも考えたが、フレンの性格を思い出して一瞬で却下した。真面目で思慮深いのは彼の長所だが、それは言い換えれば頑固で融通が利かないということ。

魔核泥棒を捕まえる、とちゃんとした理由はある。フレンは首を縦に振らないだろう。おまけに知り合いであるエステルを城から連れ出したのだ。何を言われるか分からない。

「もし本当に魔核泥棒なら絶対に出てこないわね。それにフレンだってまだ街の中にいるかどうか分からないし……」

話に夢中になる三人は、先程からカロルが扉の前でなにやらしている事に気付いていなかった。一番先にカロルに気付いたエステルが首を傾げて聞く。

「カロル、何をしてるんです？」

「よし、開いたよ」

鍵が外れる小さな音がしたかと思うと、一仕事を終えたカロルが胸を張り、輝く笑顔を向けている。

エステルは鍵を開けて入ることに難色を示したが、結局、見張りは嫌らしく入ることに合意した。

“そこ”は正しく本の海だった。見渡す限りの本棚な天井近くまで届いており、魔導器やエアルについての小難しい専門書で溢れ返っている。一方で子供向けのお伽話やら、娯楽本など様々な本が本棚の中に乱雑に納まっていた。

皆一様に似たような作りのローブを纏い、手に持った本を読み耽っている。

自分のことで精一杯なのか、それとも他人に注意を払う気がないのか、裏口からお邪魔したユーリたちを咎める者はいない。

「なんかモルディオみたいのが一杯いるな……」

「魔導士って言っても殆どが研究に時間を費やしてるみたいだから、依頼以外で外に出る人は少ないよ？」

呟くユーリにエリシアが言う。ばんばん実戦で魔術を使う、なんて早々いない。魔導士＝研究家でもあるからだ。アスピオは帝国直属の施設であるため、国の依頼があれば街を出るが、言い換えればそれがなければ外に出る機会は少ないらしい。

そんな中、エステルが一心不乱に本を読んでいる一人に話し掛けた。

「あの、少しお時間よろしいですか？」

「ん、なんだよ？」

エステルの声に気づき、眼鏡を掛けた青年は、やや迷惑そうな顔

をしながら顔を上げる。明らかに邪魔しやがって、という顔だが、彼女は気づかない。そこは流石のエステルだ。

エステルは不機嫌そうな彼など物ともせず尋ねた。

「フレン・シーフォという騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「フレン？ ああ、あれか、遺跡荒らしを捕まえるとか言ってた……」

「今、どこに!？」

彼の話からすると、どうやらこの街には居ないらしい。つまりタイミングが悪いことに、入れ違いだったということか。興奮気味にエステルが問い詰めるが、彼の返事は素っ気ないものだった。

「さあ、研究に忙しくてそれどころじゃないからね」

「そ、そうですか。……ごめんなさい」

「じゃあ、失礼するよ」

再び本に視線を落とそうとした青年の肩をユーリが捕まえる。フレンがここにいないことは分かったが、ユーリの方はモルディオの居場所を聞いていない。

今のユーリにはフレンの居場所よりモルディオの方が重要だ。

「ちょ、待った。もう一つ教えてくれ。ここにモルディオって天才魔導士がいるよな？」

ユーリが“モルディオ”と口にした瞬間、彼も門番の騎士と同じ

ように顔が引きつり、恐らくは無意識だろうが後退った。リタ・モルディオ。弱冠一五歳の少女は一体どんな人間なのか。根っからの研究者である彼らが恐れるほどの人物。

「な！ あの変人に客！？」

青年はと言うと、いくらなんでもそこまで驚くのだろうか、と言うくらい素晴らしいリアクションを披露してくれた。一行の会話は筒抜けのはずだが、皆自分の世界に籠っているため、誰も気付いていない。

それがあまりよく思われていないであろう“モルディオ”の名を聞いても同じだ。

「流石有名人、知ってたんだ」

「……あ、いや、何も知らない。俺はあんなのとは関係ない……」

青年はエリシアたちが居ることも忘れて、うわ言のように繰り返す。よっぽどトラウマでもあるのだろうか。

少なくともズレた眼鏡を直す余裕がないくらい動揺しているらしい。

「変人って知ってる時点で関係ないはないんじゃない？」

青年はエリシアの呆れた声にも反応せず、そそくさと一行の前を去ろうとする。

しかしそれは問屋がおろさない。ユーリがまたもや青年の肩を掴んで引き止めた。

「まだ話は終わってないって。どこにいんの？」

「奥の小屋に一人で住んでるから勝手に行けばいいだろ！」

半ば吐き捨てるように言うと、青年は再び持っていた本に目を落とした。もう話し掛けるなど暗に言っているようだが、用件が済んだ以上、こちらとて邪魔する気はない。

「サンキユ。早速行くか」

アスピオは学術都市と言われるだけあり、他の街とは一風変わっている。街中を歩きながらエリシアは辺りを見回した。洞窟の中に作られているため太陽の光は届かないが、代わりに淡い青の光が照明として設置されている。

建造物もいかにも図書館のように堅苦しい学術都市と言った作りだし、狭い場所に作られているせいか階段が多い。

だがそのお陰で意外にも早く、天才魔導士が住むと言う小屋が見つかった。他の建物と比べ、明らかに浮いていたからだ。

「ここみたい。絶対入るな、モルディオって書いてるし」

エリシアが指差したのは小屋の扉。

そこにはでかかと『絶対入るな、モルディオ』と殴り書きがしてある。ユーリはおもむろにドアノブに手を回し、開けようと試みるが鍵が掛かっていたため開けなかった。

「開かねえな」

「普通逆だよ、ユーリ。開かないなら魔術で壊してみる？」

「エリイが怖いです……」

「なに、悪党の巢に乗り込むのに遠慮なんていらないうて」

しかしそこでエリシアは術をおうとして止める。ユーリはモルディオの顔は見えていないと言っていたが、それは本当にモルディオなのだろうか。アスピオの魔導士たちは殆ど街を出ることがない。おまけに皆、研究大好き人間である。果たしてそんな者たちが下町で盗みを働くだろうか。脱獄に誘拐、不法侵入まで加われば本当に洒落にならない。

モルディオの小屋にて

「だ、駄目です。これ以上罪を重ねないでください」

「なら、ボクの出番だね」

一人焦るエステルを尻目にカロルは、言うな否や扉を簡単に開けてしまった。その鮮やかな手際はとても十二歳の少年とは思えない。一体どこで習ったのだろうか。意外な特技だ。

エリシアも簡単な鍵なら開けれるが、こつも上手くは出来ないし、時間もカロルより掛かる。

「カロル、魔狩りの剣なんか辞めてそっちの仕事に就いた方が向いてない……？」

「ま、ちよろいもんだね」

ユーリはつかつかと扉を開けて中に入っていく。完全に不法侵入だが、全く気にしてないらしい。エリシアも心を決めてユーリに続く。こうなれば自棄だ。もうなんでもこいである。

エステルはというと、信じられないといった面持ちで二人を見つめていた。鍵を開けてアスピオの中に入った時でさえ、渋っていたのだから驚くのも無理は無い。

「ええい、脱獄に誘拐までやっちゃったんだから、今更不法侵入なんて怖くないんだから！」

「待つて！ ボクも行くよ」

「あ、待ってください！ もうどうしてこつ……」

カロールもユーリとエリシアに続き、最後まで渋っていたエステルも結局は入ることになった。小屋の中は一言で表すなら、まるで泥棒にでも荒らされたかのような有様だった。

二階建てのようだが、部屋の端には本棚から抜かれた本が山になつて積まれており、殴り書きされたメモやくしゃくしゃになった紙などが床に散らばっている。

「すつこつ……。こんなんじゃ誰も住めないよ」

足の踏み場もない床をどうにか進みながらカロールが呟く。実際のモルディオが住んでいるのだから、住めないは間違いだ。

だがカロールがそう言いたい気持ちも部屋を見れば分かる。これでは何がどこにあるかさっぱり分からないではないか。正に本の海である。

「その気になりやあ、存外どんなとこだつて食つたり寝たり出来るもんだ」

「住めば都とも言うしね。カロールだつてダングレスト、好きでしょ？」

エリシアやカロールの故郷、ギルドの巣窟と言われるダングレストはトルビキア大陸に位置することから、湿気が多く、雨が降ることも多い。他の大陸から来た者には鬱陶しいらしいが、住み慣れた者はそうは思わないのと同じことだ。それが当たり前、だから。

つまりモルディオにとっては普通なのだろう。

「あ、うん。そう言うことか」

「ユーリ、先に言うことがありますよ！」

中に入ってまで礼儀を気にするのはエステルらしい。勝手に入っている時点で礼儀も何もあつたものではないと思うのはエリシアだけだろうか。

しかし言い出したエステルはこれで結構しつこい。律儀なのだろうが、対応に困るのも確かだった。彼女の気持ちも分かるのだが、エリシアとユーリは既に指名手配されているのだ。

「こんにちは。お邪魔してますよ」

当のユーリはまるつきり感情の籠っていない、かなりの棒読みである。既に玄関から小屋の中に足を踏み入れているのは実にユーリらしい。エリシアもただ立っている訳にも行かず、ユーリの後に続いて中にお邪魔した。

「鍵の謝罪もです」

「もう勝手に入った時点で謝っても無駄な……」

「そんなことないです！　ね、エリィ」

エリシアが振り向けばエステルがにつこりと笑っている。反論は許しませんと顔に書いているではないか。

反論しようにもこれ以上、エステルの笑顔は怖くて見ていられない。普段、物腰は柔らかだし、怒ることもない。なのに時々怖い時があるのだ。

「え、そんな……はい、そうですね」

「カロールが勝手に開けました。ごめんなさい」

ユーリの口から出た声はまたも棒読みだった。エステルも先にユーリに言うべきではないだろうか。真っ先に小屋に入ったのは彼であるが、思いつつも声には出せない訳で。

カロールがユーリだって入ろうとしてたじゃん、との声が飛ぶがユーリは当然の如く無視。

「実行犯はカロールでユーリが主犯だと思っけど見つかったら、私とエステルも不法侵入で捕ま……やっぱり、これ以上罪が増えるのは嫌」

「バレなきゃいいんだよ。バレなきゃ」

頭を抱えるエリシアにユーリが軽く答える。

だが悲しいかなエリシアの神経はユーリほど図太く出来てはいない。それがなくても元騎士にしてギルド、獅子の咆哮の首領レオン・クレセントの娘と言う立場なのに。捕まって父に迷惑を掛けることだけはしたくない。

「そう言う問題じゃない。バレなきゃ良いんなら、全ての犯罪者は捕まらないから！」

「ま、そりゃそうだな。これだけ騒いでも何も無いってことは好都合。証拠を探すとするか」

ユーリはそう言うのと遠慮無しに小屋の中を調べて行く。ある意味、彼はマイペースなのだろう。人の話など全然聞いていない上に柵の中まで探る始末だ。

やっぱり自棄だと、自棄しないと腹を括ったエリシアも同じように調べて行く。すると壁立てかけてあった黒板が目についた。

「これは……」

「術式、ですね」

答えたのは未だ入口に佇むエステル。黒板には白墨で白い紋様が描かれている。それは一般人にはとても理解出来ない複雑なものだ。エステルの言うように描かれているのは術式だろう。魔導士なのだからおかしいことではないが、それにしても難しい。

「中に入ったらどうだ？ 寒いだろ、そこ」

ユーリの声に振り向けば、エステルはまだ入口に佇んだままだった。

少々頭の固い彼女はエリシアのように割り切れないらしい。ややユーリに批難めいた眼差しを向けている。

「これ以上、罪を重ねるわけにはいきません」

「そうだけど、入口に居ても中に居ても変わらないと思うよ」

エリシアの言葉にもエステルは頑として首を縦に振らない。その頑なさには彼女の長所でもあるのだろうが、少し融通を利かせてもいいのではないかと思う。そんな所も真面目な幼なじみにそっくりで、ユーリは苦笑した。まだエステルの方がフレンよりはマシだろうが、入り口にいても中にいても不法侵入した事実是不変である。もはや中にいても入り口にいても一緒である。けれど、気持ちの問題なのだろう。

「不法侵入は、禁固一年未満、又は一万ガルド以下の罰金、です」

「それにしても、きつたない字。ボクの方がキレイに書けるよ」

厳しい口調で言ったエステルだが、別の場所を調べていたカロルがやって来たかと思うと、黒板に書かれた字を見つてぼつりと呟く。黒板に書かれた字は所謂殴り書きだ。よほど焦っていたのか擦れて消えている部分まである。何にしても汚いというのは確かだ。

「字が汚いやつは心がキレイって言うけどな」

「なら、ボクは字も心もキレイなんだよ。エステル、術式の意味、分かる？」

そう返す辺り、カロルも結構言うらしい。カロルに言われたエステルはじつと黒板を見つめている。エステルは魔術に詳しいと言ってもその知識は殆どが治癒術だ。

だが黒板に掛かれた術式は見た所、どうも魔導器のもののようにだから、博識な彼女にも分からないかもしれない。魔導器分野は専門的すぎて流石のエステルもお手上げか。

「火を使った術式に似てますが、わたしにはちょっと……エリイはどうですか？」

「多分だけど、イラストョンに凄く似てる。でも魔導器の術式だと思っただけ……」

こればかりは専門の知識が無ければ分からない。エリシアとて魔導器の知識はそれなりにあると自負しているのだが、専門的過ぎて

殆ど理解出来なかった。

三人が黒板に注意を向けていたその時、ラピードが山積みになった本の山に向かって警戒心を露にした。

「えっ？　ぎゃあああゝっ！　あう、あう、あうあうあう」

カロルが声を上げたのと、本の山から白いローブ姿の小柄な人間が現れたのはほぼ同時だった。叫び声を上げて尻餅を付いたかと思うと、カロルは驚くくらい素早い動きでユーリの後ろに隠れた。

ローブの人物がカロルを一瞥すると低い声で呟く。

「……うるさい……」

両手を胸の前で組み合わせる――魔術を扱う前の予備動作。眼前に赤い、火の魔術を表す魔法陣が浮かんだ。

ローブの人物の意図を一瞬で悟ったユーリとエリシアは横に飛ぶ。ちなみにカロルは一人、魔術の射程上に残されたまま。

「え？　あれ、ちょっと！」

「泥棒は……」

虚空に描かれた魔法陣が一際強い輝きを帯びる。今になって状況を悟ったカロルはこめかみを冷や汗が伝うのが分かった。今から避けようとしても間に合わない。避ける前に魔術が発動するだろう。

「うわわわっ、待ってえっ！」

「ぶっ飛べ！」

待てと言われて待つはずもなく、魔術は完成した。カロール目掛けて打ち出される無数の火炎球。火属性下級魔術、ファイアボールだ。距離がある程度あったなら、避けることも可能だろう。

しかしカロールとローブの人物とは正に目と鼻の先、当然逃げる暇なんてあるはずもなく、火球はカロールを直撃した。白煙が生まれ、エリシアたちの視界を覆い隠す。

「ぎゃああ！　げぼげぼ。ひどい……」

白煙が収まった後、尻餅をついたカロールの姿がある。火炎球と言ってもちゃんと威力は抑えてあったようで、軽い火傷程度だろう。髪や服も焦げていない。多少、焦げていたとしてもそれはまあ、仕方がない。

エリシアはカロールに近寄ると両手を胸の前で組んだ。

「――聖なる活力、ここに。ファーストエイド。はい、いっちょ上がり」

「……ちよつと、あんた!？」

術の完成と共に金色の粒子が集束する。

すると突然、一部始終を見ていたローブの人物が驚きの声を上げ、エリシアの腕を掴んだ。その拍子に頭をすっぽりと覆っていたフードが外れる。

「お、女の子っ!？」

エステルが驚くのも無理はない。エリシアも声に出さないだけで十分驚いていた。フードの下から現れた顔は整ってはいるが、幼さを残した少女のものだった。

赤み掛かった茶の髪に、エステルよりも少し濃い緑の瞳。

だが彼女にはその年頃の少女にあるはずの子供らしさ、が全くと言っていいほど感じられない。

次の瞬間、いつの間に移動したのか、ユーリが鞘から抜いた剣を少女の喉元に突き付けていた。

「こんだけやれりゃあ、帝都で会った時も逃げる必要なかったのにな」

少女は詠唱から魔術の発動までのタイムラグが驚くほどに少ない。ここまで円滑に魔術を発動出来るなら帝都で追い詰められた時も逃げる必要はなかったはず。

すると少女は訳が分からないと言った様子でユーリを睨み付けた。

「はあ？ 逃げるって何よ。なんで、あたしが、逃げなきゃなんないの？」

ユーリが剣を納めるのと同時に少女は掴んでいたエリシアの手を離してくれた。もしかと思うが、初見で気付かれたのだろうか。そう言えばリタ・モルディオは魔導器研究の第一人者とも聞いたことがある。エリシアもまさか年端もいかぬ少女だとは思わなかったが、彼女は不快感を隠そうともせずに長身のユーリを睨みつけていた。

「そりゃ、帝都の下町から魔導器の魔核を盗んだからだ」

「いきなり、何？ あたしが泥棒ってこと？ あんた、常識って言葉知ってる？」

「まあ、人並みには」

どの口が言いかとも思ったが、ここでそれを口にしても仕方ない。少なくとも常識というものが僅かでもあれば、人の家の鍵まで勝手に開けた上にあまつさえ、家の中を漁るという行動は起こせまい。それはエリシアも同じであるため、偉そうなことは口が裂けても言えない。これしか方法がなかったとは言え、犯罪であることには変わらないのだ。

「勝手に家に上がり込んで、人を泥棒呼ばわりした揚句、剣を突き付けるのが人並みの常識!？」

この場合、人並みと言うよりユーリの常識ではないだろうか。話によるとモルディオなる人物は、ユーリとラピードに見付かって真っ先に逃げたと言うし、今の彼女の行動を考えるとそのモルディオが少女と同一人物とは考えづらい。

それに何より、先程からラピードが彼女に反応したのは、本の山から出て来た一度きり。つまり彼女は犯人ではない。もし彼女が魔核泥棒なら、ラピードは激しく吠え立てているだろう。

無論、ユーリも気付いているだろうが、何か考えがあるに違いない。エリシアは大人しく、話の行方を見守ることにする。

「ちょっと、犬！ 犬入れないでよ!」

「犬じゃなくてラピードね」

エリシアの指摘にラピードはわん、と一声鳴いた。それだけは譲れないらしい。

エステルも気位のようなものを感じると熱心に言ってたし。ラピードには重大な問題に違いないが、彼女にしてはどうでもいいことだ。

「どうでもいいわそんな事！」

「どうしても良くないって、ラピードには。ね、ラピード」

その通りだと言わんばかりに、ラピードはもう一度、わんと吠えた。

すると玄関から移動したエステルが少女の前に立って頭を下げる。それには流石の彼女も戸惑ったらしく、無意識だろうが後ずさった。

「な、なによ、あんた」

リタ・モルディオ

「わたし、エステリーゼって言います。突然、こんな形でお邪魔してごめんなさい！……ほら、ユーリとエリイ、カロールも」

ほら、と促すエステルには有無を言わせぬ何かがある。不可抗力とも言えないが、取りあえず謝った方が良さそうだ。勿論、エステルが怖いため、である。

ユーリは謝る気はさらさらなく、あさつての方向を向いているが、カロールとエリシアは素直に頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「えーっと、勝手に入ってごめんね」

「で、あんたらなに？」

二人の謝罪を聞いた少女は盛大にため息をついた後、そもそもの理由を尋ねた。彼女の疑問はもつともである。

勝手に家に上がり込まれたかと思えば、見ず知らずの相手に剣を突き付けられる。少女が下町の魔核が盗まれた件と全く関係ないのなら迷惑極まりない話だ。

追い出されないだけまだマシではないか。

「えと、ですね……このユーリとエリイ、エリシアと言う人は、帝都から魔核泥棒を追って、ここまで来たんです」

「それで？」

正確に言えばエリシアは帝都から魔核泥棒を追って来た訳ではない。

そもそも一度、ダングレストに帰ろうと思っていたのだが、何の因果か脱獄の上に誘拐まで。当分は帰れそうにない。というか帰りたくない。とエリシアは切実に願う。怖くてとても父の顔を見られないからである。

ユーリたちは知らないだろうが、エリシアにしてみれば本当に恐ろしい。

「魔核泥棒の特徴つてのが……マント！ 小柄！ 名前はモルディオ！ だっただよ。で、実際のところどうなんだ？」

「ふん、確かにあたしはモルディオよ。リタ・モルディオ。でもそんなの知ら……あ、その手があるか。ついて来て」

ユーリが見た『モルディオ』は小柄で白のローブを纏っていた。顔も見えなかったため、性別も分からなかったらしい。言うまでもなく年齢も。

少女もといリタ・モルディオは呆れた様子でユーリを見ると、何かを思い出したようであ、と間の抜けた声を上げた。顎に手を当てた考え込む姿勢でユーリの前を通り過ぎる。

「はあ、お前、意味わからんねえって。まだ、話が……」

「いいから来て。シャイコス遺跡に、盗賊団が現れたって話、せっかく思い出したんだから」

リタは有無を言わさぬ口調で不服そうに言うユーリを遮った。そう言えば街中でも盗賊団がどのとか騎士がどのとか話していた気がする。

大方騎士というのもフレンのことなのだろう。リタが口にしたそのシャイコス遺跡に下町の魔核を盗んだ盗賊団なる者たちがいるのか。

「盗賊団？ それ、本当かよ」

「協力要請に來た騎士から聞いた話よ。間違いないでしょ」

間違いないでしょ、と言葉を返すとリタの姿が本の海に消える。

そこで四人と一匹は、リタに聞こえないよう細心の注意を払って小声で話を始めた。

やはりエリシアが街で小耳に挟んだ（盗み聞きともいう）話に間違いはないらしい。

『その騎士ってフレンのことでしょうか？』

とエステル。十中八九フレンに違いない。盗賊団を追うという選択をしたのならまずフレンに間違いないだろう。ユーリやエステルから聞いた『フレン』は盗賊団を放置しておくような人物ではない。しかし何故かユーリが憐れむような顔をしているではないか。

『……だな。あいつ、フラれたんだ』

『フラれたは流石にフレンが可愛いそうだと思うけど。普通に断られたって言ってあげればいいのに』

フラれたんだ、は流石に身も蓋もない。リタは天才魔導士なのだから、遺跡に同行を願うのも頷ける。魔導士の存在は必要だろうし、そもそもアスピオは帝国の直属の都市だ。要請を受ければ断れないはずなのだが。

何にしてもリタが断ったからと言って、別に嫌いだからという理由ではないはずだ。

『そう言えば、外にいた人も遺跡荒らしがどうか言ってたよね？』

これはカロルだ。魔導士たちの会話に耳を傾けていたのは何もエリシアだけではない。頼りなく見えてもその辺りはギルドに属しているだけあってしっかりしている。

盗賊団の目的はまず魔核^{コア}だろう。確かに辻褄は合っているような気もするが……。

『つまり、その盗賊団が魔核を盗んだ犯人ってことでしょうか？』

エステルが一つの可能性にたどり着いたその時、リタがエリシアたちの前に現れた。

魔導士たちが纏うローブから着替えたリタは何と言うかよく言えばエキセントリック、悪く言えば奇抜とも言える服装である。

赤み掛かった髪を飾るゴーグルにどこか異国情緒溢れる赤と黒を基調とした服。胸元にはペンやメモ帳、ルーペやメガジャーが入られており、右腕には細長い黄色のリボンが巻かれていた。

「相談、終わった？　じゃ、行こう」

言うなり、リタは一人すたと玄関に向けて歩き出す。聞いたところによると彼女は十五歳らしいが、これではエステルよりほどしっかりしている。……本人に言えば怒られそうであるが。

「とか言って、出し抜いて逃げるなよ」

「来るのが嫌なら、ここに警備呼ぶ？　困るのはあたしじゃないし」

ユーリが何気なく言うが、リタは表情を変えることなく、こちらを振り返った。緑の瞳からは何の感情も読み取ることとは出来ない。警備を呼ぶというのなら、彼女は本当にそうするだろう。

警備を呼ばれば困るのはエリシアたちであってリタではない。自分たちは勝手にこの街に入ったのだから、見つければ即追い出されるだろう。やっと手がかりを掴みかけた時にそれは不味い。

ユーリも何が賢明か、分かっているはず。

『行ってみませんか？ フレンもいるみたいですし』

『流石に警備呼ばれたら色々と面倒だしね。戦うにしても逃げるにしても都合、悪くなっちゃうよ』

エステルとエリシアは沈黙しているユーリに言葉を掛ける。警備をきり抜けられない、と言うことではない。ただここで逃げるにしても戦うにしても不利な状況にしか転ばないのだ。

その点、リタに同行すれば運が良ければフレンに会えるかもしれないし、下町の魔核を盗んだかも分からない盗賊団を探ることが出来る。

「捕まる、逃げる、ついてくる。どーすんのかさっさと決めてくれない？」

「分かった。行つてやるよ」

リタの催促にユーリはしばらく考えた後、頷いた。元から選択肢などないに等しいのだ。ならば答えは一つしかない。リタが、シャイコス遺跡は街を出て更に東よ、と教えてくれる。

一行はリタの小屋を出て、裏口へと向かった。

「あんたたち、こんな所から来たの…… 呆れた」

呆れた、とりたは本当に呆れたような顔をした。

こんな所というのはエリシアたちが入って来た裏口である。先程の騎士たちとのやり取りもあって、正面から出れないからだ。いくら騎士たちが抜けていても、彼らとエリシアたちが話したのはつい先ほどだ。流石に気づかれてしまう。その点、裏口からならばれる心配はない。

「正面には怖いお兄さんたちがいるからな」

「そうそう。自己紹介してなかったよね。私はエリシア。リタって呼んでもいい？」

冗談半分でユーリが言う。怖いと言うか間抜けというか。彼らとて先程見た顔をすんなり通してくれるほど馬鹿ではあるまい。

エリシアは戸惑うリタの手を取って柔らかく微笑んだ。今までの態度を見れば冷たくあしらうかと思いきや、リタは何も言わずに硬直している。

「どうしたの？」

不思議に思っただけ顔を覗き込もうとするが、ぱつと顔を逸らされた。僅かに頬が赤く染まっていたのは間違いではないだろう。

「別になんでもない。あんたの、エリシアの好きに呼んだら？」

「そうする」

魔導器しか信じてない。そう思っていたのにリタは、エリシア手を振り払うことなんて出来なかった。にこにこ能天気そうに笑っているエステルしてもそうで、人間なんて信じられないはずなのに。リタは己の中に生まれつつある思いに戸惑っていた。

アスピオから東に進むこと少し、一行の前に朽ち果てた遺跡が現れた。遺跡としての形は何とか保っているが、崩れ落ちているものも多い。雑草は伸び放題で、手入れも全くと言っていい程されていない。地面には石柱が無造作に転がっていたり、石畳はひび割れていたり、まさに古代遺跡と言った雰囲気だ。

皆の前を歩いていたらリタが立ち止まって振り返る。

「ここがシャイコス遺跡よ」

「騎士団の方々、いませんね」

エステルが辺りを見回しても人の姿はないし、気配も感じられない。

しかしラピッドが見下ろした地面、石畳ではなく土が露出した部分には確かに複数の足跡がある。ただ靴跡だけで騎士か盗賊か判別出来る訳ではないため、意味がないと言えば意味がない。

「騎士団か、盗賊団か、その両方つてとこだろ」

「でもこの辺り一帯に人の気配ないよ？」

いくら気配を消すことに長けていたとしても、騎士はともかく、盗賊が完全に気配を絶てるとは考えづらい。と未だ熱心に足跡を見つめている四人に、痺れを切らしたリタが急かした。

「ほら、こつち。早く来て」

「モルディオさんは暗がりに関連込んで、オレらを始末する気だな」

ユーリが茶化すようにリタを見る。ユーリには他人の神経を逆なでする才能があるのだろうか。無論、知っていてやっているのだから、徹底ぶりにエリシアも苦笑せずにはいられない。

リタもリタで、しばらく黙ったかと思えば、幼さの残る端整な顔に不気味な笑みを貼付けていた。

「……始末、ね。その方があたし好みだったかも」

「不気味な笑みで同調しないでよ」

「な、仲良くしましょうよ」

リタの不気味な笑みを目撃したカロルは、つつ込まずにはいられない。というかそこは同意してはまずくないのだろうか。エステル

がそれでも何とか場を取り繕おうと微笑むが、その笑顔は完全に引き攣っている。

エリシアは纏まりと言うものが全くない（当たり前だが）一行に人知れずため息をつく。ラピードもエリシアに同意するようにくうん、と鳴いた。

大切なもの

それから暫くの間、辺りを探したが、一行は盗賊団はおるか騎士の姿さえ見つけることは出来なかった。しんと静まり返っている。遺跡はそれなりに広いのだが、見通しはそれほど悪くない。起伏の上に立っている訳ではないので、ある程度見通しが利くのだ。だと言っのに人っ子一人見つけられない。本当に騎士や盗賊たちがいるかどうかも疑わしいほど静かである。

「騎士団も盗賊団もいねえな」

「もっと奥の方でしょうか？」

「ううん。あれじゃあ進めないし、倒れた柱や石像を動かした形跡はないから違うと思う」

ユーリや眩き、エステルが向ける視線の先、エステルもつられるようにそちらを見る。遺跡の奥の方は足場が悪い上に石像や柱が倒壊しているために進めない。それに騎士団にしても盗賊団にしても、障害物を動かした形跡もないし、奥に進んだとは考えづらいだろう。では秘密の地下室でもあるのだろうか。エリシアが冗談交じりにそう考えていると。

「まさか、地下の情報が外にもれてんじゃないでしょうね。ここ最近になって、地下の入り口が発見されたのよ。まだ一部の魔導士にしか知らされてないはずなのに……」

どうやら推測は当たっていたらしい。それまで沈黙を貫いていたリタが顎に手を当て、唸るように呟く。

だが情報が漏れるにしても一部の魔導士にしか知らされていないのなら、内通者がいると考えるのが自然だ。でなければ情報が漏れるはずがない。

「それをオレらに教えていいのかよ」

「しょうがないでしょ。身の潔白を証明するためだから。……発掘の終わった地上の遺跡くらい盗賊団にあげてもよかったけど来て正解だったわ」

オレらに教えていいのかよ、と言ったのは腕を組み、石の壁に持たれ掛かるような格好のユーリ。機密に近い情報を何の関係もない自分達に教えていいのか、ということである。身の潔白を証明するためとは言え、会ったばかりの自分たちに。

リタの言葉から地上の遺跡の発掘は終わっているものの、地下は発見されたばかりで発掘も途中なのだろう。もし盗賊たちが地下室を知っているのなら、貴重な魔核を奪われるかもしれない。

「地面に擦れた跡があるねなら、早く追いかけないと。これを動かせばいいんですよ？」

リタが見つめている地面をカロルも見下ろした。そこには重い物を引きずったような形跡。その上には翼を広げた女神像。雨に打たれ、所々欠けた箇所もある。

カロルは自らの倍以上もある翼を背負った女神像を動かそうとするのだが、少年一人の力で動くほど、石像は軽くはない。びくともしないし、息が上がるだけだ。

「はあ、はあ」

「ほら、行くぞ。もうちつと頑張れよ」

「あ、う、うん……」

見兼ねたユーリも石像の台座に手を添えて手伝う。するとカロル一人では微塵も動かなかった象がゆつくりと後退して行く。最後の力を込めれば、なんと女神像の下から地下へと続く階段が表れた。しっかりとした石造りの階段にも入口で見たものと同じ、土のついた足跡が残っている。この足跡からも騎士か盗賊か判断するのは難しい。

「階段、ね。同じように複数の足跡。間違いないわね」

「カロル、大丈夫です？」

エリシアは階段の下を覗き込んで見るが、薄暗くてはつきりと見えない。

エステルが座ったまま、肩で息をする少年を心配する。息も絶え絶えと言った様子なのにカロルは、こ、これくらい余裕だよと言いつ張った。無理をしているのは誰の目にも明らかだが少年の小さな矜持だろう。

そんな気遣いとは無縁のリタはカロルなど気にもとめず、さつさと階段を下りていってしまった。

「じゃ、行くわよ」

遺跡の地下は思った以上に広く、下には土の代わりに水が湧き出ており、その上に石の通路が作られている。かなり頑丈に作られているようで、入り口近くに重大な欠損は見つけられない。

地上から差し込んだ光が青い水面を照らしていた。何者も侵しがない静謐な雰囲気。遺跡を目にするのも、何もかも初めての体験であるエステルは地下に広がる光景に息をのみ、ゆっくりと周囲を見渡す。

「遺跡なんて入るの初めてです……」

「そこ、足元滑るから気をつけて」

周りばかりで足元が目に入っていないエステルのために、リタがさりげなく注意を促す。エリシアはそんな彼女を見て密かに笑った。やはりリタは優しいと思うのだ。それが表に出ないだけで悪い子ではない。

嬉しそうなエリシアや何か言いたそうなユーリを含めた皆の視線に気付いたらしい彼女は、ふいと顔を逸らした。照れているのだろうか。

「なに見てんのよ」

「モルディオさんは意外とおやさしいなあと思ってね」

「うん、やっぱりリタは優しいね」

エリシアの言葉に今度はユーリが頭を抱えた。彼にしてみれば皮肉のつもりで、彼女のように褒めたつもりはない。エリシアも変な部分でどこかエステルと通じる所があるらしい。

勿論、エリシア本人はそのことに気づいてすらいなかった。鋭いことが多い彼女なのに、こんな所は鈍いのだ。

「はあ……やっぱり面倒を引き連れて来た気がする。別に一人でも問題なかったのよね……」

「リタはいつも、一人でこの遺跡の調査に来るんです？ 罨とか魔物とか、危険なんじゃありません？」

明らかに皮肉だと分かるユーリにふんわりと笑うエリシア。屈託のない彼女の笑みに少々毒気を抜かれたリタは深いため息をついて視線を遺跡に向けた。

いくら魔導士といえど、罨や魔物の相手をするには一人では危険なのではないのか。そもそも魔術とは仲間の援護があつてこそ真価を発揮する。詠唱中はどうしても無防備になってしまうからだ。

そうエステルが尋ねると、リタは事もなげにこう答えた。

「何かを得るためにリスクがあるなんて当たり前じゃない。その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる」

躊躇いなど微塵もない。リタははつきりと言い放った。犠牲もなしに何かを手に入れようなんて思わない。そう言いたいのだろう。とても十五歳の少女の言葉とは思えない。そう言わせるだけの何かを彼女は背負っているのだろうか。

「傷つくのがリタ自身でも？」

「そうよ」

「悩むことはないんです？ 躊躇うとか……」

歩き出したリタにエステルは尚も言葉を投げ掛ける。自分は悩んで、躊躇ってばかりだとエステルは思う。城から抜け出す時も、フレンを追うと決めた時も。だからエステルは迷いがなく、己の信念を持つリタが羨ましかったのかもしれない。

それは何もリタに限ったことではなく、エステルやユーリもそれに当てはまる。彼女たちは自分がすべきことを分かっているのだから。迷ってばかりの自分とは大違いだ。

彼女らは彼女らで、自分は自分だと分かっているのに、聞かずにはいられなかった。

「何も傷付けずに望みを叶えようなんて悩み、心が贅沢だから出るのよ。それに、魔導器はあたしを裏切らないから……。面倒がなくて楽なの」

リタは息継ぎもなしに言い切ると、一足先に歩いて行ってしまふ。心が贅沢だから。エリシアはリタの言葉を噛み締めるように、頭の中で反芻する。言い切ったリタはどこか寂しそうに見えた。

「なんか、リタって、凄いです。あんなにきっぱりと言い切れて」

「何が大切なのか、それがはっきりしてんだな」

ほうとリタを見つめるエステルにユーリが頷く。十五歳とは信じられないほど彼女は強い。何が大切かを理解している。大の大人でも難しいものを少女は分かっているのだ。

「私の勘違いかもしれないけど、少し悲しい顔してた。魔導器なら裏切らないって……寂しいよ」

「……そうだな」

ユーリもこの時ばかりは真剣な表情で同意した。

十五歳の彼女に魔導器は裏切らないとまでいわしめる理由。エリシアには想像も付かないが、一人でいる寂しさなら分かる。魔導器なら裏切らない。確かにそうだろう。

でも魔導器は人のぬくもりを与えはくれない、話しかけてはくれない。エリシアたちは何とも言えない気持ちでリタの後を追った。

神秘的な遺跡内には盗賊団の姿も騎士団の姿もない。いるのは魔物だけで結局、誰も見かけぬまま、遺跡の奥まで来た時だった。目の前に見上げるほどに強大な何か。遺跡を守るゴーレムに似た、それよりも大きい人型魔導器に、弾かれたようにリタが近寄る。

魔核がないのか、それとも壊れているのか、動く気配はない。

「あ、おい！」

「うわ、なにこれ?! これも魔導器？」

あまりの大きさにエステルが目を輝かせ、カロルは驚いて後退る。エリシアもゴーレムは見たことはあるが、これほど巨大なものは初めてだ。

リタは早速、己の世界に入っている。

「動く気配ないし、動力ないのかな？」

「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器が欲しいな」

「ちよつと不用意に触らないで！ この子を調べれば、念願の自立術式を……あれ？ うそ！ この子も魔核がないなんて！」

ユーリが無造作に人型魔導器に触れると、じっくり眺めていたはずのリタから鋭い声が飛ぶ。

本来なら魔核が嵌まっている部分は空だ。何者かにより既に取り外された後である。もしや話にあった盗賊団の仕業かもしれない。リタががくりと肩を落とし、人型魔導器全体が見渡せる真正面に移動した。

するとその時、何かの気配を察したラピードが激しく吠え立てる。

ラピードの視線は、右上部に設置された通路に向けられており、そこにはアスピオの魔導士であることを表す白いローブにフードを被った人物がいた。

背格好からすると男だろうが、彼はエリシアたちに気づいて体を震わせる。何か後ろめたいことでもあるのだろうか。怪しいと言うほかない。

「リタ、お前のお友達がいるぜ」

「……友達ではないと思うよ」

どう考えてもリタの友人ははずがなかった。そもそもここへは盗賊か騎士を追ってきたのだ。騎士であるはずがないし、アスピオの魔導士なら堂々としていればいい。それが出来ないということは、

残る答えは一つ、盗賊である。

軽口を言い合うユーリとエリシアに構うことなく、リタはローブの人物を鋭く睨み付けた。

「ちよつと！ あんた、誰？」

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だ！ お前たちこそ何者だ！
ここは立ち入り禁止だぞ！！」

ローブの人物——男はわめき立てるが、リタは全く気にした様子はない。むしろ更に冷ややかな視線を男に向け、ふんと鼻で笑った。そう、この時点でおかしいのだ。裏口から入り、魔導士にリタについて聞いた際、彼は言っていたではないか。まるで珍獣でも見るような顔で、あの変人に客だと。

「はあ？ あんた救いようのない馬鹿ね。あたしはあんたを知らないけど、あんたがアスピオの人間なら、あたしを知らないわけないでしょ」

「流石リタね……」

腰に両手を当てて呆れるように、馬鹿にするように言う（実際どちらも正しいが）。無茶苦茶とも言えなくはないが、彼女らしいのかもしれない。

堂々とあたしを知らない奴はアスピオの人間じゃないとまで言い切ったことから、きっと自覚はあるんだろうとエリシアは勝手に納得することにした。

「くっ！ 邪魔の多い仕事だ。騎士といい、こいつらといい！」

男は懷から取り出した魔核を人型魔導器に嵌める。するとどうだろう。うんともすんとも言わなかったゴーレムの瞳に光がともったかと思うと、その太い腕で目の前にいたリタを吹き飛ばした。

一瞬のことで反応出来なかった少女の体が思い切り壁に叩き付けられる。

真っ先に近寄ったエステルが慌てて治療術を施す。掲げた手から溢れた暖かい光が傷付いたリタの体を癒した。ただ治療の様子を見守っていた少女はある事に気付き、思わずエステルの武醒魔導器が付けられている左手を掴んだ。

「あんた……」

エリシアに続き、エステルまでも同じなのか。リタがずっと追いかけていた公式の手掛かりが目の前にある。

手を捕まれたエステルは訳が分からず、あたふたするばかり。

「え、えっ？」

「エステル、リタ！ 大丈夫？」

人型魔導器が無差別に振り回す腕を避けながら、エリシアが声を掛ける。

一杯一杯なカロールからはサボってないで手伝ってよ！ と涙声で叫ばれる始末だ。とその隙に男が必死に横を通り過ぎて行った。ユーリヤエリシアが止める間もない。

「あ、はい！ 大丈夫です」

「あゝ、もうしょうがないわね！ 速攻ぶっ倒して、あの馬鹿を追うわよ！」

追おうにも人型魔導器を放って置けない。リタは仕方なく立ち上がり、魔術の詠唱に入った。

「堅牢なる守護を、バリアー」

人型魔導器の攻撃を受け止めようとしていたユーリの耳にエステルの声が届き、眼前に透明な壁が生まれた。

しかしそれは直ぐに見えなくなる。ついで衝撃。

だが結構な質量を受け止めたにしては衝撃は思ったよりも少なかった。これも魔術のお陰か。

ユーリは、一歩後ろに下がると魔導器に向けて剣を振り上げた。

生まれた衝撃波がまともに足に直撃し、人型魔導器はバランスを崩してうずくまる。

致命的なダメージには成り得ない。ちつと舌打ちし、仕方なく距離を取った。それはラピードやカロールも同じでユーリ同様、後ろに下がったまま、攻めあぐねているようだ。

「ささやかなる大地のざわめき、ストーンブラスト！」

「舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け、ウィンドカッター！」

ユーリが後退した時を見計らい、リタが手にした鮮やかな帯が翻り、エリシアの周りに魔法陣が浮かぶ。二人の声が重なった瞬間、人型魔導器の足元から噴出した無数の石つぶてが直撃し、刃となった一陣の風が切り裂いた。

ダメージも限界を超えたのか、支えを失った巨体がぐらりと倒れる。地響き共に人型魔導器は前のめりに倒れたまま、ぴくりとも動かない。

エリシアは、もう戦う必要がないことを悟るとゆっくりと息を吐いた。

「終わったね」

「ああ、何とかな」

「魔導器の悪用は許さない！」

リタだけが言いようのない怒りにわなわなと拳を震わせていた。

好き勝手に、私利私欲に魔導器を扱う男が許せなかった。魔導器はただの物ではないのに。

動かなくなった人型魔導器に手を当て、謝るとリタは倒れた背中に上る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8121x/>

金の満月が昇る時

2011年11月23日20時48分発行